鳥取県教育文化財団調査報告書　107

一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

長者屋敷遺跡
坂長下屋敷遺跡

2006

財団法人　　鳥取県教育文化財団

一般県道米子岸本線(坂長バイパス)地方道路交付金工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

長者屋敷遺跡　坂長下屋敷遺跡

2006　財団法人　鳥取県教育文化財団

正 誤 表

頁	訂正箇所(行数等)	誤	正
15	24行目	第13図1	第13図16
24	1行目	第6章第2節	第6章第3節
76	9行目	(第73図)	(第67図)

117頁　　第20表　長者屋敷遺跡遺構一覧表

誤

遺構名	構造	桁行	梁行	主軸方位	出土遺物	備考
北柱群	側柱建物	9間(21m)	3間(6.5m)	N-3～4°-E		
南柱群	側柱建物	9間(21.5m)	3間(6.5m)	N-3～4°-E		
3H柱群	側柱建物？	3間(約3m以上)	1間(約3.0m以上)	N-1～2°-E	陶磁器片	中世？
5H柱群	側柱建物	6間(約15m)	3間(6.5m)	N-90°-E	陶磁器片	中世？

遺構名	幅	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	備考
SD2(北溝)	1.0m	0.3m	W-2°-N	陶磁器片	中世？
SD3(西溝)	1.3m	0.3m	N-4°-E	須恵器片	
SD4	2.0～2.8m	1.3～1.5m	N-4°-E	須恵器(8世紀後半)	
SD16	2.1m	0.6m	W-10°-S	土師器(8～10世紀)	
SD17	1.1m	0.2m	W-10°-S		
SD18	0.8m	0.5m	N-10°-E		

↓

正

遺構名	構造	桁行	梁行	主軸方位	出土遺物	備考
北柱群	側柱建物	9間(21m)	3間(6.5m)	N-3～4°-E		
南柱群	側柱建物	9間(21.5m)	3間(6.5m)	N-3～4°-E		
3H柱群	側柱建物？	3間(**約5.8m以上**)	1間(約3.0m以上)	N-1～2°-E	陶磁器片	中世？
5H柱群	側柱建物	6間(約15m)	3間(**6m**)	**N-0°-E**	陶磁器片	中世？

遺構名	幅	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	備考
SD2(北溝)	1.0m	0.3m	**N-88°-E**	陶磁器片	中世？
SD3(西溝)	1.3m	0.3m	N-4°-E	須恵器片	
SD4	2.0～2.8m	1.3～1.5m	N-4°-E	須恵器(8世紀後半)	
SD16	**2.1～2.3m**	0.6m	**N-80°-W**	土師器(8～10世紀)	
SD17	1.1m	0.2m	**N-80°-W**		
SD18	0.8m	0.5m	N-10°-E		

鳥取県教育文化財団調査報告書　107

一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

長者屋敷遺跡
坂長下屋敷遺跡

2006

財団法人　　鳥取県教育文化財団

坂長下屋敷遺跡　ＳＢ２・３（南から）

巻頭図版２

長者屋敷遺跡　ＳＤ４（南から）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子を具体的に語ることができるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において一般県道米子岸本線（坂長バイパス）の改良工事が着々と進められているところでありますが、当財団は、鳥取県からの委託を受け、この事業に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

そのうち、伯耆町坂長にある長者屋敷遺跡や坂長下屋敷遺跡で古代会見郡衙に深く関わる建物跡などを確認し、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

発掘調査終了直前には現地説明会を開催し、多くの方々に御見学をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、鳥取県西部総合事務所県土整備局、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成18年８月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　有　田　博　充

例　言

1．本報告書は、「一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事に係る埋蔵文化財発掘調査」として実施した長者屋敷遺跡と坂長下屋敷遺跡の遺跡調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。
長者屋敷遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字長者屋敷2550ほか
坂長下屋敷遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字下屋敷2362ほか

3．本発掘調査では、長者屋敷遺跡2300㎡、坂長下屋敷遺跡400㎡を調査した。

4．本報告書における方位、座標値は、公共座標第Ⅴ系の座標値である。また、レベルは海抜標高を表す。

5．本報告書に掲載した地図は、岸本町（現伯耆町）発行の１／2,500、１/5,000地形図、および国土地理院発行の１／50,000地形図を使用した。

6．本発掘調査にあたり、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　山中敏史氏に現地指導を頂いた。また出土遺物を整理・評価するにあたり、鉄関連遺物の分類をたたら研究会委員　穴澤義功氏にお願いした。転用硯の顔料分析については独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　高妻洋成氏にお願いし、玉稿を賜った。記して深謝いたします。

7．本発掘調査における遺跡の航空写真、現地における基準点測量、および方眼測量を測量業者に、珪藻分析、および寄生虫卵分析を専門業者に委託した。

8．掲載した遺構図面は文化財主事が作成し、文化財主事または整理作業員が浄書を行った。

9．遺物の実測、浄書は文化財主事および整理作業員が行い、各段階で文化財主事が検討を行った。

10．遺構および遺物の写真撮影は文化財主事が行った。

11．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

12．本報告書の作成は文化財主事が協議して行い、森本、加藤、坂本が執筆した。文責は目次、および各項目の文末に記載した。

13．現地調査、および報告書の作成にあたっては上記の方々のほか、多くの方々からご指導、ご助言、およびご支援いただいた。明記して感謝いたします。（敬称略、順不同）

浅川滋男（鳥取環境大学）　新井宏則（南部町教育委員会）　岩田文章・下高瑞哉（米子市教育委員会）　角田寛幸（伯耆町教育委員会）　佐伯純也・高橋浩樹（財団法人米子市教育文化事業団）　重根弘和（岡山県古代吉備文化財センター）　杉本良巳（前山陰歴史館館長）　富長源十郎（鳥取県文化財保護指導員）　西尾克己（島根県教育庁）
東森市良（島根考古学会）　廣江耕史（島根県埋蔵文化財調査センター）
湯川善一（株式会社二友組遺跡調査部）

凡　　例

1．遺跡の略称は長者屋敷遺跡はチョウジャ、坂長下屋敷遺跡は下ヤシキとした。

2．遺物の注記にはすべて遺跡略称、および遺構番号を記載している。参照の際には目次末尾に記載した新旧遺構対照表をご覧頂きたい。

3．遺構の略称は、下記の通りとした。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑

4．長者屋敷遺跡で検出した溝（ＳＤ）については、過去の同遺跡調査検出分からの通し番号とした。

5．本報告書における遺物の掲載番号および縮尺は次のように記す。

番号のみ：土器、土製品　1/4　　Ｓ：石器　1/3　　Ｆ：鉄製品、鉄滓　1/2

6．本文中、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。

7．遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗り、それ以外は白抜きで表した。また奈良～中世の土器底面にある糸切り痕のうち◎は回転糸切り、⊖は静止糸切りであることを示す。

8．遺物実測図に用いたスクリーントーンはそれぞれ以下のものを表す。

赤色塗彩　　黒色処理

9．官衙に関連する用語、および遺構の評価については下記の文献を参照した。

山中敏史ほか 2003『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所

山中敏史ほか 2004『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所

10．遺構、遺物の時期決定には下記の文献を参照した。

角田徳幸 2003「第５章まとめ　第３節奈良・平安時代の施設群」『史跡出雲国府-１-』島根県教育委員会

丹羽野裕 2005「出雲における９～10世紀の須恵器の様相-窯跡とその出土資料を中心に-」『第４回山陰中世土器検討会資料集　平安時代前期の土器様相-中国地方を中心に-』山陰中世土器検討会

中森　祥 2005「伯耆における９・10世紀の様相-西伯耆を中心に-」『第４回山陰中世土器検討会資料集　平安時代前期の土器様相-中国地方を中心に-』山陰中世土器検討会

玉木秀幸 2006「伯耆の土器様相」『第５回山陰中世土器検討会資料集　山陰における中世前期の諸様相-伯耆・出雲を中心として-』山陰中世土器検討会

松井　潔 1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集　古代吉備研究会

目　次

序
例言・凡例

第1章　調査の経緯と経過……森本…… 1
第1節　調査に至る経緯…… 1
第2節　調査の経過…… 2
第3節　調査体制…… 4

第2章　位置と環境……坂本…… 5
第1節　地理的環境…… 5
第2節　歴史的環境…… 5
第3節　遺跡周辺の地名…… 10
第4節　長者屋敷遺跡の既往調査…… 11

第3章　長者屋敷遺跡……加藤・坂本…… 15
第1節　遺跡の立地と土層堆積…… 15
第2節　古代～中世の調査…… 19
1．概要……19　4．性格不明遺構……22
2．溝……20　5．当該期の出土遺物……31
3．土坑……22
第3節　近世以降の調査…… 32
1．概要……32　3．溝……36
2．道路状遺構……33
第4節　弥生時代の調査、およびその他の遺構・遺物…… 40
1．概要……40　3．ピット……48
2．土坑……40　4．遺構外遺物……48

第4章　坂長下屋敷遺跡……森本…… 49
第1節　遺跡の立地と土層堆積…… 49
第2節　古代の調査…… 52
1．概要……52　4．ピット……65
2．掘立柱建物……52　5．当該期の出土遺物……69
3．溝……63
第3節　その他の遺構と遺物…… 71
1．溝……71　3．ピット……72
2．土坑……71

第５章　鉄関連遺物の調査……加藤・坂本…… 75
第１節　調査概要と方針…… 75
第２節　各遺跡の概要…… 75
１．荒神上遺跡……75　　２．大殿墓ノ谷遺跡・大殿所在遺跡……80

第６章　自然科学分析…… 87
第１節　土壌分析による古環境復元……パリノ・サーヴェイ株式会社…… 87
１．長者屋敷遺跡…… 87
２．坂長下屋敷遺跡…… 92
第２節　長者屋敷遺跡ＳＤ４の軟Ｘ線写真による層相観察
……パリノ・サーヴェイ株式会社　辻康男……100
第３節　長者屋敷遺跡出土転用硯の顔料分析……奈良文化財研究所　高妻洋成……104

第７章　長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡と会見郡衙……107
第１節　会見郡衙成立以前の様相……加藤……107
第２節　坂長下屋敷遺跡の検討……森本……113
第３節　長者屋敷遺跡の検討……坂本……115
第４節　小結……森本・加藤・坂本……120

図版

新旧遺構対照表

長者屋敷遺跡				坂長下屋敷遺跡	
旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
東溝	SD1	SD8	SD13	SB4	SB1
北溝	SD2	SD10	SD14	SB1	SB2
西溝	SD3	SD2	SD15	SB3	SB3
SD1	SD4	SX2・SD13	溝状遺構	SB2	ピット列
SD11	SD5	SK6	SK1	SD2	SD1
SD9	SD6	SK4	SK2	SD1	SD2
SD4	SD7	SK3	SK3	－	SD3
SD5	SD8	SK5	SK4	SK1	SK1
SD6	SD9	SK7	SK5	P40	SK2
SD7	SD10	SK2	SK6		
SD3	SD11	SK1	SK7		
SD12	SD12	SX1	道路状遺構		

※昭和54～56年度発掘調査で検出された東溝・北溝・西溝（旧遺構名）についても将来的な視野に立ち、遺構名を通し番号とした。

挿図目次

第１章　調査の経緯と経過

第１図　調査地位置図…… 1

第２図　調査地グリッド図…… 2

第２章　位置と環境

第３図　遺跡位置図…… 5

第４図　周辺遺跡分布図…… 7

第５図　長者原台地上遺跡分布図…… 9

第６図　調査地周辺小字図…… 10

第７図　長者屋敷遺跡調査区位置図…… 11

第８図　北柱群・南柱群…… 12

第９図　既往調査出土遺物…… 13

第３章　長者屋敷遺跡

第10図　遺跡周辺の地形…… 15

第11図　調査区土層断面（１）…… 16

第12図　調査区土層断面（２）…… 17

第13図　包含層出土遺物…… 18

第14図　古代～中世遺構分布図…… 19

第15図　ＳＤ４および出土遺物…… 21

第16図　ＳＤ４出土鉄製品…… 22

第17図　ＳＤ５・６…… 22

第18図　ＳＫ１…… 23

第19図　溝状遺構…… 25～26

第20図　溝状遺構出土遺物（１）…… 27

第21図　溝状遺構出土遺物（２）…… 28

第22図　溝状遺構出土鉄関連遺物…… 29

第23図　当該期の出土遺物…… 31

第24図　近世以降遺構分布図…… 33

第25図　道路状遺構…… 34

第26図　道路状遺構出土遺物…… 36

第27図　ＳＤ７・８・９・10・11…… 37

第28図　ＳＤ７・10・11出土遺物…… 38

第29図　ＳＤ12・13・14・15…… 39

第30図　弥生時代他　遺構分布図…… 40

第31図　ＳＫ２…… 41

第32図　ＳＫ２出土土器（１）…… 42

第33図　ＳＫ２出土土器（２）…… 43

第34図　ＳＫ２出土土器（３）…… 44

第35図　ＳＫ２出土石器…… 45

第36図　ＳＫ３・４・５・６・７…… 47

第37図　遺構外出土石器・鉄関連遺物…… 48

第４章　坂長下屋敷遺跡

第38図　遺跡周辺の地形…… 49

第39図　調査区土層断面…… 50

第40図　グリッド、およびトレンチ
配置図…… 51

第41図　遺構分布図…… 53～54

第42図　掘立柱建物分布図…… 55

第43図　ＳＢ１…… 56

第44図　ＳＢ２、および出土遺物…… 57

第45図　ＳＢ３位置図…… 58

第46図　ＳＢ３…… 59～60

第47図　ＳＢ３出土遺物…… 62

第48図　ＳＤ１・２…… 63

第49図　ＳＤ１…… 63

第50図　ＳＤ１遺物出土状況…… 64

第51図　ＳＤ１出土遺物…… 65

第52図　ＳＤ２、および出土遺物…… 66

第53図　ピット列、および出土遺物…… 68

第54図　Ｐ１・２…… 68

第55図　Ｓ44グリッド周辺遺構図…… 69

第56図　Ｉ層出土遺物…… 70

第57図　Ｐ３出土遺物…… 70

第58図　当該期の出土遺物…… 70

第59図　ＳＤ３土層断面図…… 72

第60図　ＳＫ１・２…… 72

第61図　調査区内出土鉄製品…… 72

第62図　Ｐ43～Ｏ43グリッド遺構図…… 73

第５章　鉄関連遺物の調査

第63図　鉄関連遺物出土遺跡…… 75

第64図　荒神上遺跡遺構図…… 76

第65図　荒神上遺跡西地区出土遺物……77
第66図　荒神上遺跡東地区出土遺物……78
第67図　荒神上遺跡　職場遺構出土鍛冶関連遺物……81
第68図　その他出土鉄関連遺物……81
第69図　大殿所在遺跡出土鉄関連遺物……82
第70図　大殿墓ノ谷遺跡出土鉄関連遺物……82
第71図　鉄関連遺物構成図（1）……85
第72図　鉄関連遺物構成図（2）……86
第6章　自然科学分析
第73図　長者屋敷遺跡主要珪藻化石群集の層位分布……89
第74図　坂長下屋敷遺跡主要珪藻化石群集の層位分布……93
第75図　試料採取地点断面図……100
第76図　ＳＤ４採取試料の軟Ｘ線写真と土壌・堆積構造トレース図……103
第77図　蛍光Ｘ線元素分析スペクトル……106
第７章　長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡と会見郡衙
第78図　会見郡内の古墳分布図……109
第79図　会見郡内の主要古墳変遷図……111
第80図　長者屋敷遺跡遺構配置図……116
第81図　長者屋敷遺跡ＳＤ16……116
第82図　遺跡周辺地形図……118

挿表目次

第３章　長者屋敷遺跡
第１表　ピット一覧表……47
第４章　坂長下屋敷遺跡
第２表　遺構一覧表……52
第３表　ＳＢ１計測表……56
第４表　ＳＢ２計測表……56
第５表　ＳＢ３計測表……61
第６表　ピット列計測表……68
第７表　Ｐ１・２計測表……68
第８表　ピット計測表……73
第５章　鉄関連遺物の調査
第９表　鉄関連遺物観察表（1）……83
第10表　鉄関連遺物観察表（2）……84
第６章　自然科学分析
第11表　長者屋敷遺跡分析試料……87
第12表　長者屋敷遺跡の花粉・寄生虫卵分析結果……90
第13表　坂長下屋敷遺跡分析試料……92
第14表　坂長下屋敷遺跡の花粉・寄生虫卵分析結果……94
第15表　長者屋敷遺跡の珪藻分析結果……97
第16表　坂長下屋敷遺跡の珪藻分析結果（1）……98
第17表　坂長下屋敷遺跡の珪藻分析結果（2）……99
第７章　長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡と会見郡衙
第18表　会見郡内の主要古墳一覧表……110
第19表　坂長下屋敷遺跡遺構変遷表……114
第20表　長者屋敷遺跡遺構一覧表……117

図版目次

巻頭図版

1　坂長下屋敷遺跡　ＳＢ２・３（南から）

2　長者屋敷遺跡　ＳＤ４（南から）

図版

1　長者原台地周辺空中写真（１）昭和21年撮影

2　長者原台地周辺空中写真（２）昭和43年撮影

3　長者原台地周辺空中写真（３）昭和43年撮影

4－1　調査地周辺の地形（１）（西から）

4－2　調査地周辺の地形（２）（南から）

第２・３章　長者屋敷遺跡

5－1　調査地全景（１）（上が北）

5－2　調査地全景（２）（南西から）

6－1　調査地全景（３）（北から）

6－2　調査地全景（４）（東から）

7－1　Ａ区谷状地形土層堆積状況（南西から）

7－2　Ａ区北西壁土層堆積状況（南西から）

7－3　Ｂ区南東壁土層堆積状況（北西から）

8－1　長者屋敷遺跡(昭和54～56年度発掘調査)出土遺物

8－2　包含層出土遺物

9　ＳＤ４完掘状況（南から）

10－1　ＳＤ４埋土堆積状況（南から）

10－2　Ⅱ層出土遺物

10－3　ＳＤ４出土土器

10－4　ＳＤ４出土鉄製品

10－5　ＳＤ４出土鉄製品Ｘ線写真

11－1　ＳＤ５完掘状況（南から）

11－2　ＳＤ６完掘状況（南から）

11－3　ＳＫ１完掘状況（北西から）

12－1　溝状遺構完掘状況（東から）

12－2　溝状遺構埋土堆積状況（１）（南から）

12－3　溝状遺構埋土堆積状況（２）（南東から）

13－1　溝状遺構埋土堆積状況（３）（西から）

13－2　溝状遺構上層出土遺物

14　溝状遺構中層・下層出土遺物（１）

15　溝状遺構中層・下層出土遺物（２）

16－1　溝状遺構出土鉄関連遺物

16－2　溝状遺構出土鉄関連遺物Ｘ線写真

17　遺構外出土遺物（古代～中世）

18－1　道路状遺構第３面（南から）

18－2　道路状遺構第２面（南から）

18－3　道路状遺構第１面検出状況（北西から）

19－1　道路状遺構埋土堆積状況（北西から）

19－2　道路状遺構第１面（南から）

19－3　道路状遺構完掘状況（南から）

20－1　道路状遺構出土遺物

20－2　ＳＤ７完掘状況（南から）

20－3　ＳＤ９・10完掘状況（南から）

20－4　ＳＤ８完掘状況（南西から）

20－5　ＳＤ13完掘状況（北東から）

21－1　ＳＤ14完掘状況（南から）

21－2　ＳＤ11完掘状況（南から）

21－3　ＳＤ12完掘状況（南から）

21－4　ＳＤ15完掘状況（北東から）

21－5　ＳＤ７・10・11出土遺物

22－1　ＳＫ２遺物出土状況（西から）

22－2　ＳＫ２土器120出土状況（西から）

22－3　ＳＫ２埋土堆積状況（南西から）

23　ＳＫ２出土遺物集合

24　ＳＫ２出土遺物（１）

25　ＳＫ２出土遺物（２）

26　ＳＫ２出土遺物（３）

27　ＳＫ２出土遺物（４）

28－1　ＳＫ３完掘状況（北東から）

28－2　ＳＫ４検出状況（西から）

28－3　ＳＫ４埋土堆積状況（南から）

28－4　ＳＫ５完掘状況（東から）

28－5　ＳＫ５埋土堆積状況（南西から）

28－6　ＳＫ５完掘状況（南から）

29－1　ＳＫ６完掘状況（西から）

29－2　ＳＫ７完掘状況（西から）
29－3　遺構外出土石器
29－4　遺構外出土鉄関連遺物
29－5　遺構外出土鉄関連遺物Ｘ線写真

第４章　坂長下屋敷遺跡

30－1　調査地周辺の地形（北から）
30－2　調査地周辺の地形（西から）
31－1　調査地周辺の地形（北から）
31－2　調査地完掘状況（北東から）
32－1　調査地完掘状況（東から）
32－2　ＳＢ１Ｐ２（西から）
32－3　ＳＢ１Ｐ３（東から）
32－4　ＳＢ１検出状況（北から）
33－1　ＳＢ２Ｐ１（南から）
33－2　ＳＢ２Ｐ３（南から）
33－3　ＳＢ２Ｐ２（東から）
33－4　ＳＢ２Ｐ２遺物出土状況（東から）
33－5　ＳＢ２Ｐ４（南から）
33－6　ＳＢ２Ｐ５（南から）
33－7　ＳＢ２（北から）
34－1　ＳＢ２検出状況（北西から）
34－2　ＳＢ２・３（北から）
35　ＳＢ２・３（南から）
36－1　ＳＢ３Ｐ１柱のあたり検出状況（西から）
36－2　ＳＢ３Ｐ２柱のあたり検出状況（西から）
36－3　ＳＢ３Ｐ３（西から）
36－4　ＳＢ３Ｐ４（西から）
36－5　ＳＢ３Ｐ５（西から）
36－6　ＳＢ３Ｐ７～９（南西から）
36－7　ＳＢ３Ｐ７（南から）
36－8　ＳＢ３Ｐ８（南から）
37－1　ＳＢ３Ｐ９（南から）
37－2　ＳＢ３Ｐ10（東から）
37－3　ＳＢ３Ｐ11（東から）
37－4　ＳＢ３Ｐ12（東から）
37－5　ＳＢ３Ｐ13（東から）
37－6　ＳＢ３Ｐ15（北東から）
37－7　ＳＢ３Ｐ14遺物出土状況（北東から）
37－8　ＳＢ３Ｐ17（南西から）
38－1　ＳＢ３Ｐ16（南から）
38－2　ＳＢ３Ｐ16柱のあたり検出状況（南西から）
38－3　ＳＢ３Ｐ18（東から）
38－4　ＳＢ３Ｐ16遺物出土状況（南東から）
38－5　ＳＢ３Ｐ19（東から）
38－6　ＳＢ３Ｐ20（東から）
38－7　ＳＢ３Ｐ４出土遺物160
38－8　ＳＢ３出土遺物
39　ＳＢ２・３検出状況（南から）
40　ＳＢ３検出状況（北から）
41－1　ＳＢ３Ｐ21（東から）
41－2　ＳＢ３Ｐ22（東から）
41－3　ＳＢ３Ｐ23（東から）
41－4　ＳＢ３Ｐ24（東から）
41－5　ＳＢ３Ｐ25（東から）
41－6　ＳＢ３Ｐ26（東から）
41－7　ＳＢ３Ｐ27（東から）
41－8　ＳＢ３Ｐ28（東から）
42－1　ＳＢ３Ｐ29（東から）
42－2　ＳＢ３Ｐ30（東から）
42－3　ピット列Ｐ１（北から）
42－4　ピット列Ｐ２（北から）
42－5　ピット列Ｐ３（北から）
42－6　ピット列Ｐ２　Ｆ19出土状況（北から）
42－7　ピット列Ｐ４（北から）
42－8　Ａ区Ｐ１（南から）
43－1　ＳＤ１（西から）
43－2　ＳＤ１遺物出土状況（西から）
43－3　ＳＤ１埋土堆積状況（西から）
43－4　ＳＤ１・２埋土堆積状況（南西から）
43－5　ＳＤ１遺物出土状況（北東から）
43－6　ＳＤ１　Ｆ16出土状況（北東から）
44　ＳＤ１出土遺物（１）
45－1　ＳＤ１出土遺物165
45－2　ＳＤ１出土遺物167
45－3　ＳＤ１出土遺物164
45－4　ＳＤ１出土遺物167

45－5　ＳＤ１出土遺物175
45－6　ＳＤ１出土遺物166
45－7　ＳＤ１出土遺物175
45－8　ＳＤ１出土遺物（２）
46－1　ＳＤ１出土遺物173
46－2　ＳＤ１出土遺物173
46－3　ＳＤ１出土遺物173
46－4　ＳＤ１出土鉄器Ｆ16
46－5　ＳＤ２（西から）
46－6　ＳＤ２埋土堆積状況（西から）
47－1　ＳＤ２出土遺物179
47－2　ＳＤ２出土遺物179
47－3　ＳＤ２出土遺物177
47－4　ＳＤ２出土遺物
47－5　Ｉ層出土遺物183
47－6　Ｉ層出土遺物184
48－1　調査区内出土遺物191・192
48－2　調査区内出土遺物191・192
48－3　調査区内出土遺物（１）
48－4　調査区内出土遺物200
48－5　調査区内出土遺物（２）
49－1　調査区内出土遺物189
49－2　調査区内出土遺物189
49－3　調査区内出土遺物198
49－4　調査区内出土遺物198
49－5　調査区内出土鉄関連遺物
49－6　調査区内出土鉄関連遺物Ｘ線写真
49－7　調査区内出土遺物197
49－8　調査区内出土石器Ｓ29

第５章　鉄関連遺物の調査

50　荒神上遺跡西地区出土遺物（１）
51－1　荒神上遺跡西地区出土遺物（２）
51－2　荒神上遺跡東地区出土遺物
51－3　大殿所在遺跡出土鉄関連遺物
51－4　大殿所在遺跡出土鉄関連遺物Ｘ線写真
52－1　荒神上遺跡出土鉄関連遺物（１）
52－2　荒神上遺跡出土鉄関連遺物Ｘ線写真（１）
52－3　荒神上遺跡出土鉄関連遺物（２）
52－4　荒神上遺跡出土鉄関連遺物Ｘ線写真（２）
53－1　大殿墓ノ谷遺跡出土鉄関連遺物
53－2　大殿墓ノ谷遺跡出土鉄関連遺物Ｘ線写真

第６章　自然科学分析

54　長者屋敷遺跡　珪藻化石・花粉化石
55　坂長下屋敷遺跡　珪藻化石・花粉化石
56　長者屋敷遺跡　ＳＤ４採取試料の軟Ｘ線写真（陰画）
57－1　遺物64内面（１）
57－2　遺物64内面（２）
57－3　遺物64破面
57－4　遺物64赤色顔料
57－5　遺物84破面
57－6　遺物84内面
57－7　遺物84赤色顔料（１）
57－8　遺物84赤色顔料（２）

第１章　調査の経緯と経過

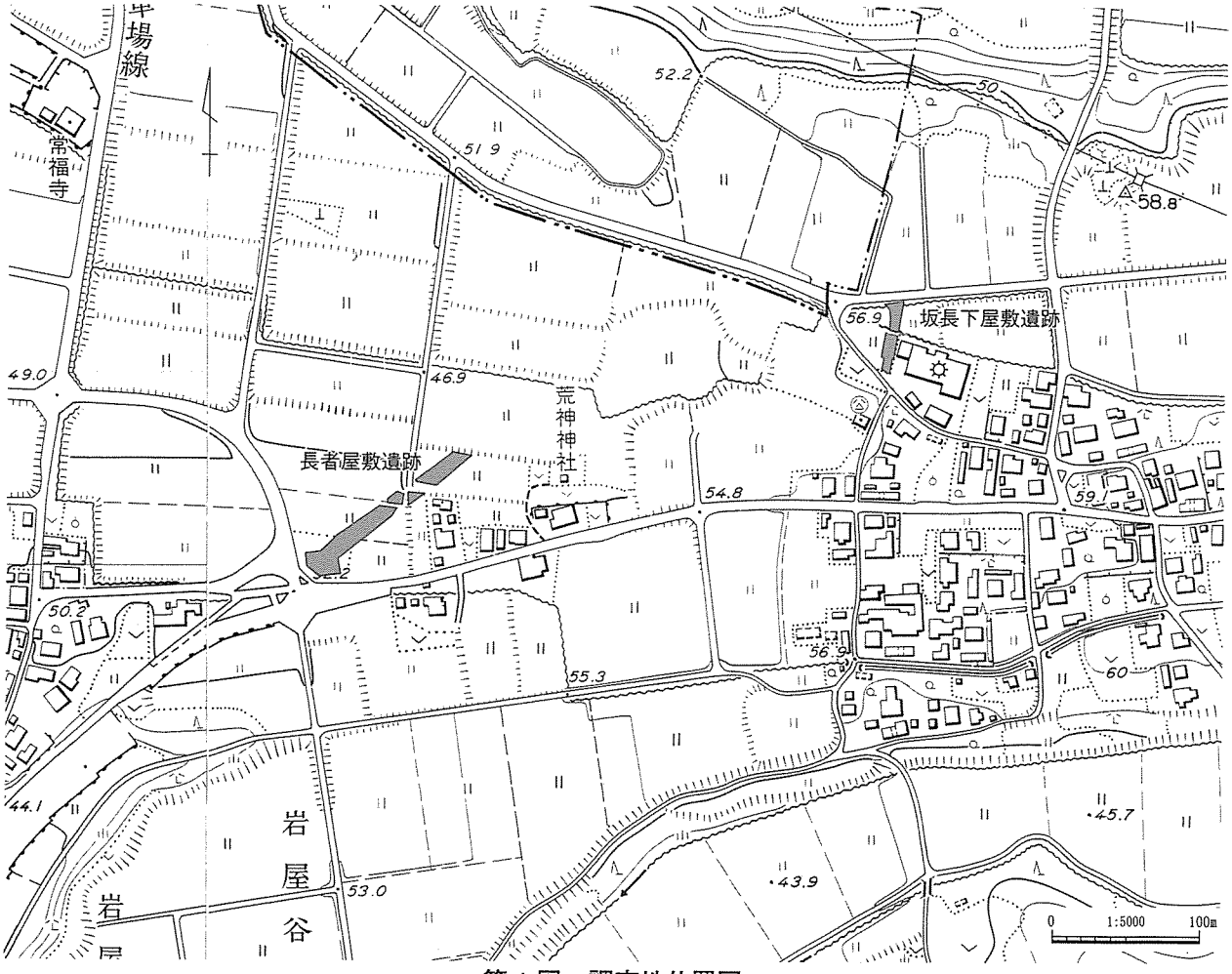
第１節　調査に至る経緯

長者屋敷遺跡および坂長下屋敷遺跡は、一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事に伴って調査を実施した遺跡であり、鳥取県西伯郡伯耆町坂長地内の道路ルート上に存在する。調査地は日野川左岸の通称「長者原台地」上にある坂中集落の北西側に広がる水田等の耕作地帯に位置しており、長者屋敷遺跡と坂長下屋敷遺跡は、谷地形を挟んで約400m離れている。

長者屋敷遺跡は昭和54～56年度に県営圃場整備事業に伴って発掘調査が行われている。調査によって古代～中世にかけての遺構が確認されたが、とくに大型の掘立柱建物群（北柱群・南柱群）の存在から、古代会見郡衙の推定地と考えられており、注目されていた。

一方、坂長下屋敷遺跡は周知の遺跡ではなかったが、分布調査の結果、遺跡の存在が想定されるにいたった。

道路建設工事に先立ち、鳥取県西部総合事務所長から道路ルート上における埋蔵文化財の有無の照会を受けた伯耆町教育委員会が、国および県の補助金を受けて平成14・15年度に試掘調査を実施したところ、長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡部分において古代を中心とする遺構・遺物が出土し、遺跡の存在が確認された。この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会



第１図　調査地位置図

事務局文化課は協議を行ったが、一部を除き(註1)現状保存は困難との判断にいたり、鳥取県西部総合事務所長は文化財保護法第94条に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出した。その上で、事前発掘調査の指示を受けた鳥取県西部総合事務所長は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、財団法人鳥取県教育文化財団理事長から鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第92条に基づく発掘調査の届出を提出し、財団法人鳥取県教育文化財団調査室岸本調査事務所が調査を実施した。

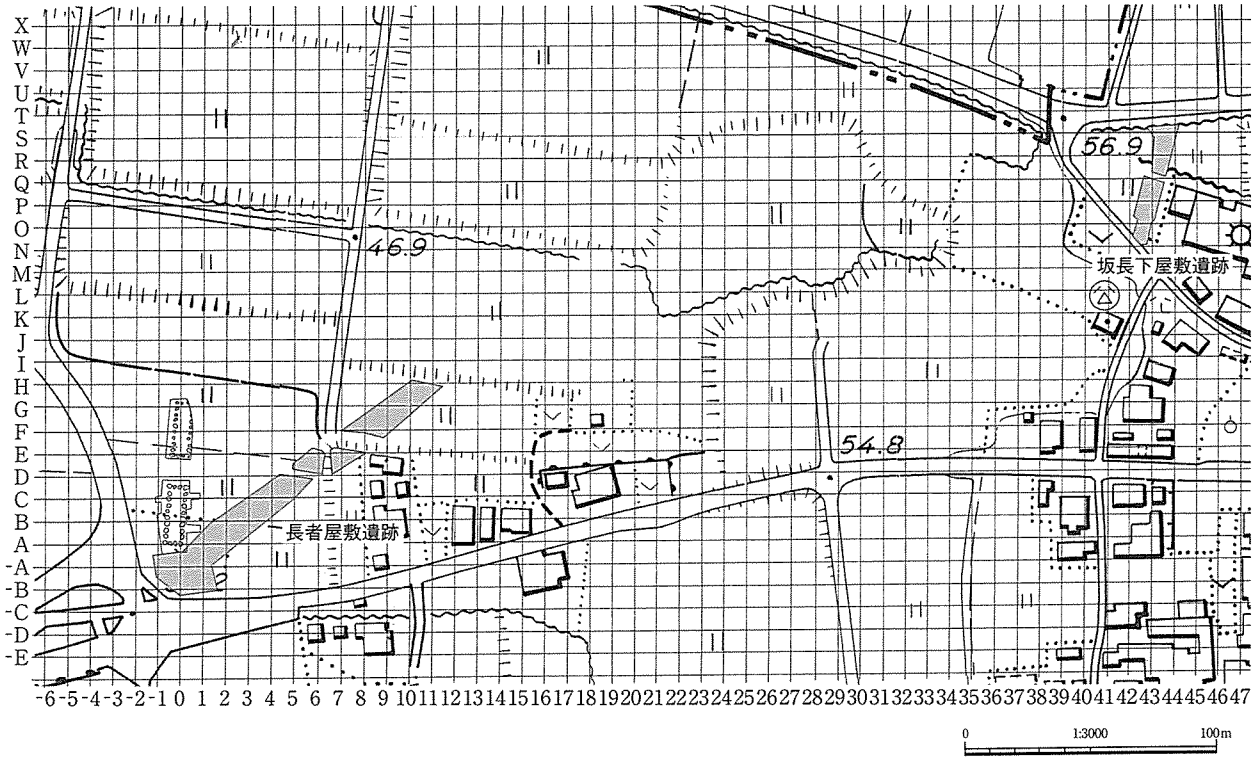
（註１）長者屋敷遺跡の大型掘立柱建物（北柱群・南柱群）については、道路ルートを遺構の南側に迂回することにより現状保存となった。

第２節　調査の経過

長者屋敷遺跡調査地は、調査着手前には水田および畑地であった。調査地は水路によって３つの小区に分かれるため、Ａ～Ｃ区の調査区名を付け調査を実施したが、調査時点での遺構番号や遺物番号は調査地全体での通し番号とした。調査は、調査区際にトレンチを掘削し、遺構面を確認しつつ面的に進めていった。

坂長下屋敷遺跡調査地は、調査着手前には畑地および駐車場として利用されていた。調査地は水路によって２つに分かれていたため、調査地の北側をＡ区、南側をＢ区として調査を実施した。なお、調査時点での遺構番号や遺物番号は調査地全体での通し番号とした。調査は、調査区際にトレンチを掘り下げ、堆積状況を確認しながら行った。調査地は削平が著しく、一部で古代の包含層を確認したが、大部分は耕作土の直下で古代の遺構を確認した。

両遺跡とも、調査は４月11日の調査前航空写真撮影の実施によって開始した。その後、４月18日から重機による表土剥ぎおよび現場作業員用の駐車場造成を行い、４月25日から現場作業員の稼働



第２図　調査地グリッド図

を開始した。調査地には業者委託により４級基準杭と公共座標第Ｖ系に基づく９ｍ間隔の方眼杭を設置した。５月16日と７月７日には独立行政法人奈良文化財研究所山中敏史氏に現地指導を仰いだ。７月28日には鳥取県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会の現地視察が行われた。調査を進めた結果、両遺跡の遺構群は古代会見郡衙に関係するものである可能性が高まり、西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化課の間で今後の遺構群の取り扱いについて協議がもたれることになった。その協議に伴い、確認された遺構群の保護への格別の配慮について鳥取県教育委員会教育長から８月23日に依頼を受けたため、長者屋敷遺跡ではＳＤ４の保護を行い、周辺で確認された古代以前の包含層については調査を行っていない。また、坂長下屋敷遺跡においても掘立柱建物群の柱穴の掘り下げを半截状態にとどめた。

８月18日には記者発表を行い、８月20日に現地説明会を開催し127人の参加を得た。８月29日をもって調査を終了した。なお、両調査地は調査終了後に埋め戻され、遺構保護が図られた。

○長者屋敷・坂長下屋敷遺跡調査の経過

４月11日　調査前航空撮影。
４月14日～５月13日　基準点測量および方眼測量。
４月18日～４月20日　重機による表土剥ぎ、調査時使用のための駐車場造成開始。
４月25日　現場作業員稼働開始。
４月27日　坂長下屋敷遺跡ＳＢ１・２検出。
４月28日　長者屋敷遺跡調査区北壁土層断面にて、ＳＤ４を確認。
５月16日　独立行政法人奈良文化財研究所山中敏史氏による第１回現地指導。
５月30日　鳥取県教育委員会事務局文化課現地確認および調査指導。
６月２日　長者屋敷遺跡ＳＤ４検出。
６月７日　坂長下屋敷遺跡ＳＢ２柱掘方半截。
６月10日　長者屋敷遺跡ＳＤ４完掘。坂長下屋敷遺跡ＳＢ３検出。
６月15日　坂長下屋敷遺跡ＳＢ３柱掘方半截。
６月27日　鳥取県教育委員会事務局文化課と調査計画等について現地協議。
７月７日　独立行政法人奈良文化財研究所山中敏史氏による第２回現地指導。
７月28日　鳥取県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会現地視察。
８月２日　伯耆町文化財保護審議会現地視察。
８月23日　西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化課の間で今後の遺構の取り扱いについて協議することになり、鳥取県教育委員会事務局文化課から遺構の保護について格別の配慮を依頼される。
８月18日　記者発表。
８月20日　現地説明会開催。
８月29日　調査終了。

第３節　調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　　有田　博充

事務局長　　中村　　登

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室　　長　　田中　弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務）　　國弘　博之

文化財主事　　山枡　雅美

事務職員　　谷垣真須美　　小谷　有里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室　岸本調査事務所

所　　長　　國田　俊雄

文化財主事　　森本　倫弘　加藤　裕一　坂本　嘉和

○調査協力　小林康久　株式会社ミトクハーネス　財団法人米子市教育文化事業団
西部土地改良区　伯耆町教育委員会　米子市教育委員会　和田　巌
（五十音順、敬称略）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡は鳥取県西部、西伯郡伯耆町坂長に位置する。日野川左岸の標高50m前後の河岸段丘上に立地し、地形は北にいくほど低くなる。この河岸段丘は大山火山噴射物によって形成されたと考えられる凝灰角礫岩からなる。噴射物は大山外輪山が形成された当時、日野川を越え、左岸地域に及んでいたと考えられ、一時日野川を堰き止めていたと推察されている。それが、やがて日野川下流からの頭部侵蝕が始まり、侵蝕基準面が低下することによって、現在の河岸段丘が形成されたと考えられる。一般に壮年期の地形を示す。遺跡の背後には標高226mの越敷山を擁する起伏した丘陵地帯が広がっており、前方には米子平野を眺望することができる。伯耆町大殿付近から米子市青木周辺にかけて手指状に広がる河岸段丘、ないしは丘陵地帯を一般に「長者原台地」と称している。長者原台地上には長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡をはじめ、諏訪遺跡群、福市遺跡、青木遺跡、諸木遺跡など数多くの遺跡が分布している。

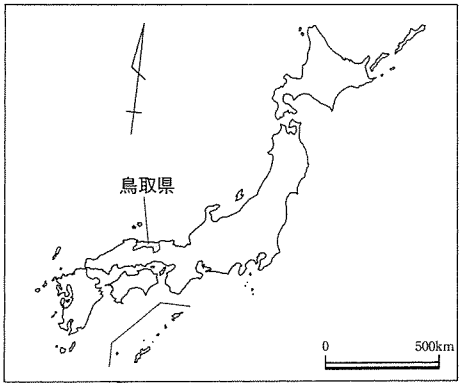
第２節　歴史的環境

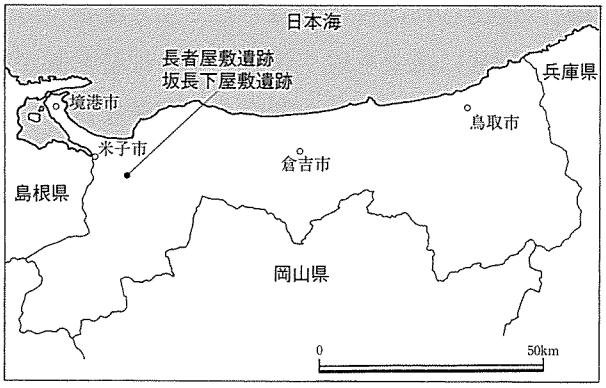
旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）でナイフ型石器が２点出土し、１点はローム層中から出土している。ナイフ型石器は泉中峰遺跡（78）、小波遺跡（79）でも出土しており、泉中峰遺跡では玉髄製の縦長剥片を素材とし、一側縁に刃つぶし加工を施している。

縄文時代

草創期に遡る可能性がある遺物として貝田原遺跡（60）、奈喜良遺跡（20）でサヌカイト製の有舌尖頭器が表採されている。早期では上福万遺跡（72）で、集石遺構・土坑・ピット状遺構が多数検出されている。日野川右岸では久古北田山遺跡（63）、須村遺跡（65）、林ヶ原遺跡（68）で押型文土器が出土している。前期～中期にかけては低湿地遺跡で動植物遺体が出土し、当時の生業の一端を窺い知ることができる。陰田第９遺跡（9）ではシカやイノシシなどの獣骨が多量に出土しており、解体痕が認められるものもある。目久美遺跡（8）では貯蔵穴からはドングリ、トチ、クル





第３図　遺跡位置図

ミ等が出土している。中期では林ヶ原遺跡で墓の可能性がある土壙が確認されている。後・晩期には遺跡数は増えるが、集落の様相は必ずしも明らかではない。日野川右岸の久古第３遺跡（59）では晩期の竪穴住居が検出されている。

弥生時代

稲作の伝播により、中海沿岸の低湿地遺跡で水田跡が検出されている。前期では目久美遺跡（8）、後期では池ノ内遺跡（7）、前期末から後期にかけての長砂第２遺跡（4）が知られている。前期の遺跡では宮尾遺跡（28）、諸木遺跡（29）で環濠が検出されている。清水谷遺跡（17）でも前期末から中期前半の環濠が存在するが、環濠内からは竪穴住居等は確認されていない。中期になると日野川中流域では下山南通遺跡（69）、長山馬籠遺跡（70）で集落が形成される。林ヶ原遺跡（68）では木棺墓が確認され、供献土器が出土している。中期後葉以降は丘陵上での遺跡数が増加し、妻木晩田遺跡（82）に代表される拠点的な集落が形成される。遺跡周辺では越敷山遺跡群（45）、青木遺跡（22）などがあり、越敷山遺跡群では鉄器が多数出土している。浅井土居敷遺跡（37）では後期の土坑から径５㎝程の環状の青銅器が出土している。青銅器ではその他に久古第３遺跡で銅剣の可能性がある青銅器片が出土している。

古墳時代

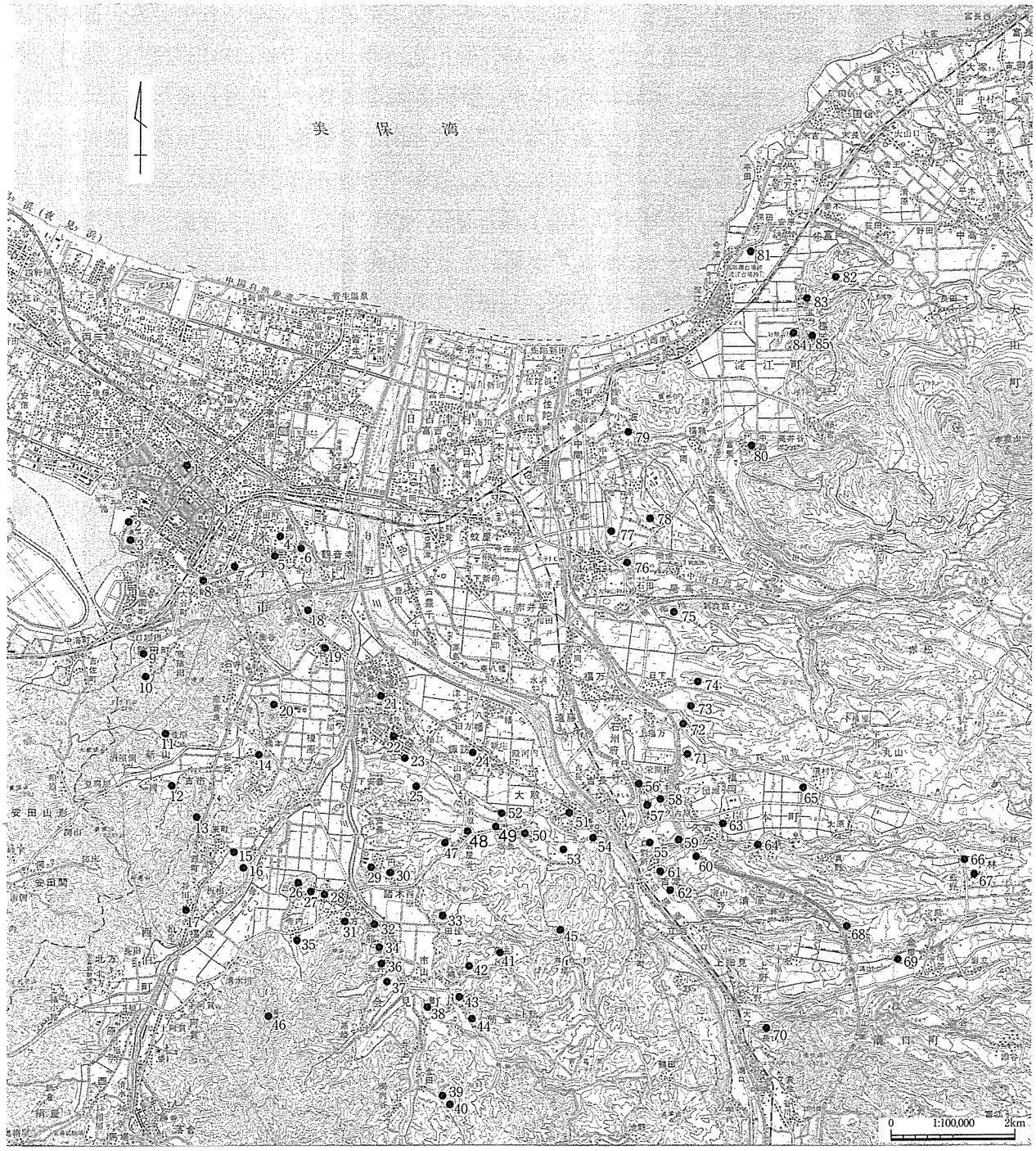
主要な前期古墳には前方後方墳の普段寺１号墳（35）、方墳の２号墳、円墳の石州府29号墳（71）、丘陵上に方墳の日原６号墳（19）などがある。今のところ当地域において前期に遡る前方後円墳は確認されていない。普段寺１・２号墳からは三角縁神獣鏡が出土している。中期古墳では法勝寺川右岸の三崎殿山古墳が著名である。全長108mの前方後円墳で、円筒埴輪が出土したと伝えられる。法勝寺川流域ではその他にも画文帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前３号墳（32）といった前方後円墳が築造されている。後期に入ると多数の古墳群が形成され、日野川右岸の石州府古墳群（71）や加茂川流域の東宗像古墳群（18）などが知られている。東宗像５号墳で横口式箱式棺が、６・７号墳で竪穴系横口式石室が採用され、九州地方との関連性が窺われる。また、日野川右岸の吉定１号墳（62）では割石小口積みによる持送り式の横穴式石室を採用している。長者原台地上でも古墳群が形成されはじめ、大寺原古墳群、長者原古墳群（52）などがある。

この時代の集落遺跡は福市遺跡（21）、青木遺跡が位置する日野川左岸の丘陵上に多く分布する。久古第３遺跡（59）では後期の竪穴住居、掘立柱建物跡が確認されている。

古代

白鳳期に創建された古代寺院として大寺廃寺（51）がある。東を正面とし、北に塔、南に金堂を並列させ、背後に講堂を置く法起寺式の伽藍配置が採用されている。金堂には瓦積基壇が築かれており、塔からは三段舎利孔を持つ心礎が確認されている。出土遺物として高さ１ｍを越える石製鴟尾が知られ、現在、伯耆町大殿の福樹寺境内に保存されている。また、創建時の瓦として複弁八葉蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦が出土し、同一文様の瓦が金田瓦窯（39）から出土したといわれる。大寺廃寺から500ｍほど離れた長者原台地上には塔心礎が残っており、奈良時代末から平安時代初期の瓦が散布していることから坂中廃寺（50）の存在が示唆される。伽藍配置等の詳細は明らかではない。

『和名類従抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡として編成されている。坂中廃寺に近接する長者屋敷遺跡（48）では桁行９間（約21ｍ）、梁行３間（6.5ｍ）の掘立柱建物２棟



1　錦町第１遺跡
2　久米第１遺跡
3　米子城
4　長砂第１・２遺跡
5　長砂第３遺跡
6　水道山古墳
7　池ノ内遺跡
8　目久美遺跡
9　陰田遺跡群
10　奥陰田遺跡群
11　新山遺跡群
12　古市遺跡群
13　吉谷遺跡群
14　橋本遺跡群
15　福成石佛前遺跡
16　福成早里遺跡
17　清水谷遺跡
18　東宗像遺跡群
19　日原古墳群
20　奈喜良遺跡
21　福市遺跡
22　青木遺跡
23　樋ノ口遺跡
24　諏訪西山ノ後遺跡
25　別所新田遺跡
26　三崎殿山古墳
27　天萬土居前遺跡
28　宮尾遺跡
29　諸木遺跡
30　後垰山古墳
31　天万遺跡
32　宮前３号墳
33　田住古墳群
34　宮前遺跡
35　普段寺１号墳
36　浅井11号墳
37　浅井土居敷遺跡
38　天王原遺跡
39　金田瓦窯
40　両部太郎窯
41　荻名遺跡群
42　田住松尾平遺跡
43　朝金古墳群
44　朝金小チヤ遺跡
45　越敷山遺跡群
46　手間要害跡
47　荒神上遺跡
48　長者屋敷遺跡
49　坂長下屋敷遺跡
50　坂中廃寺
51　大寺廃寺
52　長者原古墳群
53　坂中第５遺跡
54　岸本大成遺跡
55　岸本古墳群
56　岸本遺跡
57　岸本要害跡
58　岸本下ノ原遺跡
59　久古第３遺跡
60　貝田原遺跡
61　口別所古墳群
62　吉定１号墳
63　久古北田山遺跡
64　番原遺跡群
65　須村遺跡
66　真野ブヤ遺跡
67　藍野遺跡
68　林ヶ原遺跡
69　下山南通遺跡
70　長山馬籠遺跡
71　石州府古墳群
72　上福万遺跡
73　日下寺山遺跡
74　日下墳墓群
75　尾高浅山遺跡
76　尾高城
77　尾高御建山遺跡
78　泉中峰・泉前田遺跡
79　小波遺跡
80　井手胯遺跡
81　今津岸ノ上遺跡
82　妻木晩田遺跡
83　晩田遺跡
84　向山古墳群
85　上淀廃寺

第４図　周辺遺跡分布図

が南北に整然と並んで確認されており、会見郡衙の一画である可能性が示唆されている。遺跡周辺では官衙に関連する遺物が多く確認されている。特に陰田遺跡群（9）では口陰田遺跡で「館」「多知」「田知」と記された墨書土器、木簡、円面硯が、陰田広畑遺跡では「里宅」または「里長」と判読される墨書土器が出土している。長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では胞衣壺が出土しており、中には和銅開珎、墨が納められていた。また、近接する樋ノ口遺跡（23）では石帯の可能性がある石製品が出土している。日野川東岸の上福万遺跡（72）では「奈□」と記された墨書土器が出土し、久古第３遺跡では土馬やミニチュア土製品などの祭祀具がみられる。岸本大成遺跡（54）では朱墨とみられる赤色顔料が付着した転用硯、京都産とみられる緑釉陶器が出土している。

古代山陰道は歴史的、地理的環境から大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通って伯耆町岩屋谷、南部町諸木、天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪、青木、古市を抜ける北側のルートが想定されている。ただし、発掘調査による明確な確認には至っていない。

中世

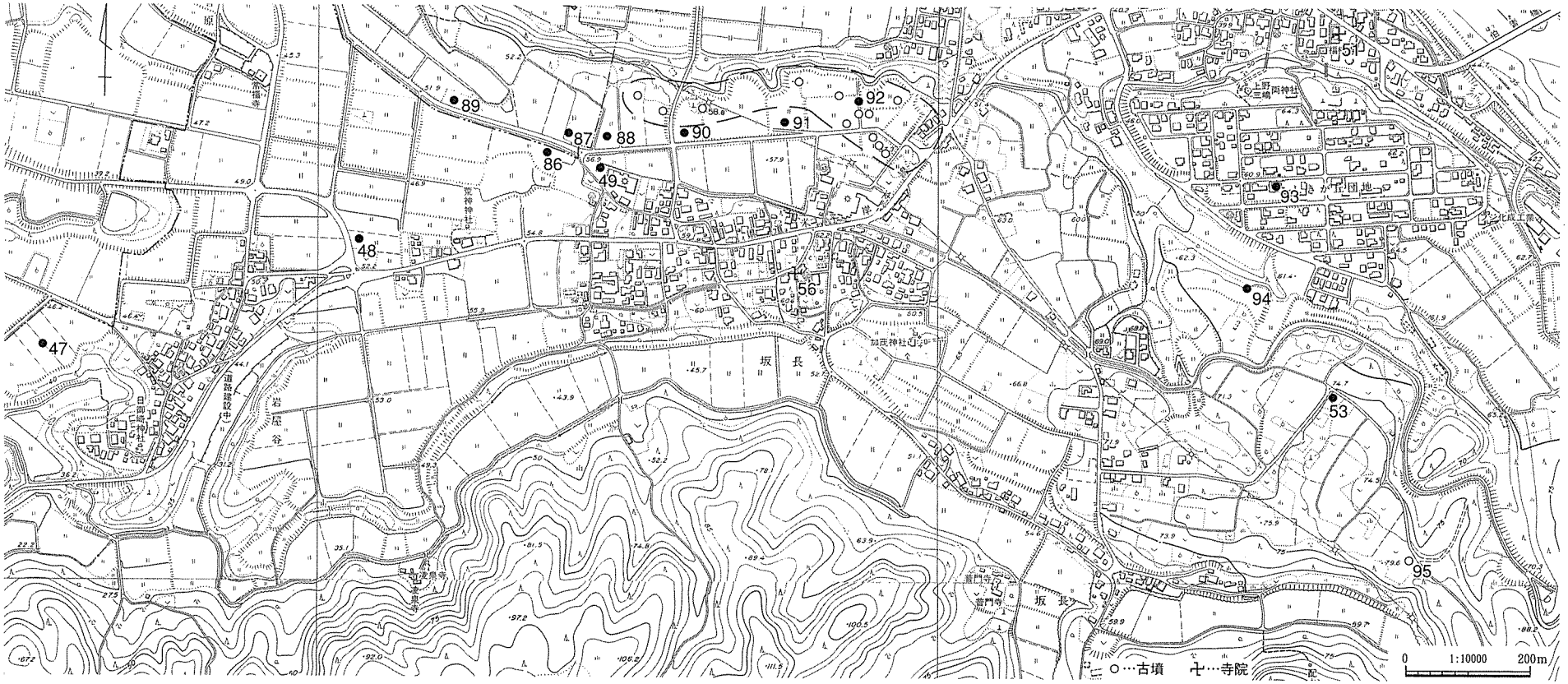
平安末期の遺物として大山寺の鉄製厨子がある。厨子には承安元年（1171年）の大山寺火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。紀成盛については伯耆町坂長に「紀成森（ママ）長者之塔」と記された石碑があり、この地に居宅を構えたという伝承が残る。平安期には律令制の基礎をなしていた班田制が崩れはじめ、各地に荘園が発達する。日野川右岸には久古牧（荘）が存在したとみられ、室町時代の観応２年（1351年）には伯耆守護山名時氏がこれを大山寺西明院に寄進している。また、応永２年（1416年）に大山寺文殊堂に奉納されたと伝えられる懸仏には墨書で「奉懸御正躰一□久古御□□□（牧カ）・・」と記されている。大永４年（1524年）には出雲の尼子経久が伯耆に侵攻し、山名方である行松氏の尾高城（76）を攻め滅ぼす。岸本要害（57）は尾高城の砦とも播州三木城の出城ともいわれるが詳細は定かではない。

近世

伯耆国は中村一忠と加藤貞泰とが領主交代し、元和３年（1617年）に池田光政が因幡・伯耆の両国32万石を領する鳥取城主となり鳥取藩ができる。その後、寛永９年（1632年）には国替えにより池田光仲が封入する。周辺地域は藩の直轄領、寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属した。長者原台地はこの藩政期において石田村吉持家により佐野川開発事業が実施された。事業は元和４年（1618年）から文久元年（1861年）までの250年間に及んでいる。

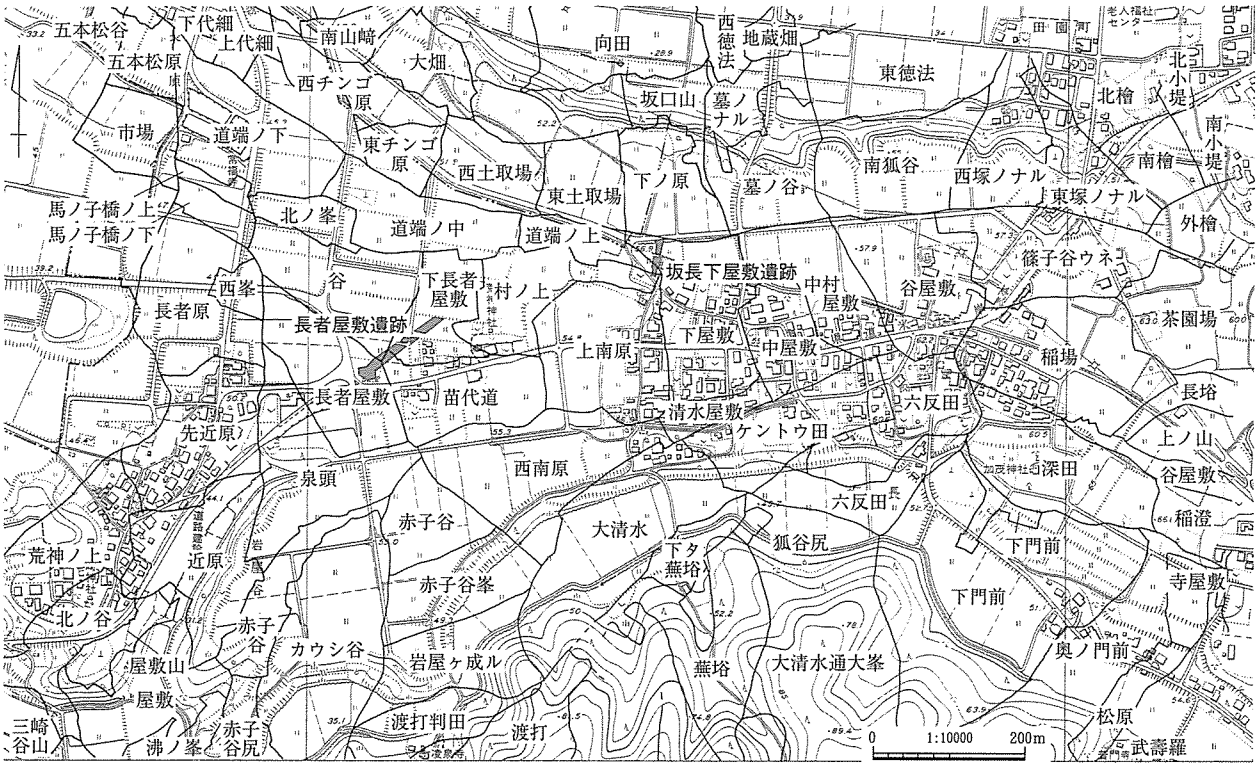
大寺廃寺・石製鴟尾

坂中廃寺・塔心礎



	遺跡名	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	古代	中世	近世	主要遺構・遺物
47	荒神上遺跡								奈良・平安時代の掘立柱建物、土抗（鍛冶関連遺物出土）
48	長者屋敷遺跡								奈良・平安時代の掘立柱建物２棟、区画溝、転用硯
49	坂長下屋敷遺跡								奈良・平安時代の掘立柱建物３棟
50	坂中廃寺跡								塔心礎・軒丸瓦・軒平瓦
51	大寺廃寺跡								塔・金堂・講堂・回廊跡　石製鴟尾、塑像、軒丸瓦、軒平瓦
52	長者原古墳群								径14～38mの円墳、円筒埴輪
53	坂中第５遺跡								弥生後期末～古墳前期の竪穴住居９棟、古墳時代後期の石蓋土抗墓
86	坂長道端ノ上遺跡								古墳時代前期の竪穴住居１棟、軒平瓦
88	大殿下ノ原遺跡								奈良・平安期の掘立柱建物１棟、総柱建物２棟
87	米子諏訪東土取場遺跡								奈良・平安期の掘立柱建物６棟
89	米子諏訪西土取場遺跡								奈良・平安期の掘立柱建物10棟、鍛冶関連遺物
90	大殿所在遺跡								鉄関連遺物
91	大殿墓ノ谷遺跡								焼土、鉄関連遺物、ミニチュア土製品
92	こしき保育園裏遺跡								奈良・平安期の竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟
93	越敷ヶ丘遺跡								弥生後期～古代の竪穴住居、石蓋土抗、円筒埴輪、瓦
94	坂長田ノ上遺跡								古墳時代後期の竪穴住居１棟
95	伯楽塚16号墳								径13mの円墳

第５図　長者原台地上遺跡分布図



第６図　調査地周辺小字図

第３節　遺跡周辺の地名

調査地の字名は長者屋敷遺跡が「長者屋敷」であり、一部「長者原」、「下長者屋敷」、「泉頭」、「谷」、「先近原」にも及んでいる（第６図）。「長者屋敷」「長者原」の地名は郡衙や郡衙を構成する正倉別院が置かれていた土地に残っていることが多い。それは、郡衙や正倉別院には田租や出挙稲を収納した多数の稲倉が立ち並んでいることから、長者がいたという伝承に結びついたと考えられている。また、正倉はしばしば、火災（放火）に遭ったことが知られており、炭化米が出土することが多い。このことも長者伝説と結びついた一因となっているとみられている。長者屋敷遺跡でも出土状況や数量は定かではないが、発掘調査により炭化米が出土したことが報告されている。また、前節で触れたが、平安時代の豪族紀成盛の屋敷跡であったという伝承が残る。

その他、長者屋敷遺跡の北西側には「馬ノ子橋上」「馬ノ子橋下」の字名が残っている。古代山陰道の通過ルートは未だ確定していないが、駅家に関連した施設が存在した可能性を示唆する。

坂長下屋敷遺跡の位置する字名は「下屋敷」で、周辺には「中屋敷」「清水屋敷」「中村屋敷」「谷屋敷」といった字名が集中しており、屋敷地としての土地利用が窺える。

【参考文献】

地質調査所 1962『５萬分の１地質図幅説明書　米子』（岡山－第18号）

山名巌 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』

岸本町 1983『岸本町誌』

会見町 1996『会見町誌　続編』

山中敏史ほか 2004『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所

第４節　長者屋敷遺跡の既往調査

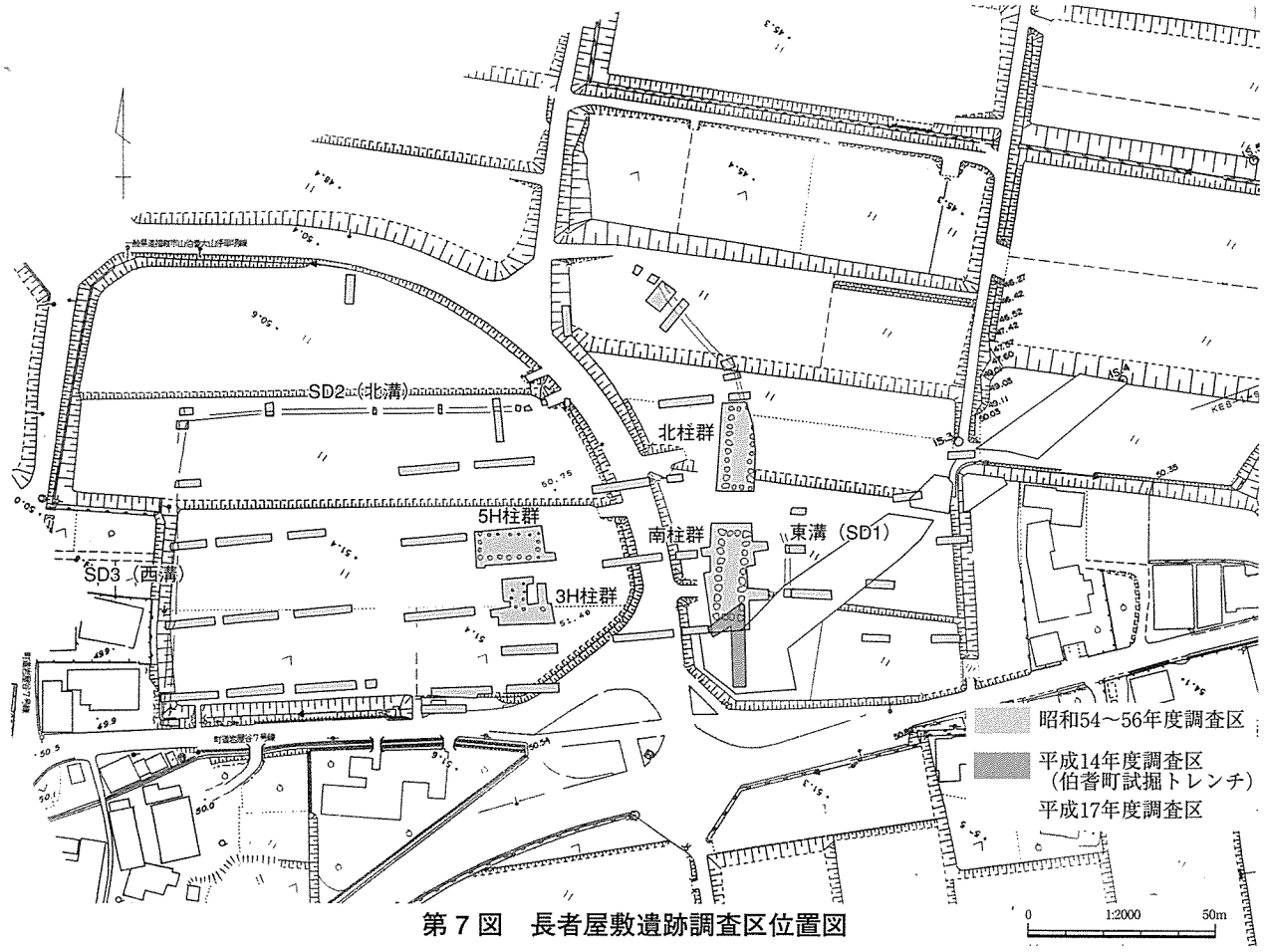
長者屋敷遺跡は従前より周知の遺跡である。昭和54～56年度には圃場整備に伴う発掘調査が実施され、報告書が刊行されている(註1)。本節ではその調査成果について再整理してみたい。また、報告書では未掲載の遺物についても報告する。

１．調査経緯と経過

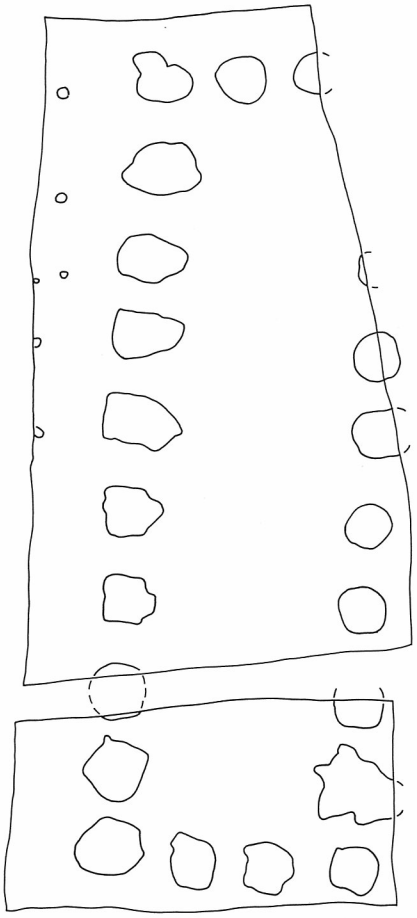
昭和53年度から５年計画で伯耆町（旧岸本町）坂長、岩屋谷、大殿地区、及び米子市五千石地区を対象に圃場整備が行われるのに先立ち、昭和54～56年度にかけて国及び県の補助事業として発掘調査が実施された。その際、長者屋敷遺跡の他に大寺原遺跡、長者原古墳群、こしき保育園裏遺跡なども併せて調査が行われている。長者屋敷遺跡は昭和54年12月19日に調査が開始された。２ｍ×15mのトレンチを設定し、遺構の検出状況によってトレンチを追加、及び拡張している。トレンチの総数は60本を数える（第７図）。検出された遺構のうち、大型の掘立柱建物２棟（北柱群、南柱群）は古代会見郡衙の一部、もしくは平安時代の地方豪族である紀成盛の居館跡などが可能性として想起された。そのため実態の解明は将来に委ねられ、現状保存された。昭和56年には測量を行い、調査を終了している。

２．遺構の概要

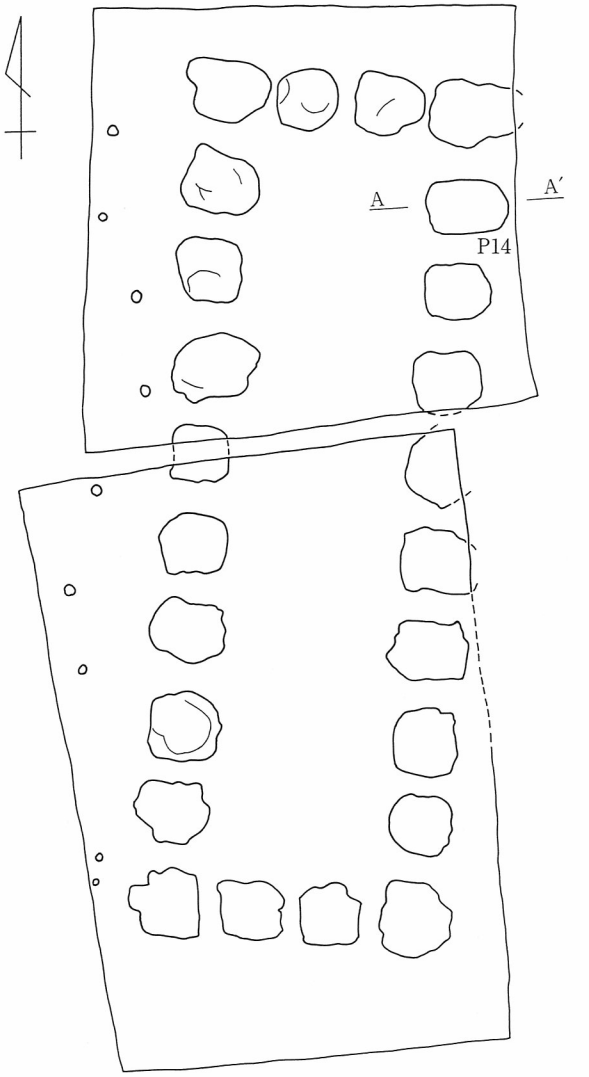
掘立柱建物４棟、溝４基等を確認している。掘立柱建物は調査範囲の東側に位置し、２棟が南北



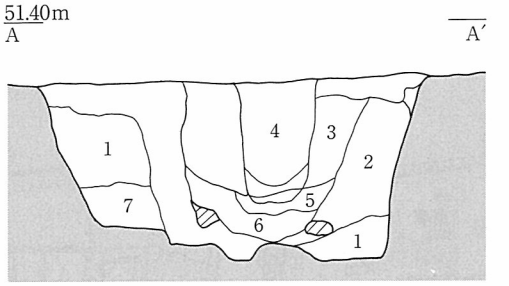
第７図　長者屋敷遺跡調査区位置図



北柱群

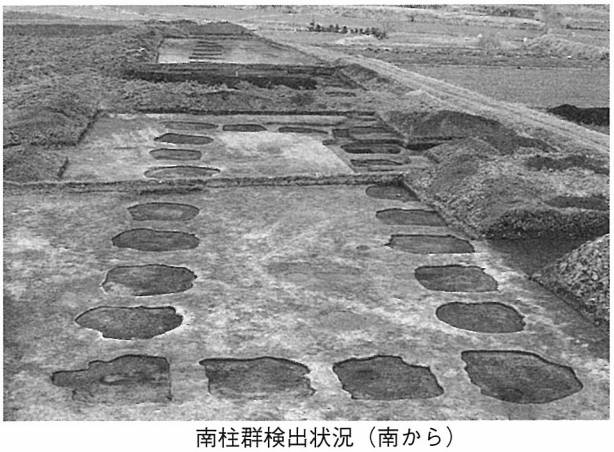


南柱群



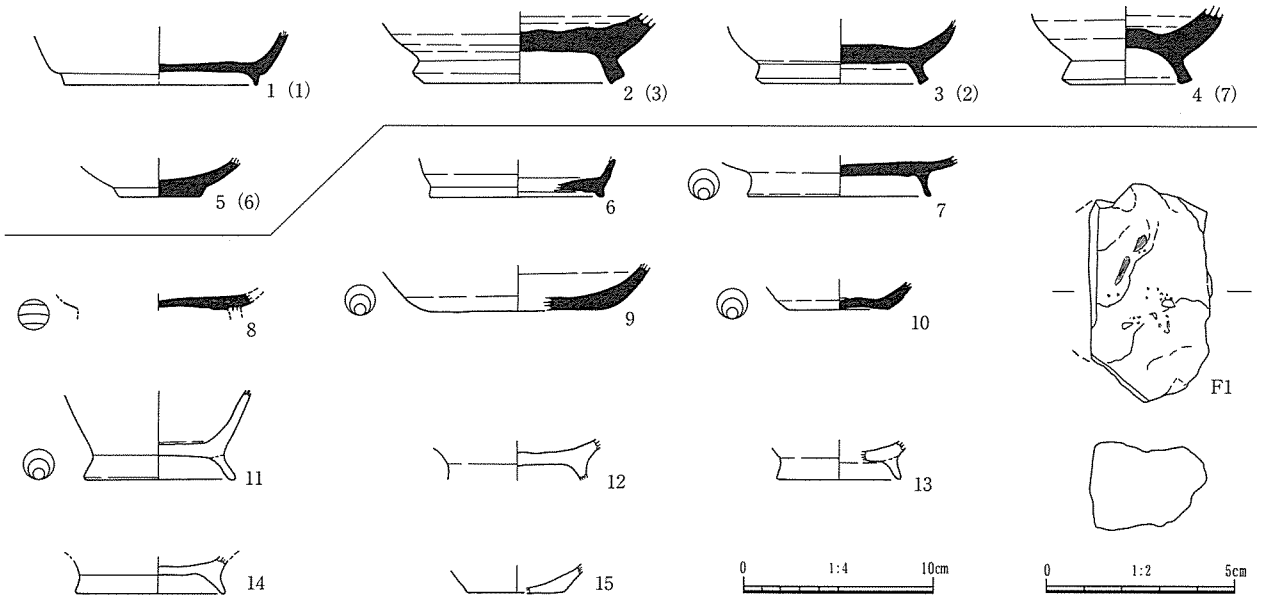
1　真赤土に淡黒色土若干混入
2　真黒ブロック混入
3　黒勝の赤ブロック混入
4　真黒
5　粘土千本突で堅い
6　粘土
7　粘土千本突で堅い

南柱群P14土層断面



南柱群検出状況（南から）
（伯耆町教育委員会提供）

第８図　北柱群・南柱群



1～5の（　）内番号は『長者原遺跡群発掘調査報告書1982』(註2) での掲載番号

第９図　既往調査出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土焼成	色調	備考
1	9		須恵器高台付坏						長者原遺跡群発掘調査報告書 1982 挿図6-1
2	9	北柱群検出トレンチ	須恵器高台付壺						長者原遺跡群発掘調査報告書 1982 挿図6-3
3	9	5Qトレンチ	須恵器高台付壺						長者原遺跡群発掘調査報告書 1982 挿図6-2
4	9	北柱群検出トレンチ	須恵器高台付壺						長者原遺跡群発掘調査報告書 1982 挿図6-7
5	9	3Hトレンチ	須恵器壺						長者原遺跡群発掘調査報告書 1982 挿図6-6
6	9		須恵器高台付坏	－ ＊8.9	△1.7	外面:体部高台回転ナデ　底部回転ナデ 内面:回転ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
7	9	1Jトレンチ表層内	須恵器高台付皿	－ ＊9.8	△2.0	外面:体部・高台回転ナデ　底部　回転糸切り後ナデ？ 内面:磨耗のため調整不明	密 軟	淡橙色	
8	9	南柱群検出トレンチ	須恵器高台付坏	－ －	△3.0	外面:底部静止糸切り 内面:回転ナデ後不整方向ナデ	黒色細砂粒多量 良	灰色	
9	9	4C	須恵器坏	－ 9.8	△2.3	外面:回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	細砂粒多量 良	灰色	
10	9	北柱群検出トレンチ	須恵器坏	－ ＊5.4	△1.9	外面:回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	細砂粒少量 軟	淡灰色	
11	9		土師器高台付坏	－ 8.0	△4.65	外面:体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り後回転ナデ 内面:回転ナデ	砂粒多量 良	にぶい黄橙色	
12	9		土師器高台付坏	－ －	△2.1	外面:回転ナデ　磨耗著しい 内面:回転ナデ	密 良	橙色	
13	9	1Jトレンチ南　表層	土師器高台付坏	－ ＊6.4	△2.0	内外面:摩耗のため調整不明	細砂粒少量 良	橙色	
14	9	9A	土師器高台付坏	－ ＊7.9	△1.8	外面:摩耗のため調整不明　回転ナデ？ 内面:摩耗のため調整不明　回転ナデ？	密 良	橙色	
15	9	1Jトレンチ南　表層	土師器坏	－ ＊5.1	△1.5	内外面:摩耗のため調整不明	密 良	橙色	

に直列する北柱群、南柱群と調査範囲の中央付近で確認された３Ｈ柱群、５Ｈ柱群とに分けられる。溝は調査範囲の東側でＳＤ１（東溝）、北側でＳＤ２（北溝）、西側でＳＤ３（西溝）が検出されている。ＳＤ１は重複関係により北柱群に後出することが報告されている。このＳＤ１は今年度の発掘調査区においてその延長部分を確認しており、出土遺物から近世以降の溝であることが判明している（第３章第３節参照）。

掘立柱建物（第８図）

北柱群、南柱群は南柱群Ｐ14のみ調査し、その他の柱穴については検出に留められている。北柱群が桁行９間（約21m）、梁行３間（6.5m）、南柱群が梁行９間（約21.5m）、桁行３間（約6.5m）の南北棟である。主軸の方位はＮ－３～４°－Ｅである。柱間寸法は柱穴が未調査のため明らかではないが、心々で測ると桁行、梁行とも2.1～2.5mと復元される。北柱群と南柱群の棟間距離は北

柱群Ｐ13と南柱群Ｐ22の心々距離で約12mと推定できる。南柱群Ｐ14は掘りかたが長軸２ｍ、短軸1.4mの方形を呈する。深さは約1.0mである。埋土は７層に分層されている。断面観察や底面に認められる段差などから、報告書では３回、ないしは４回の建替えを想定している。柱痕から柱の径は40cmと推定される。出土遺物として北柱群から須恵器底部（第９図２、４）、南柱群から須恵器坏蓋が報告されているが、出土位置や層位は明らかではない。その他に南柱群の柱穴を検出した際、埋土中より鉄鏃が１点出土している。

５Ｈ柱群は梁行６間（約15m）、桁行３間（約６ｍ）の東西棟である。主軸の方位はほぼ東西正方位である。柱間寸法は心々で梁行2.4～2.7m、桁行2.0m前後と推定される。柱穴の掘りかたは直径１ｍ前後の円形を呈する。３Ｈ柱群は梁行３間（約5.8m）、桁行１間（約３ｍ）を確認しており、南北棟と推定される。柱穴の掘りかたは50cm前後の円形を呈する。両建物の柱穴から中世の陶磁器片が多く出土したと報告されているが、遺物の所在が明らかでないため、詳細な時期の検討はできていない。また、３Ｈ、５Ｈトレンチ、および３Ｊ、５Ｊトレンチの黒色土層中に僅かではあるが炭化米の層がみられることが報告されている。

溝

ＳＤ３は幅1.3mで、南北に直線状に延びる。検出した長さは85mである。深さは明らかではないが、ローム層を30cmほど掘り込んでいる。ＳＤ２は幅約１.0mで東西に直線状に延びる。検出した長さは70mである。ＳＤ３の北側は９Ｑトレンチまで確認されている一方で、８Ｑトレンチで東へと分岐しており、ＳＤ２につながると報告されている。遺物はＳＤ３から須恵器片、ＳＤ２から中世とみられる陶磁器片が出土している。

３．出土遺物（第９図　図版８－１）

ここでは、北柱群・南柱群の時期比定に関わる可能性がある土器を掲載している。第９図１～10は須恵器、11～15は土師器である。２、４、10は北柱群を、８は南柱群を検出したトレンチから出土しているが、出土層位は不明である。７、13、15は表土中の出土である。１～５については既に報告済みで、１が高台を持つ坏身で、２～５は壺の底部と報告されている。６、８は高台付坏である。６は口縁部が外傾して直線的に立ち上がると考えられ、高台が底部の周縁に付く。８は底部が静止糸切りにより切り離されている。９、10は無高台の坏で、底部は回転糸切りである。７は皿と考えられ、高台を有する。11～14は土師器坏で、高台を有する。11は高台の高さが1.3cmで、体部が直線的に立ち上がる。

（註１）富長源十郎ほか 1982『長者原遺跡群発掘調査報告書』岸本町教育委員会

（註２）前掲（註１）文献

第３章　長者屋敷遺跡

第１節　遺跡の立地と土層堆積

１．調査地及び周辺の地形（第10図　図版１～４）

調査地は西伯郡伯耆町の西北部、越敷山北麓の長者原台地上に位置する。台地上には小規模な谷が概ね東西～北西方向へ幾筋も延びて緩やかな起伏をなし、平坦地は制限されている。台地上は近世の佐野川用水路完成、通水を経て、特に耕作地としての開発が進み現在に至っている。

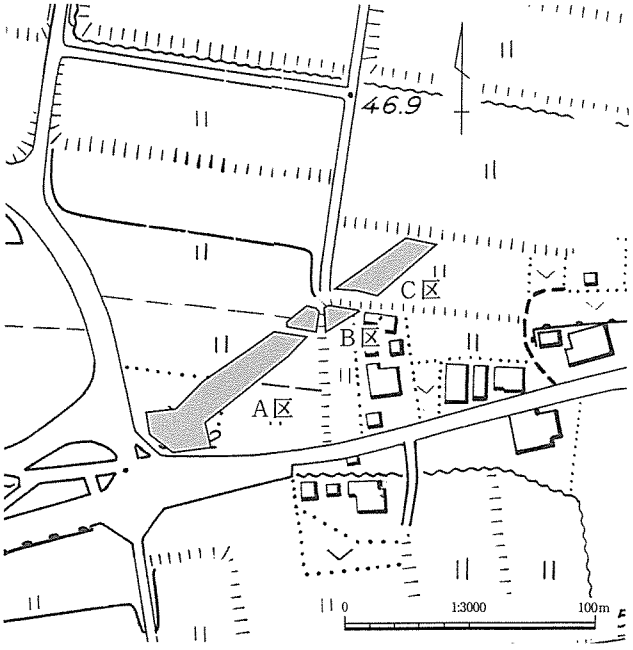
調査地は台地上を東西方向に延びる浅い谷筋の南側に所在し、Ａ～Ｃ区の３つに分けて調査を行った（第10図）。Ａ・Ｂ区は谷に接する台地上、Ｃ区は台地端から谷へと降る斜面上に位置するが、現況は圃場整備等により削平され平坦地となっている。各調査区の現地表面の標高は、Ａ区51.4～51.8m、Ｂ区52.3～52.5m、Ｃ区約50mである。Ｃ区は削平が特に著しく、表土直下にローム層が確認され、遺構・遺物は認められなかった。Ａ区は北・北東壁、南・南東壁、Ｂ区は南東壁沿いにそれぞれトレンチを設定し、土層堆積を確認し調査を行った。その結果、Ａ区中央～北東部に概ね南北方向に延びる谷状の落ち込みを確認した。Ａ区・Ｂ区の境とＣ区については著しく削平されているが、調査地内はＡ区の谷状地形を挟みＢ区へ標高が緩やかに高くなり、Ｂ区を最高点としてＣ区から谷へと下っていく地形となる。Ａ・Ｂ区では弥生時代、古代、中世、近世以降に至る遺構・遺物を確認した。

２．調査地の堆積（第11～13・15図　図版７・８－２・10－２）

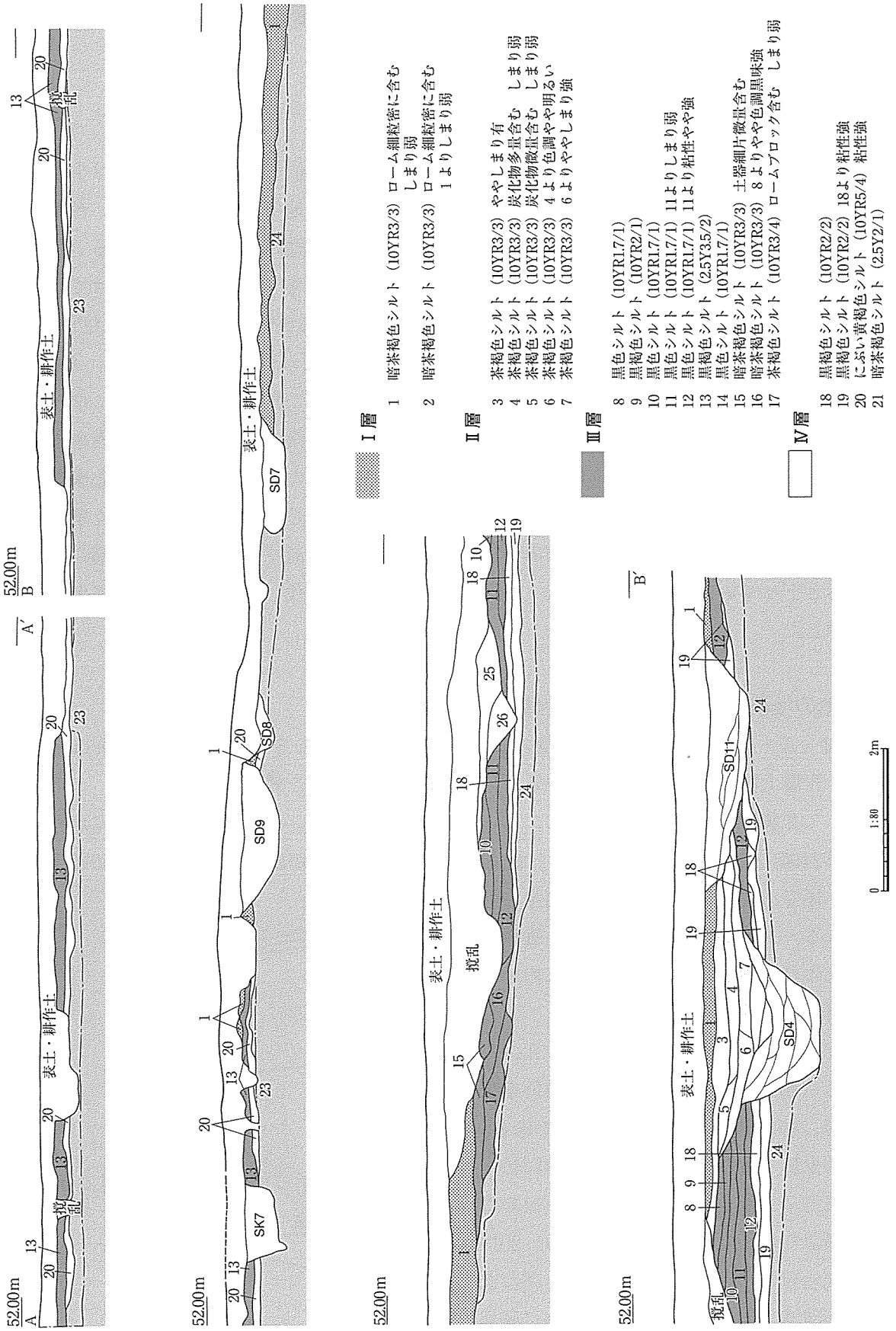
調査地内（Ａ・Ｂ区）の基本的な堆積のまとまりをⅠ～Ⅴ層の５つに大別した（第11・12図）。遺構はⅠ～Ⅳ層上面において検出している。以下、各層毎に概要を述べる。

Ⅰ層（１・２層）：表土直下に堆積し、ローム細粒を密に含み、Ａ区中央～北東部にかけて認められる（第24図）。層中からは少量ながら弥生時代～近世の遺物が出土している。第13図１は肥前系磁器の小杯で、18世紀後半～19世紀前半のものと思われる。人為的な堆積と思われ、近世以降の造成土の可能性がある。当層上面において道路状遺構、溝を検出している。

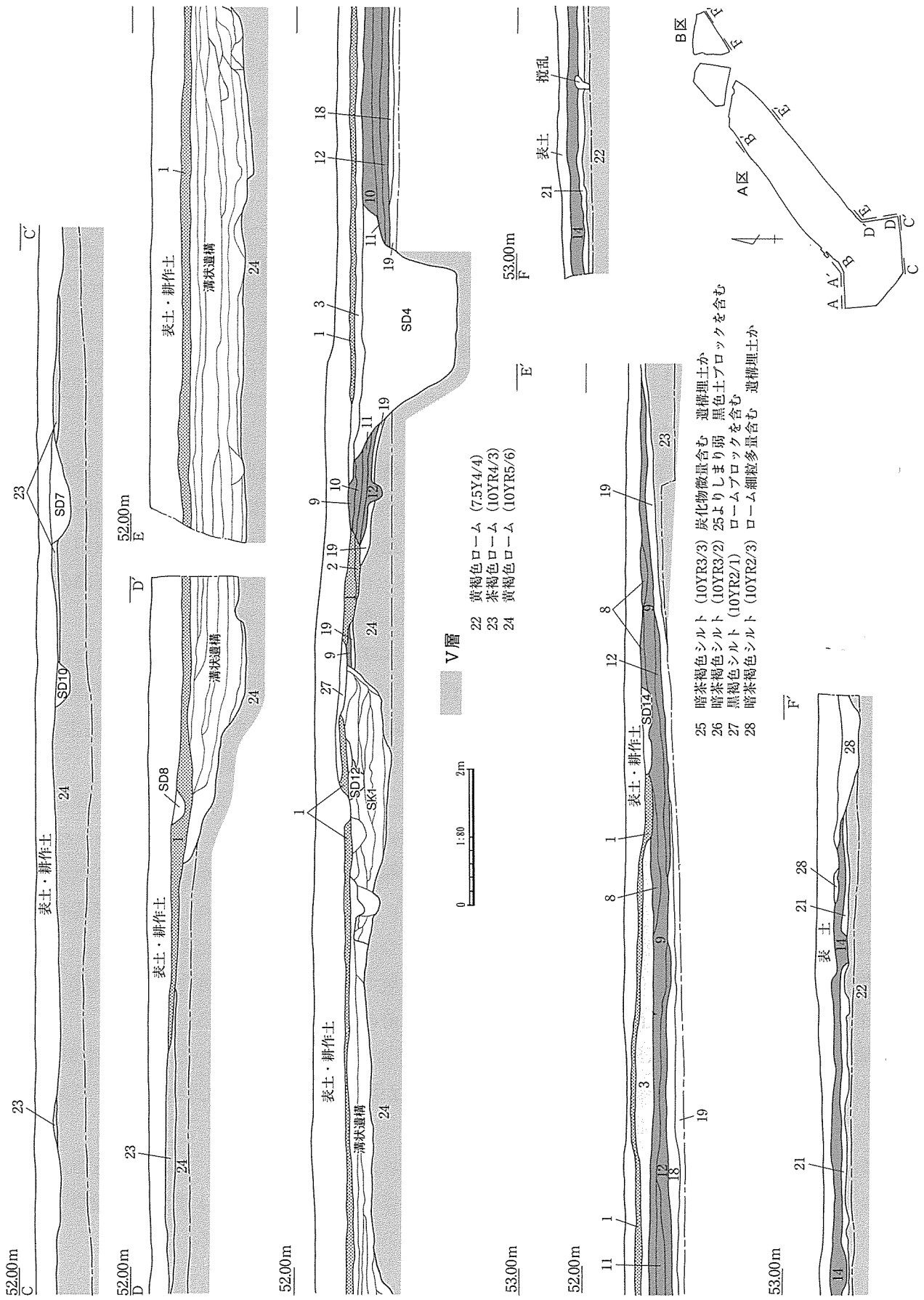
Ⅱ層（３～７層）：Ⅰ層下堆積層で、Ａ区東半に広がる（第14図）。茶褐色～暗茶褐色を呈する層群で、谷状地形埋没後の堆積層である。出土遺物は少量で破片資料が多い。第13図17～19、第15図25・26は土師器の坏または小皿の底部で、底部切り離しは回転糸切りである。20は土師器の高台付坏で、「八」字状に開く高台が付く。第15図23は小皿、24は柱状高台状に底部が厚く、皿と思われる。これらの出土遺物より当層は中世前期の堆積層と考えられ、上面では



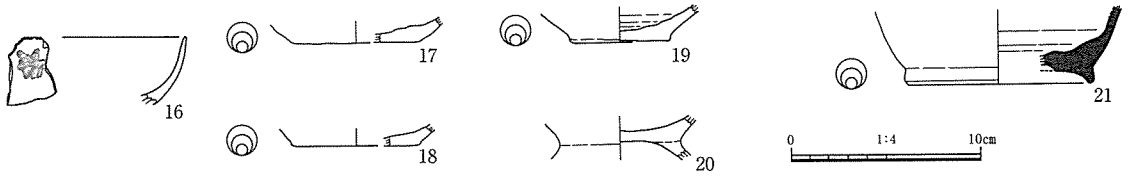
第10図　遺跡周辺の地形



第11図　調査区土層断面（１）



第12図　調査区土層断面（２）



第13図　包含層出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	地区 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
16	13	A2 Ⅰ層	磁器 小杯	－	△3.6	外面:呉須により花弁を描く	密 良	灰白色	肥前系
17	13	C4 Ⅱ層	土師器 坏？	－ ＊6.6	△1.2	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	細砂粒微量 良	にぶい橙色	
18	13	C4 Ⅱ層	土師器 坏？	－ ＊6.5	△1.0	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面:回転ナデ　磨耗著しい	細砂粒多量 良	にぶい橙色	
19	13	C4 Ⅱ層	土師器 坏？	－ ＊5.3	△1.9	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:磨耗のため不明	細砂粒微量 良	にぶい橙色、浅黄色 にぶい黄橙色	
20	13	C4 Ⅱ層	土師器 高台付坏	－	△2.3	外面:体部・高台回転ナデ　底部調整不明 内面:回転ナデ	細砂粒少量 良	橙色	
21	13	E7 Ⅲ層	須恵器 壺	－ ＊9.6	△3.9	外面:体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	砂粒少量 良	灰色	B区

溝状遺構（詳細は本章第２節４を参照）を検出している。

Ⅲ層（８～17層）：Ⅱ層下位に堆積し、黒褐色～暗茶褐色を呈する層群である。Ａ区の谷状地形を埋める堆積で（第14図）、黒褐色～黒色を呈する８～12層とその下位に堆積する15～17層に分けられる。15～17層の色調は暗茶褐色～茶褐色で、Ⅱ層と近似する。谷部以外にはＡ区南西側・北東側、Ｂ区にも色調が黒褐色を呈する堆積層が広がる（13・14層）。それらは削平のため谷部の堆積と寸断されているが、他層との堆積関係や土色の類似からⅢ層と判断した。

当層上面からは谷部で検出した古代のＳＤ４（詳細は本章第２節）が掘り込まれる。また、平成14年度に岸本町教育委員会（現在：伯耆町教育委員会）が実施したＡ区南西部のトレンチ調査(註1)では、古代と目される大型の掘立柱建物（南柱群：詳細は第２章第４節を参照）が一部検出され、その柱穴が当層を切っていることが確認されており、当層上面は古代の遺構面となる。

当層中からの出土遺物は非常に少ない。谷部の堆積についてはＳＤ４の保護が決定し、限られた箇所のみの掘削となったため明確な堆積時期は不明である。谷部堆積下層の16・17層からは土師器・須恵器細片を確認しており、少なくとも古墳時代後期以降に谷部の埋没が進行したことが想定される。また、Ｂ区15層より須恵器壺の底部（第13図21）が１点出土しており、Ⅲ層の堆積時期の下限は古代と考えられる。Ⅲ層が谷を埋めて程なく、ＳＤ４が掘られたことが窺える。

Ⅳ層（18～21層）：Ⅲ層・Ⅴ層（ローム層）間の漸移層である。Ａ区では弥生時代の土坑（ＳＫ２）を検出しており、当層上面は少なくとも古墳時代以前の遺構検出面となる。

Ⅴ層（22～24層）：ローム層で、色調、土質の違いから３つに分けた。22・23層は粘性が強く、それらの下位に堆積する24層は淡い黄褐色を呈し、粘性が弱く固く締まる。Ｃ区の表土下で確認されるローム層はさらに下位の堆積である。

なお、Ａ区の谷部堆積・ＳＤ４埋土を中心に堆積時の状況を把握するため、北東壁面各層から土壌サンプルを採取し、自然科学分析各種（珪藻・花粉・寄生虫卵分析、ＳＤ４埋土層相観察）を実施した。採取位置は第15図、分析結果の詳細については第６章に掲載している。

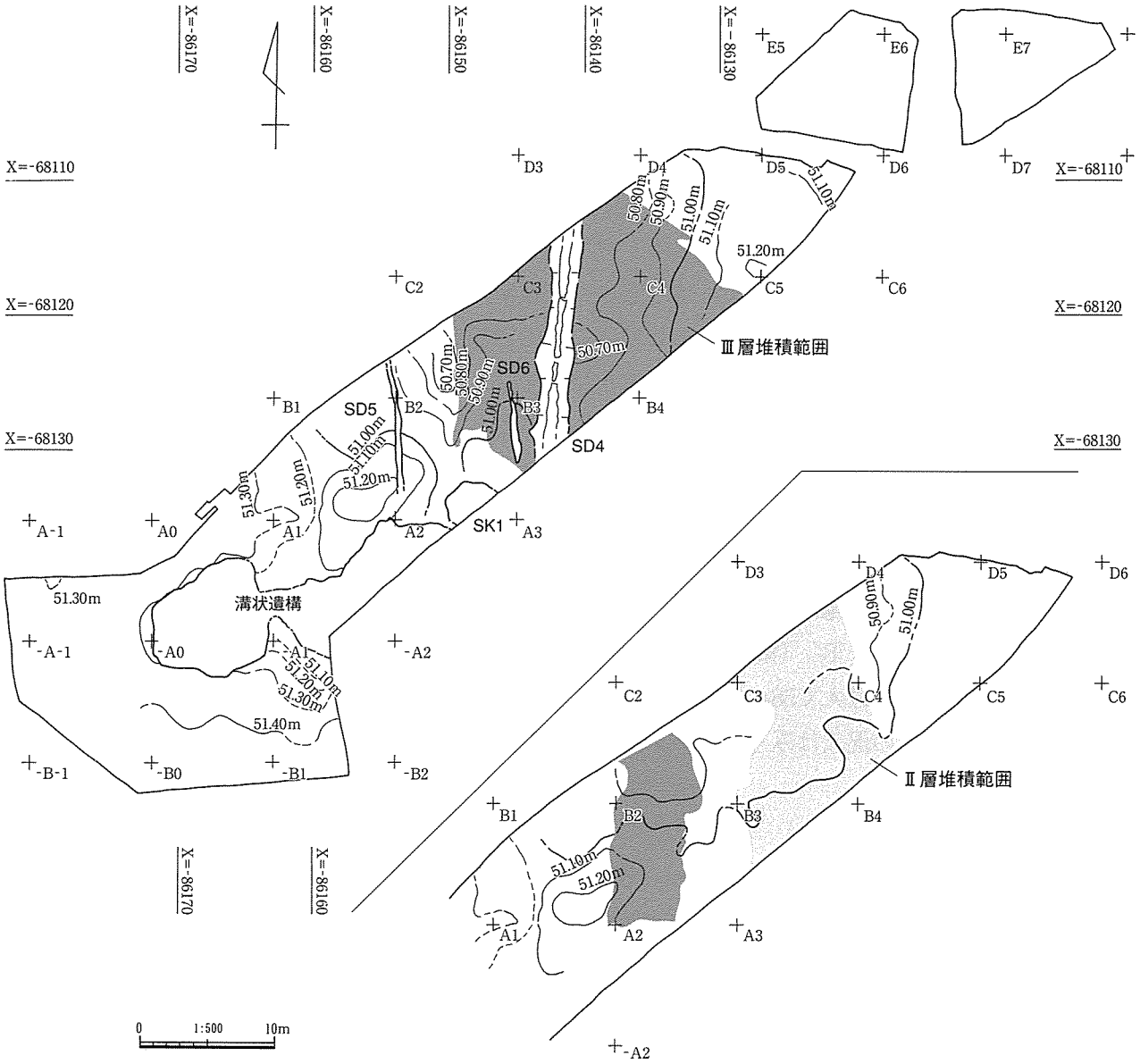
（註１）角田寛幸 2003『平成13，14年度町内遺跡発掘調査報告書』 岸本町教育委員会

第２節　古代～中世の調査

１．概要（第14図）

Ａ区で溝３基、土坑１基、溝状遺構１基を確認している。建物を構成する柱穴等は検出されていない。ＳＤ４・６、およびＳＫ１は谷部がⅢ層によって埋積された後に形成された遺構である。ＳＤ５、溝状遺構についてはＢ３、Ｃ３グリッド付近でⅢ－15～17層を掘り込んでいるが、大部分がⅣ層、もしくはⅤ層上面が検出面となる。遺構が形成された地形をみると、谷部では埋積後も南から北へ緩やかに下っており、調査区南側と北側ではⅢ層上面での標高が30cmほど低い。ＳＤ４・５・６はこの地形に沿って南北方向に延びている。溝間の距離を溝の中心ラインで測ると、ＳＤ４とＳＤ５で約2.7m、ＳＤ５とＳＤ６で約8.5m、ＳＤ４とＳＤ６で約11.2mとなる。それに対して溝状遺構は平面形が不整形ではあるが、概ね東西方向に延びている。

ＳＤ４は昭和54～56年度に行われた発掘調査で確認された掘立柱建物２棟（北柱群・南柱群）の



第14図　古代～中世遺構分布図

東側に位置し、建物の主軸と方位をほぼ揃える。このことから建物の時期は明らかではないが、溝が同時期に併存していた可能性は高く、建物群の敷地を区画する施設であったと考えられる。この点については第７章で若干の検討を加える。

２．溝

ＳＤ４（第15・16図　図版９・10）

Ａ区Ｂ４～Ｄ４グリッド、標高51.00ｍ～50.70ｍの南から北へ下る緩斜面に位置する。検出した長さは18ｍで、南北方向に直線状に延びる。方位は溝の中心ラインで測るとＮ－４°－Ｅとなる。幅は2.0～2.8ｍで、溝肩のラインは直線ではなく、やや凹凸がある。底面の幅は20㎝～90㎝と一定しない。深さは1.3～1.5ｍで、断面は逆台形状を呈する。底面は平坦ではなく、段差が認められる。底面で標高は南端で49.44ｍ、北端で49.73ｍと北端の方が29㎝低い。

埋土は上層（１、２層）と下層（３～13層）に大別される。上層は暗褐色シルトで、溝の上部に堆積するⅡ－６・７層との境界が明瞭ではない。下層は黒褐色シルトである。各層を構成する堆積物に大差はなく、砂礫などの混入もみられない。埋土が溝の西側もしくは東側からの一方から流れ込んだ状況、すなわち土塁の存在を示唆するような堆積状況はみられない。また、掘り返しが行われた形跡は窺われない。各層から土壌試料を採取し、自然科学分析を実施した（第６章第１・２節参照）。そのうち、珪藻分析により定常的に水流が存在するような状況にはないという結果が得られている。また、軟Ｘ線写真の観察結果から僅かながらも滞水、もしくは弱い水流が存在した時期と土壌化作用が発達する時期があり、乾湿を繰り返しながら埋没していったことが判明している。

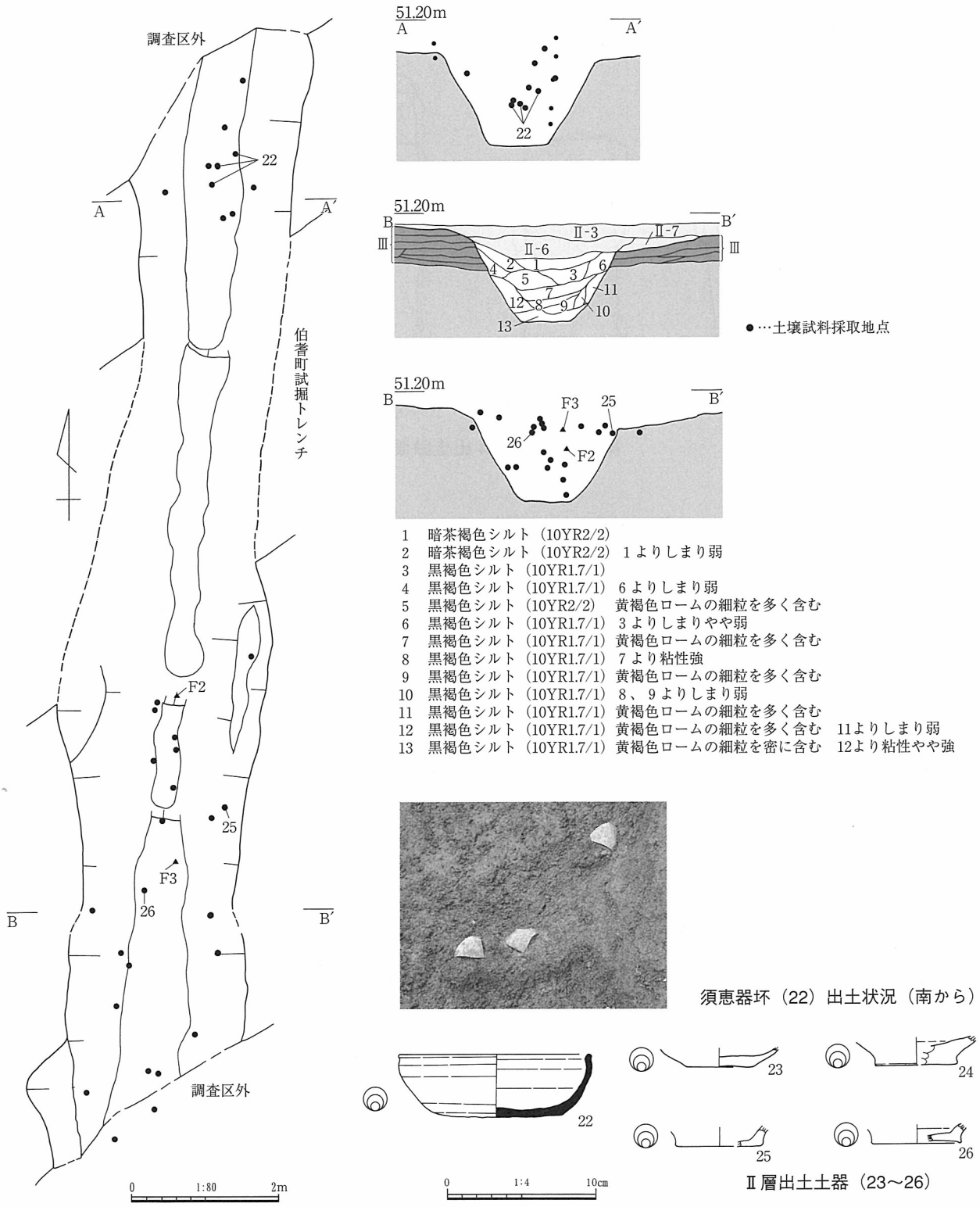
遺物の出土量は少なく、埋土中より須恵器片や土師器片が散見される。土器の他に上層から鉄製品Ｆ３が、下層から袋状鉄斧Ｆ２が出土している。須恵器22は溝底面より50～70㎝浮いた、下層中から出土した。無高台の杯身で、口縁部が僅かに屈曲し、体部が丸みを帯びる。底部は回転糸切りである。その他に時期を特定できる遺物は出土していない。また、明確に中世に下る遺物もみられないことから、溝の埋没時期は８世紀後半頃と推定される。

ＳＤ５（第17図　図版11－１）

Ａ区Ａ２・Ｂ２グリッド、標高51.00m、南西から北東に下る緩斜面に位置する。検出した長さは8.8ｍで、南北方向に直線状に延びる。方位はＮ－７°－Ｗである。北端は調査区外へと延びているが、北壁土層断面Ｂ－Ｂ′（第11図）では確認することはできなかった。Ⅰ層形成時に削平されたと考えられる。幅は最大で58㎝、深さは10㎝である。断面形が皿状を呈する。埋土は褐色シルトの単層で、砂礫などの混入はみられない。埋土中より須恵器甕の体部片が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

ＳＤ６（第17図　図版11－２）

Ａ区Ｃ３、Ｂ３グリッド、標高51.00m、南西から北東に下る緩斜面に位置する。全長は6.3ｍで、南西から北東方向に直線的に延びる。方位はＮ－７°－Ｗとなる。最大幅は62㎝、深さは10㎝である。埋土は褐色シルトの単層で、砂礫などの混入はみられない。遺物は出土していない。

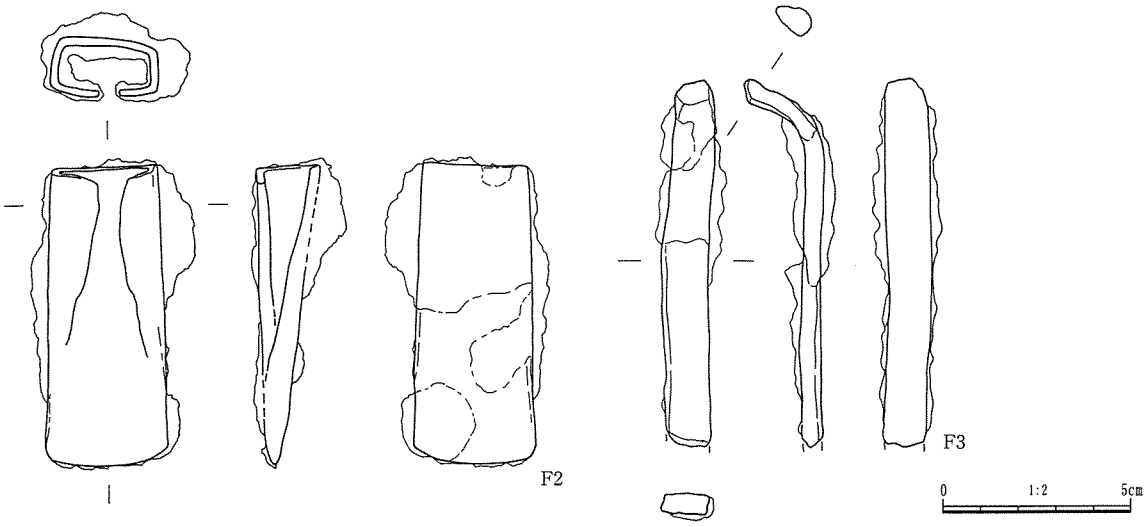


1　暗茶褐色シルト（10YR2/2）
2　暗茶褐色シルト（10YR2/2）１よりしまり弱
3　黒褐色シルト（10YR1.7/1）
4　黒褐色シルト（10YR1.7/1）６よりしまり弱
5　黒褐色シルト（10YR2/2）　黄褐色ロームの細粒を多く含む
6　黒褐色シルト（10YR1.7/1）３よりしまりやや弱
7　黒褐色シルト（10YR1.7/1）黄褐色ロームの細粒を多く含む
8　黒褐色シルト（10YR1.7/1）７より粘性強
9　黒褐色シルト（10YR1.7/1）黄褐色ロームの細粒を多く含む
10　黒褐色シルト（10YR1.7/1）８、９よりしまり弱
11　黒褐色シルト（10YR1.7/1）黄褐色ロームの細粒を多く含む
12　黒褐色シルト（10YR1.7/1）黄褐色ロームの細粒を多く含む　11よりしまり弱
13　黒褐色シルト（10YR1.7/1）黄褐色ロームの細粒を密に含む　12より粘性やや強

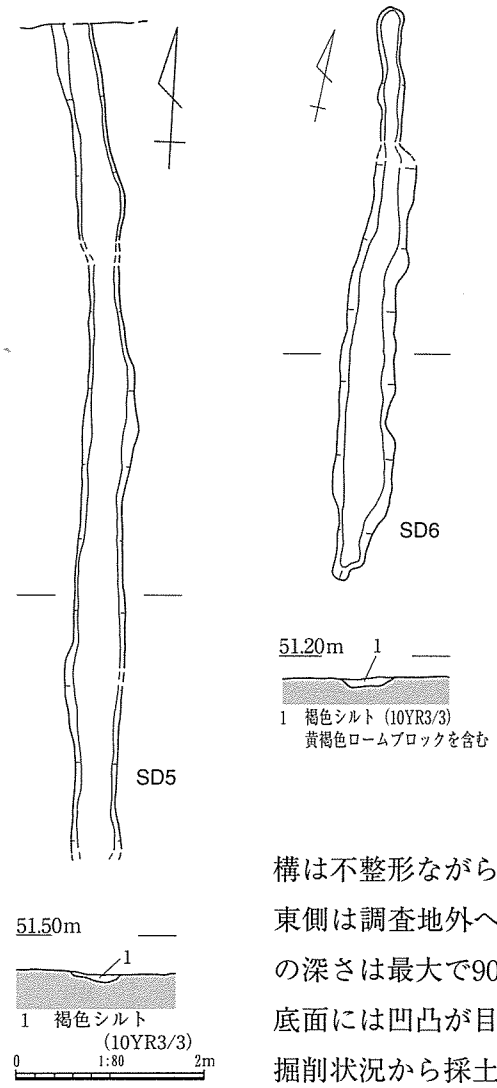
第15図　ＳＤ４および出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土焼成	色調	備考
22	15	SD4	須恵器坏	＊12.7 ＊8.7	4.3	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り後ナデ 内面:回転ナデ後不整方向ナデ	黒色砂粒多量 良	灰色	
23	15	Ⅱ層	土師器皿	― ＊4.55	△1.25	外面:摩耗のため調整不明　底部回転糸切り 内面:摩耗のため調整不明	密 良	にぶい黄橙色	
24	15	Ⅱ層	土師器皿	― ＊5.4	△1.9	外面:摩耗のため調整不明　底部回転糸切り 内面:摩耗のため調整不明	密 良	にぶい橙色	
25	15	Ⅱ層	土師器皿	― ＊5.5	△1.3	外面:磨耗のため調整不明　底部回転糸切り 内面:磨耗のため調整不明	密 良	橙色	
26	15	Ⅱ層	土師器皿	― ＊6.0	△1.3	外面:摩耗のため調整不明　底部回転糸切り 内面:摩耗のため調整不明	密 良	橙色	



第16図　ＳＤ４出土鉄製品



第17図　ＳＤ５・６

３．土坑

ＳＫ１（第18図　図版11－３）

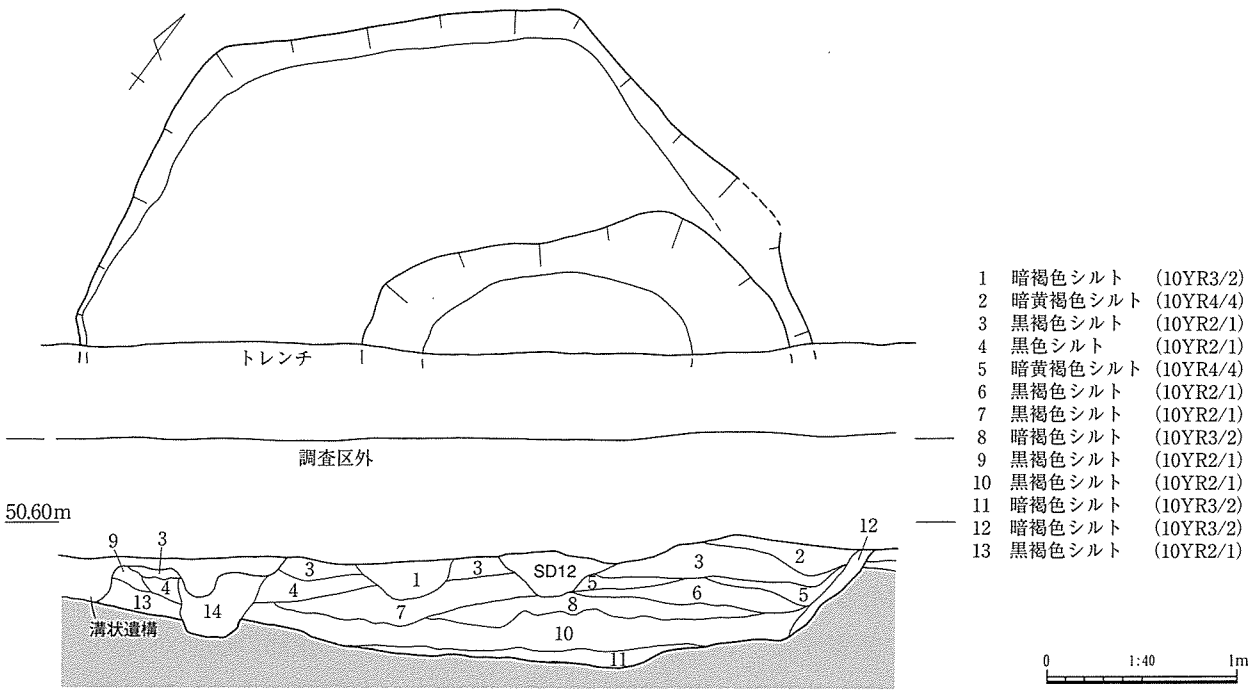
Ａ区、Ｂ３グリッド、標高50.4mの平坦地に位置し、南半分は調査区外のため未調査である。平面形が楕円形を呈すると考えられ、長径は3.87mである。検出面からの深さは最大57cmである。底面は平坦ではなく、凹凸がみられる。底面東寄りで径2.25mの範囲が楕円形状に一段深くなる。埋土は14層に細分され、黒褐色シルトが主体となる。遺物は須恵器の細片が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

４．性格不明遺構

溝状遺構（第19～22図　図版12～16）

Ａ区南西側、Ｂ２・Ａ０～Ａ３・－Ａ０～－Ａ２グリッドに位置する平面不整形の遺構である。Ⅱ層上面（第３章第１節参照）から掘り込まれるが、遺構の大部分はⅡ層の堆積範囲外のため、検出は主にⅣ層上面で行っている。遺構は不整形ながら概ね東西方向を指向し、西側は平面円形状を呈し収束するが東側は調査地外へと延び、全体像は不明である。幅は1.95～９m、検出面からの深さは最大で90cmを測り、西側の収束部から東へ除々に深くなる傾向にある。底面には凹凸が目立ち、各々約３～12m²の平面不整形の面を持つ。このような掘削状況から採土痕跡の可能性も考えられるが、判然としない。

埋土の主要な堆積を７層に分層した（第19図１～７層）。各層は概ね水平～緩やかな凹レンズ状に堆積し、層をなす粒子が比較的均質であり、観察では人為的な埋め戻しの可能性は低いと考えている。遺構埋積時の状況を把握するた



第18図　ＳＫ１

め、主要堆積層より土壌サンプルを採取し（第19図）自然科学分析（珪藻・花粉・寄生虫卵分析）を実施した。そのうち珪藻分析では陸生珪藻が多くを占め、基本的に乾燥環境にあったという結果を得ている。ただし、珪藻・花粉共に化石の残存状況が不良であるため、断定はできない。また、寄生虫卵は検出されていない。分析結果の詳細については第６章第１節に掲載している。出土遺物については各層から一定量認められたため、上層（１～３層）、中層（４・５層）、下層（６・７層）に大別し遺物を整理した。以下、層毎の遺物相について述べる。

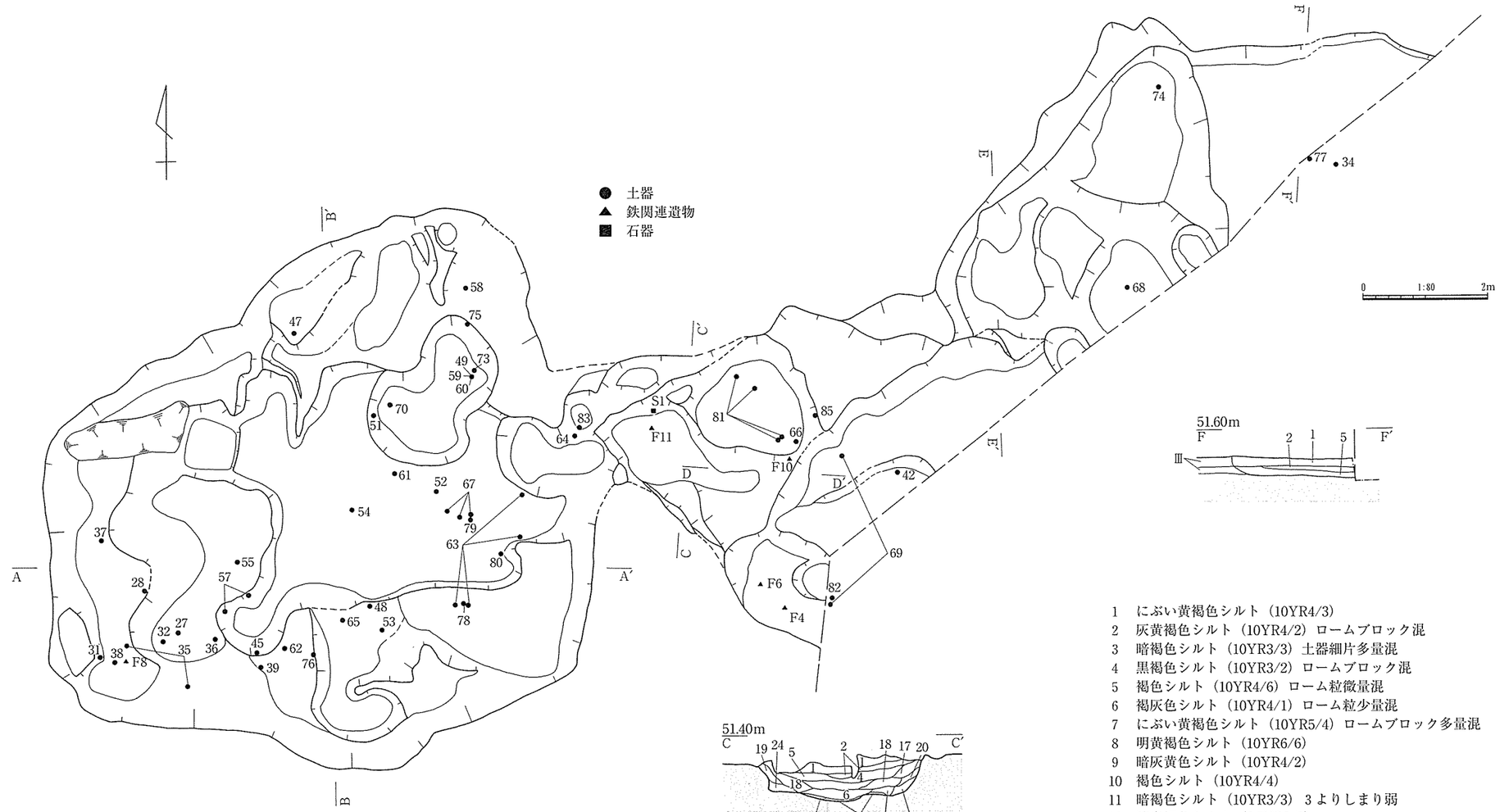
上層・中層出土遺物を第20図に示した。上層のうち西側に堆積する３層は土器細片が多量混じる。上層・中層共に土器片は磨耗が著しい。上層出土遺物は27～46、中層出土遺物は47～67である。上層・中層出土土器相に差異が認められないため、一括して述べていく。27～33、47～57は土師器の坏または皿である。底部資料であり、器形全体が明らかなものは無い。47は坏で内外面に赤色顔料塗布の痕跡が残る。47以外の底部切り離しは回転糸切りで、底径は5.0～7.6cmと幅がある。底部資料のみで器種を判断することは困難で、底径が比較的大きいものや残存部の形態から坏と考えられるもの（32・33・52・54）があるが、明確に判断できないものが多い。34～40、58～60は土師器の高台付坏である。34～40は「八」の字状に開く高台が付く。高さ1.4cm程度の細身の高台が付くもの（34～36）、断面三角形状を呈する低めの高台がつくもの（37～40）がある。60は高台が直立気味に付くが、後者の部類と考える。59は60と同一個体の可能性が高い。37については器形を復元できた。体部はやや丸みをもって外傾し、口縁部は外反気味となる。41～46、61～67は須恵器である。41は坏蓋で、口縁部の下方への屈曲が小さい。42・43は坏である。42は口縁端部の屈曲が僅かである。43は薄手で焼成がやや不良である。44・61は高台付坏で、61は底部周縁に小さな高台が付く。64は硯である。61に類似する高台付坏の転用硯で、底部は内外面共に使用により磨耗している。赤色顔料が内面に付着し、破面にも及んでいる。赤色顔料はいわゆる朱墨と思われ、顔料分析を実施

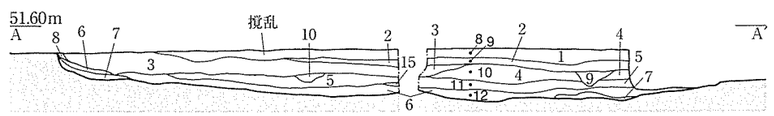
した。結果については第６章第２節を参照されたい。45・62・63は高台付皿である。46・65～67は壺で、46・67は大型のもの、66は高台が付くものである。

第21図は下層出土遺物である。６層は褐灰色を呈し、遺構底面に安定して堆積が認められた。掲載遺物のうちほとんどが当層からの出土である。68～72・74は土師器である。68は坏で内外面共に赤色顔料が塗布され、内面に櫛目状の線刻が認められる。暗文を施す際に付いた痕跡の可能性も考えられるが、磨耗が進み調整が確認できないため不明である。69～73は高台付坏である。69は内外面に赤色顔料塗布の痕跡が残る。体部外面中位に細い沈線様のものが２条巡り、その部位が若干窪むような形で外傾し、坏部が深い。70は体部中位で外反し、口縁部でやや内湾気味となる。磨耗が進んでいるが、底部調整はいわゆる底部押圧技法である。71は底部を欠損しているが、器形から同様なものと思われる。中層出土の58も磨耗が著しく調整が不明だが、器形から同様なタイプと考えている。72は高台が「八」の字状に開き器壁が厚く粗雑なつくりのもので、底部調整は回転ヘラ切り後ナデである。73は黒色土器で、内黒焼成のものである。1.5cm程度の高めの高台が外方へ開き気味に付き、体部はやや湾曲しながら開く。器面の磨耗が著しくミガキは確認できなかった。器形は上層出土の土師器34～36に類似する。74は甕で、「く」字状を呈する口縁部の屈曲が甘い。75は移動式竈で、焚口側面に付く庇と体部が一部残存している。76～84は須恵器である。76は蓋と考えている。口縁部は下方へ僅かに屈曲し、外面に鋭利な括れが沈線様に入る。つまみの有無は欠損のため不明である。77～79は無高台の坏である。77は口縁端部の屈曲がほとんど認められない。79は焼成がやや不良である。80は高台付皿である。81は壺で、外方に開く頸部を持つが、故意に打ち欠かれ、口縁部を失っている。肩部、胴部の境界で下方に屈曲する。82・83は甕で、「く」字状に外反ないし屈曲する口縁部を持つ。82は肩部が開き気味で横瓶の可能性もある。84は壺の体部片で内面、および破面に赤色顔料が付着していることから、転用硯の可能性もある。85は陶器の鉢で備前産のものである。須恵質で色調は灰色を呈する。口縁部上端は浅い窪みを持ち、内外へ僅かに突出する。体部内面に櫛目は認められない。Ｓ１は砥石である。粗粒石材を用いた大型品で、比較的平滑な砥面が認められるが、使用痕は肉眼では確認できない。粗砥としての使用が窺われる。また、敲打痕を一部残し、砥石として使用されたのち敲石に転用された可能性がある。

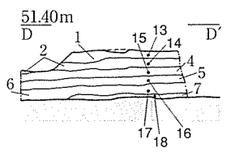
第22図には鉄関連遺物を掲載した。Ｆ４・Ｆ６は椀形鍛冶滓、Ｆ５は椀形鍛冶滓様の滓資料である。Ｆ７は羽口片である。Ｆ８～F11は製品で、いずれも鍛造品である。Ｆ８は釘の未成品と推測されるもの、Ｆ９は刀子、F10は袋状鉄斧、F11は勾付棒状不明品である。

断片的な資料が多く、時期を推定できるものは限られるが、年代を含めた遺物相についてまとめておく。須恵器や赤色顔料が塗布された土師器坏などから、８世紀後半～９世紀にかけての資料が時期的に古い部類に該当しよう。一方、上・中層からは27～33、48～57のような底部回転糸切りの土師器坏もしくは小皿の出土が目立った。底部資料のため多くは器種を特定できないが、中世前期に下る可能性を持つ遺物群である。下層からはこれらの出土はないが、備前の擂鉢（85）が出土している。このタイプは13世紀前葉～14世紀初頭と考えられており(註1)、時期的に出土遺物の下限を示す資料と思われる。このように本遺構出土遺物の時期幅は非常に広い。また、第20図42の須恵器坏は上層と下層出土資料の接合例で、遺物相からは上層と下層の堆積時期の差異を見出すことはできない。これらのことから、本遺構の掘削時期については言及できないが、少なくとも13世紀前葉～14世紀初頭以降に埋没したものと考えられる。

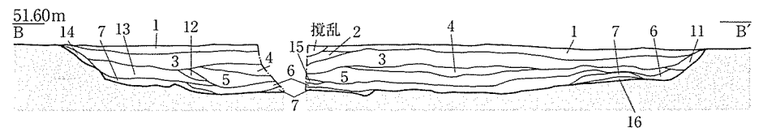


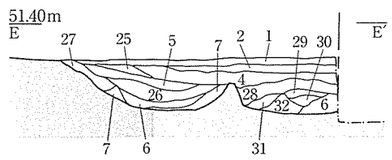


● 土壌分析試料採取位置



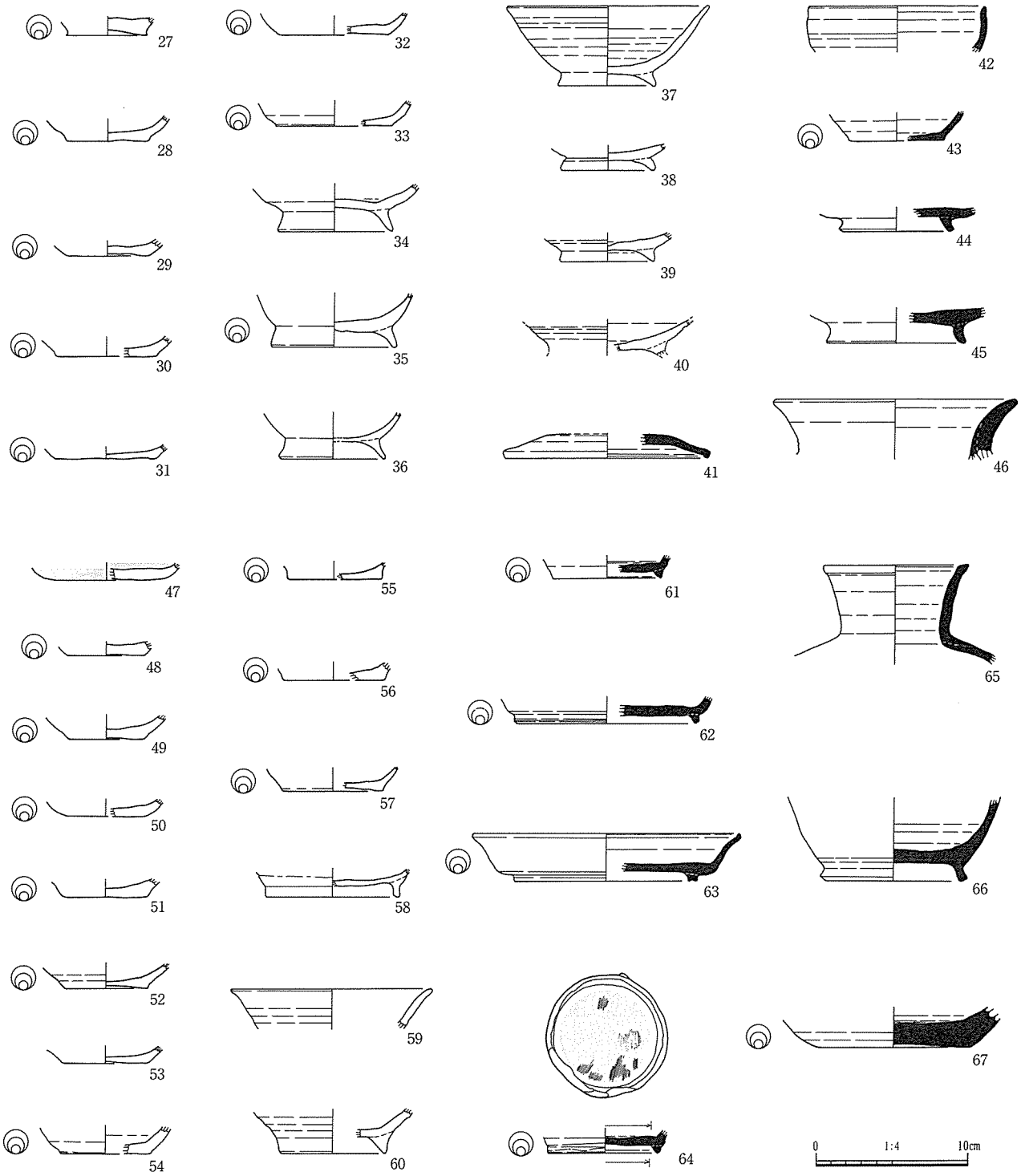
● 土壌分析試料採取位置





1　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）
2　灰黄褐色シルト（10YR4/2）ロームブロック混
3　暗褐色シルト（10YR3/3）土器細片多量混
4　黒褐色シルト（10YR3/2）ロームブロック混
5　褐色シルト（10YR4/6）ローム粒微量混
6　褐灰色シルト（10YR4/1）ローム粒少量混
7　にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）ロームブロック多量混
8　明黄褐色シルト（10YR6/6）
9　暗灰黄色シルト（10YR4/2）
10　褐色シルト（10YR4/4）
11　暗褐色シルト（10YR3/3）３よりしまり弱
12　暗赤褐色シルト（2.5YR3/2）
13　黒褐色シルト（2.5Y3/1）ロームブロック微量混
14　暗褐色シルト（10YR3/3）11と類似　しまり弱
15　暗褐色シルト（7.5YR3/3）ロームブロック微量混
16　にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）ロームブロック主体
17　暗茶褐色シルト（10YR2/2）ローム粒混
18　黒褐色シルト（10YR1.7/1）ローム粒混
19　黄褐色粘土（5Y4/2）ロームブロック主体
20　明茶褐色シルト（10YR3/3）　ローム粒多量混
21　暗褐色シルト（10YR3/2）
22　暗灰褐色粘土（10YR4/1）ロームブロック混　粘性強
23　暗灰褐色粘土（10YR4/1）22と類似
24　黄褐色粘土（5Y4/2）19より粘性強
25　暗茶褐色シルト（10YR3/2）４に類似　しまりやや弱
26　暗茶褐色シルト（10YR2/2）ロームブロック微量混
27　暗黄褐色シルト（10YR2/2）ロームブロック多量混
28　暗茶褐色シルト（10YR2/2）ロームブロック多量混
29　暗黄褐色シルト（10YR4/4）ロームブロック多量混
30　黒褐色シルト（10YR2/1）ロームブロック混
31　暗黄褐色シルト（10YR4/3）ロームブロック多量混
32　黄褐色シルト（10YR4/4）ロームブロック主体　粘性強

第19図　溝状遺構

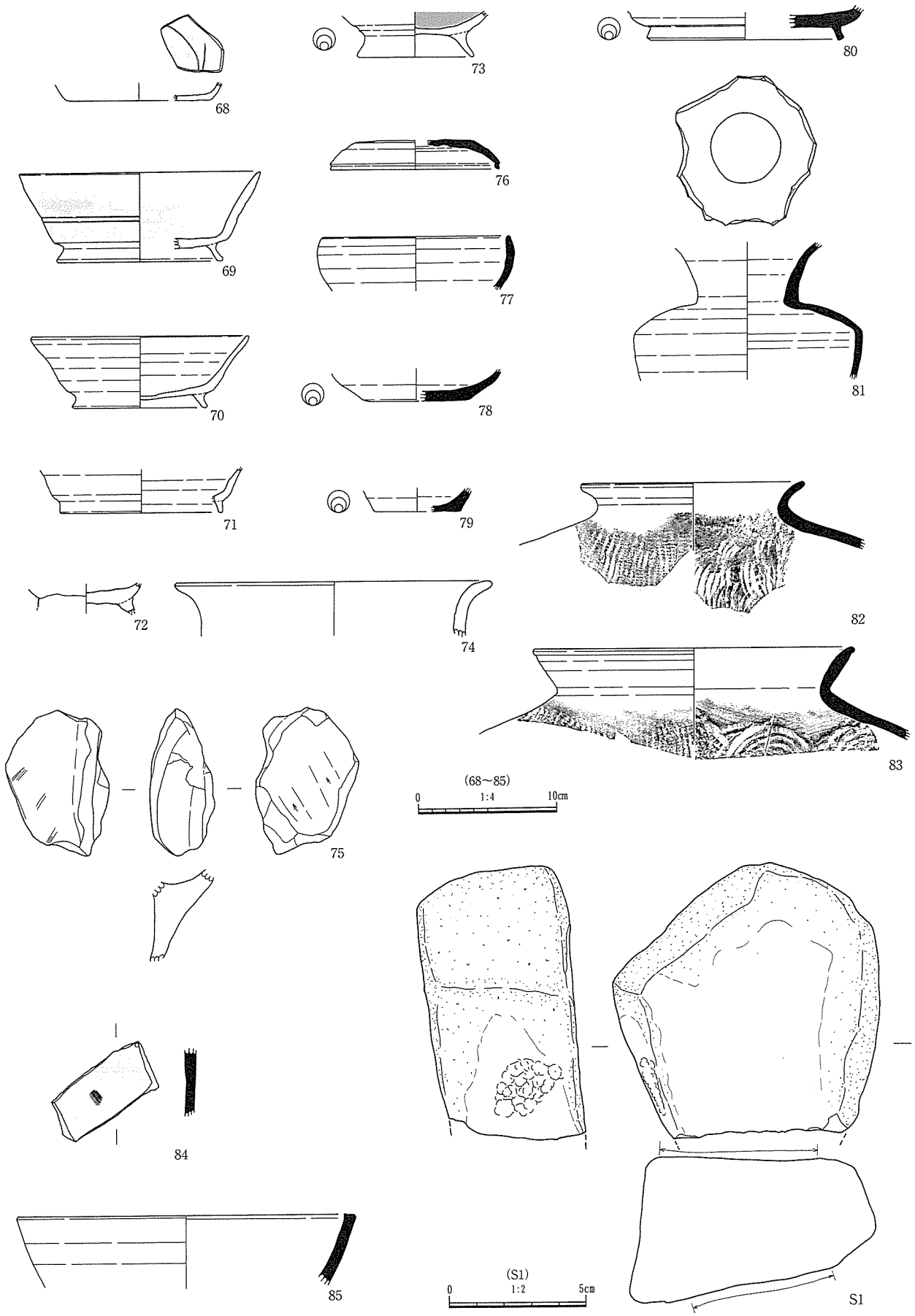


第20図　溝状遺構出土遺物（１）

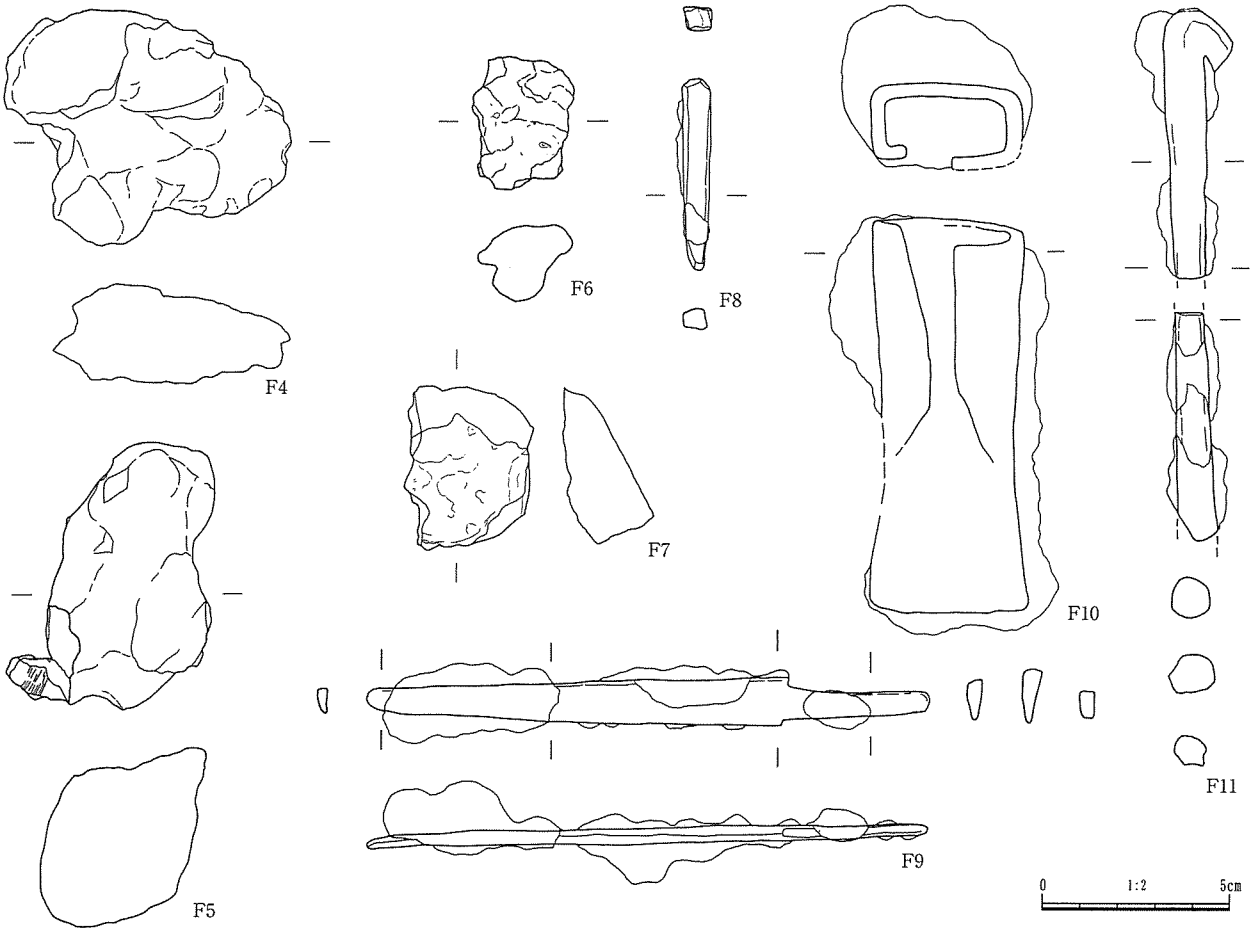
（註１）岡山県古代吉備文化財センター重根弘和氏のご教示による。本資料は重根氏の分類によるとⅡAに該当する。

重根弘和 2005a「中世の備前焼」『備前歴史フォーラム資料集　備前焼研究最前線Ⅱ』備前市歴史民俗資料館　備前市教育委員会

重根弘和 2005b「中世備前焼に関する考察」『古文化談叢』第54集　九州古文化研究会



第21図　溝状遺構出土遺物（２）



第22図　溝状遺構出土鉄関連遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
27	20	溝状遺構 2層	土師器 坏？	― ＊5.0	△1.2	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：回転ナデ　磨耗著しい	やや粗 やや軟	灰白色	
28	20	溝状遺構 2層	土師器 坏？	― 5.4	△1.7	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	密 やや軟	明橙色	
29	20	溝状遺構 1～2層	土師器 坏？	― 5.6	△1.1	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	密 やや軟	淡橙色	
30	20	溝状遺構 2層	土師器 坏？	― ＊6.4	△1.4	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	細砂粒少量 良	にぶい黄橙色	
31	20	溝状遺構 2層	土師器 坏？	― 6.6	△0.9	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：回転ナデ	砂粒少量 良	橙色	
32	20	溝状遺構 2層	土師器 坏？	― ＊7.0	△1.4	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	にぶい黄橙色	
33	20	溝状遺構 1～2層	土師器 坏？	― ＊7.6	△1.65	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 やや軟	にぶい黄橙色	
34	20	溝状遺構 2層	土師器 高台付坏	― ＊7.5	△3.0	外面：磨耗のため不明 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	にぶい黄橙色	
35	20	溝状遺構 2層	土師器 高台付坏	― ＊8.0	△3.5	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：回転ナデ	細砂粒多量 やや軟	浅黄橙色	
36	20	溝状遺構 2層	土師器 高台付坏	― ＊6.8	△3.1	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ？ 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	淡橙色	高台内赤色塗彩？
37	20	溝状遺構 2層	土師器 高台付坏	＊13.3 ＊6.3	5.3	外面：体部・高台回転ナデ　底部磨耗のため不明 内面：回転ナデ	砂粒少量 良	橙色	
38	20	溝状遺構 2層	土師器 高台付坏	― ＊6.0	△1.7	外面：体部・高台回転ナデ　底部磨耗のため不明 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	淡橙色	
39	20	溝状遺構 2層	土師器 高台付坏	― ＊6.0	△1.9	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転ヘラ切りか 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	橙色	
40	20	溝状遺構 2層	土師器 高台付坏	―	△2.4	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	細砂粒多量 良	橙色	
41	20	溝状遺構 上層	須恵器 坏蓋	＊13.3 ―	△1.6	外面：口縁部回転ナデ　天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	細砂粒少量 良	灰色　にぶい赤褐色	
42	20	溝状遺構 上層	須恵器 坏身	＊11.6 ―	△3.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	細砂粒少量 良	灰色	上層・最下層接合
43	20	溝状遺構 1～2層	須恵器 坏身	― ＊6.4	△1.85	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	砂粒少量 やや軟	灰白色	
44	20	溝状遺構 上層	須恵器 高台付坏	― ＊7.1	△1.6	外面：体部・高台回転ナデ　底部調整不明 内面：回転ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
45	20	溝状遺構 上層	須恵器 高台付皿	― ＊9.0	△2.3	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転ヘラ切り後回転ナデ 内面：回転ナデ後不整方向ナデ、平滑	砂粒多量 良	灰色	
46	20	溝状遺構 1～2層	須恵器 壺	＊15.8 ―	△3.95	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
47	20	溝状遺構 6層	土師器 坏	― ＊8.0	△1.1	外面：磨耗のため不明　赤色塗彩 内面：磨耗のため不明　赤色塗彩	細砂粒多量 良	橙色 赤褐色（塗彩部分）	

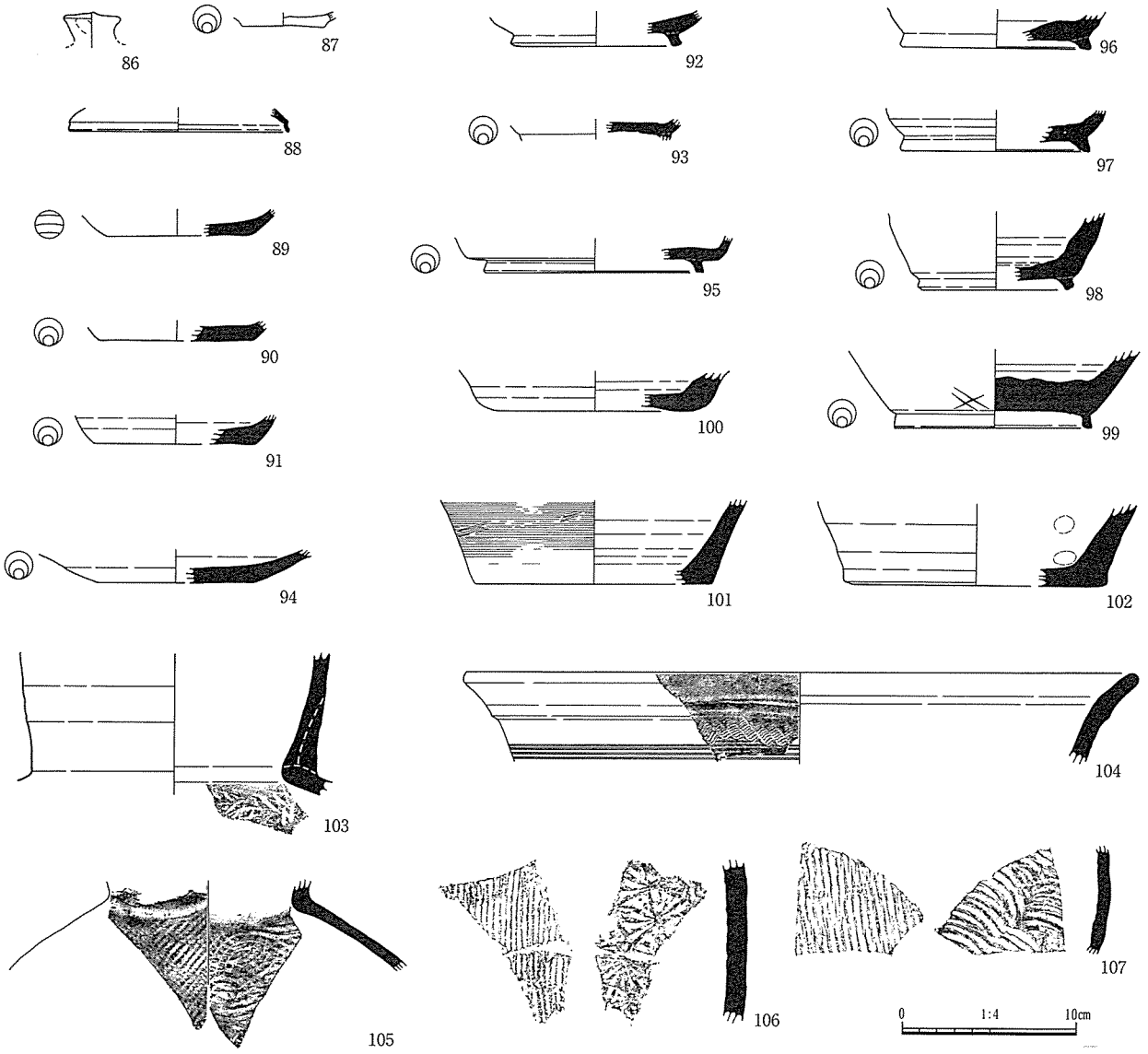
＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	地区 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
48	20	溝状遺構 4層	土師器 坏？	－ ＊5.1	△0.9	外面：底部回転糸切り 内面：回転ナデ　磨耗著しい	細砂粒少量 良	にぶい橙色	
49	20	溝状遺構 6層	土師器 坏？	－ ＊5.0	△1.6	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	細砂粒微量 良	にぶい橙色	内面底部に黒斑
50	20	溝状遺構 6層	土師器 坏？	－ ＊5.1	△1.15	外面：体部磨耗のため不明　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	細砂粒微量 良	にぶい橙色	外面に黒斑
51	20	溝状遺構 4層	土師器 坏？	－ ＊5.3	△1.2	外面：体部磨耗のため不明　底部回転糸切り 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	淡橙色	
52	20	溝状遺構 6層	土師器 坏？	－ 5.5	△1.6	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：磨耗のため不明	細砂粒少量 良	にぶい橙色 浅黄橙色	
53	20	溝状遺構 4～6層	土師器 坏？	－ ＊5.5	△1.1	外面：磨耗のため不明　底部回転糸切り？ 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	淡橙色	
54	20	溝状遺構 4層	土師器 坏？	－ ＊5.8	△1.85	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	細砂粒多量 良	にぶい橙色	
55	20	溝状遺構 6層	土師器 坏？	－ ＊6.2	△1.1	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	浅黄橙色	
56	20	溝状遺構 6層	土師器 坏？	－ ＊6.6	△1.1	外面：体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	細砂粒少量 良	にぶい褐色	
57	20	溝状遺構 中層	土師器 坏？	－ ＊6.0	△1.5	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	橙色	
58	20	溝状遺構 7層上面	土師器 高台付坏	－ ＊8.7	△1.8	外面：磨耗のため不明 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 やや軟	橙色	
59	20	溝状遺構 6層	土師器 高台付坏	＊13.1 －	△2.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	細砂粒少量 良	浅黄橙色	
60	20	溝状遺構 6層	土師器 高台付坏	－ ＊6.8	△3.0	外面：体部・高台回転ナデ　底部調整不明 内面：回転ナデ	細砂粒多量 良	にぶい橙色	
61	20	溝状遺構 4層	須恵器 高台付坏	－ ＊7.2	△1.45	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	砂粒少量 良	灰色	
62	20	溝状遺構 6層	須恵器 高台付皿	－ ＊11.7	△1.6	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
63	20	溝状遺構 6・7層	須恵器 高台付皿	＊17.6 ＊10.9	3.15	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ　底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
64	20	溝状遺構 6層	須恵器 高台付杯 転用硯	－ 7.2	1.5	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 底部　硯として使用？により磨耗、平滑化 内面：底部回転ナデ　硯として使用により磨耗、平滑化 底部・破面に赤色顔料付着	細砂粒微量 良	淡灰色 赤褐色（赤色顔料）	
65	20	溝状遺構 4～6層	須恵器 壺	＊9.2 －	△6.6	外面：口縁部～肩部回転ナデ　自然釉付着 内面：口縁部～肩部回転ナデ　口頸部自然釉付着	砂粒多量 良	灰色 灰オリーブ色（自然釉）	
66	20	溝状遺構 5層	須恵器 高台付壺	－ ＊8.8	△5.5	外面：胴部・高台回転ナデ　底部回転ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	灰色	
67	20	溝状遺構 6層	須恵器 壺	－ ＊10.5	△2.7	外面：胴部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	外面：灰色 内面：灰黄褐色	
68	21	溝状遺構 7層	土師器 坏	－ ＊10.3	△1.3	外面：磨耗のため不明　赤色塗彩 内面：磨耗のため不明　赤色塗彩	細砂粒多量 良	橙色 暗赤橙色（赤色塗彩）	
69	21	溝状遺構 7層	土師器 高台付坏	＊17.2 ＊11.8	6.5	外面：磨耗のため不明　赤色塗彩 内面：磨耗のため不明　赤色塗彩	細砂粒少量 良	橙色 赤褐色（赤色塗彩）	
70	21	溝状遺構 7層	土師器 高台付坏	＊15.7 ＊9.3	5.25	外面：体部回転ナデ　底部ヘラ切り後押圧か　磨耗著しい 内面：体部回転ナデ　底部回転ナデ、押圧か	砂粒多量 良	浅黄橙色、橙色	
71	21	溝状遺構 7層	土師器 高台付坏	－ ＊11.6	△3.2	外面：体部・高台回転ナデ 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	橙色	底部欠損
72	21	溝状遺構 7層	土師器 高台付坏	－	△2.3	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	にぶい橙色	
73	21	溝状遺構 7層	黒色土器 高台付坏	－ ＊8.2	△3.3	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り後ナデか 内面：回転ナデ後黒色処理　磨耗著しいためミガキは不明	砂粒多量 良	外面：にぶい黄橙色 内面：暗灰色	
74	21	溝状遺構 7層	土師器 甕	＊22.6 －	△3.9	磨耗のため不明	砂粒多量 良	外面：浅黄橙色 内面：橙色	
75	21	溝状遺構 7層	土製品 移動式竈	－	△10.5	外面：粗いナデ・ハケメ　磨耗著しい 内面：粗いナデ・ヘラケズリ　磨耗著しい	砂粒多量 良	外面：橙色 内面：にぶい橙色	
76	21	溝状遺構 9層	須恵器 壺？	＊12.0 －	△2.1	外面：天井部回転ヘラケズリ　口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	細砂粒多量 良	淡灰色	
77	21	溝状遺構 7層	須恵器 坏身	＊13.3 －	△3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	外面：濃灰色 内面：オリーブ灰色	底部欠損
78	21	溝状遺構 7層	須恵器 坏身	－ ＊7.8	△2.2	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	細砂粒多量 良	灰色	
79	21	溝状遺構 7層	須恵器 坏身	－ ＊6.3	△1.65	外面：体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	細砂粒多量 やや軟	灰黄褐色	
80	21	溝状遺構 7層	須恵器 高台付皿	－ ＊13.6	△2.4	外面：体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒多量 良	灰色	
81	21	溝状遺構 7層	須恵器 壺	－	△9.8	外面：頸部～胴部回転ナデ 外面：頸部～胴部回転ナデ	砂粒多量 良	灰色	口縁部打ち欠き
82	21	溝状遺構 7層	須恵器 甕？	＊16.8 －	△5.05	外面：口縁部回転ナデ　肩部平行叩き 内面：口縁部回転ナデ　肩部同心円状当て具痕	細砂粒多量 良	外面：黄灰色 内面：赤褐色　褐灰色	
83	21	溝状遺構 7層	須恵器 甕	＊23.0 －	△6.8	外面：口縁部・肩部回転ナデ　胴部平行叩き 内面：口縁部・肩部回転ナデ　胴部同心円状当て具痕	砂粒多量 良	淡灰色	
84	21	溝状遺構 7層	須恵器 壺	－	△7.3	外面：回転ナデ後不整方向ナデ 内面：回転ナデ　硯として使用?により磨耗　平滑化 赤色顔料付着	細砂粒多量 良	淡灰色	壺体部片　転用硯として使用？
85	21	溝状遺構 7層	陶器 捏鉢	＊22.9 －	△5.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	砂粒多量 良	灰褐色	備前鉢ⅡA型式

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S1	21	溝状遺構 7層	砥石	14.6	14.5	8.0	2680	砥石としての使用後、敲石に転用か

５．当該期の出土遺物（第23図　図版17）

本調査において遺構に伴わないものや当該期に属さない遺構から出土した遺物のうち、古代のものを中心に実測可能なものを選別した。86・87は土師器である。86は蓋で、宝珠状のつまみが残存する。87は土師器の坏もしくは小皿で、底部切り離しは回転糸切りである。Ⅱ層や溝状遺構より同様なものが出土している。88～107は須恵器である。88は蓋と思われる。口縁端部が下方へ僅かに屈曲し、沈線状の窪みが入る。溝状遺構でも同様な例がみられる（第21図76）。89～91は無高台の坏で、89の底部切り離しは静止糸切りである。92・93は高台付坏で、92は外方へ張る高台が付く。93は底部周縁に高台が付くタイプで、焼成がやや悪い。94は底部資料だが皿と思われる。95は高台付皿である。96～102は壺である。96～98は高台が付くもので長頸壺の底部と思われる。99はやや大型で高台が付き、胴部外面下位の高台際にヘラ記号が刻まれる。底部の内外面には墨が付着している。100～102は高台の付かないものである。101は胴部下半から底部残存資料で回転ヘラケズリ後、カキメが施される。102は内面に指頭圧痕が残る。103～106は甕である。103は頸部から肩部にかけての残存資料で、頸部が直立気味に高く立ち上がるタイプである。肩部内面に同心円状の当て



第23図　当該期の出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	地区／遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
86	23	C4 Ⅱ層	土師器 蓋	つまみ径 3.2	△1.8	側部に指頭圧痕　磨耗著しい	細砂粒多量 良	にぶい橙色	
87	23	SD10 埋土中	土師器 坏？	－ ＊4.7	△0.8	外面:体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面:磨耗のため不明	細砂粒少量 やや軟	外面:にぶい橙色 内面:灰白色	
88	23	SD10 埋土中	須恵器 蓋	＊12.6 －	△1.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	細砂粒少量 良	淡灰色	
89	23	B3 Ⅱ層	須恵器 坏身	－ ＊8.1	△1.55	外面:体部回転ナデ　底部静止糸切り 内面:体部回転ナデ　底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
90	23	C4 Ⅱ層	須恵器 坏身	－ ＊8.7	△1.1	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒少量 良	外面:灰オリーブ色 内面:灰色	
91	23	SD10 埋土中	須恵器 坏身	－ ＊9.2	△1.6	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:体部回転ナデ　底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒少量 良	外面:暗青灰色 内面:灰色	
92	23	道路状遺構 造成土中	須恵器 高台付坏	－ ＊8.9	△2.0	外面:体部・高台回転ナデ 内面:回転ナデ　磨耗著しい	細砂粒少量 良	灰色	底部欠損
93	23	B4 Ⅰ層	須恵器 高台付坏	－	△1.2	外面:体部調整不明　底部回転糸切り　磨耗著しい 内面:底部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒多量 やや軟	白灰色	
94	23	C3 層位不明	須恵器 皿	－ ＊9.0	△1.9	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:体部回転ナデ　底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
95	23	SD11 埋土中	須恵器 高台付皿	－ ＊12.5	△2.15	外面:体部・高台回転ナデ　底部回転糸切りか 内面:回転ナデ	細砂粒微量 良	淡灰色	底部欠損
96	23	C4 Ⅱ層	須恵器 高台付壺	－ ＊10.8	△2.2	外面:胴部・高台回転ナデ　底部回転糸切り？後回転ナデ 内面:回転ナデ	砂粒少量 良	灰色	
97	23	B4 Ⅱ層	須恵器 高台付壺	－ ＊10.8	△2.3	外面:胴部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ　自然釉付着	細砂粒多量 良	外面:灰色 内面:灰黄褐色 (自然釉)	
98	23	道路状遺構 造成土中	須恵器 高台付壺	－ ＊8.2	△4.4	外面:胴部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	砂粒多量 良	外面:灰色 内面:褐灰色、灰色	
99	23	SD10 埋土中	須恵器 高台付壺	－ 11.2	△4.4	外面:胴部下位回転ヘラケズリ後回転ナデ　ヘラ記号 底部回転糸切り　墨書痕跡？有り 内面:回転ナデ　底部に黒色物(墨か)付着	砂粒多量 良	灰色	
100	23	SD7 埋土中	須恵器 壺	－ ＊10.4	△2.3	外面:胴部回転ヘラケズリ後回転ナデか　底部調整不明 内面:回転ナデ	砂粒多量 良	褐灰色	
101	23	SD10 埋土中	須恵器 壺	－ ＊13.6	△4.85	外面:胴部カキメ・回転ヘラケズリ後ナデ　底部調整不明 内面:胴部・底部付近回転ナデ　胴部上位に当て具痕？	砂粒多量 良	灰色	
102	23	道路状遺構 造成土中	須恵器 壺	－ ＊15.1	△4.8	外面:胴部回転ヘラケズリ後ナデ　底部粗いナデ調整 内面:回転ナデ　指頭圧痕	砂粒多量 良	灰色	
103	23	B2 Ⅰ層	須恵器 甕	－	△8.1	外面:頸部・肩部回転ナデ　肩部自然釉付着 内面:頸部粗い回転ナデ　自然釉付着 肩部同心円状当て具痕	砂粒少量 良	灰色	
104	23	B4 Ⅱ層	須恵器 甕	＊38.2 －	△5.1	外面:回転ナデ　押引波状文 内面:回転ナデ	砂粒少量 良	灰色	
105	23	SD10 埋土中	須恵器 甕	－	△5.3	外面:頸部回転ナデ　肩部平行タタキ 内面:頸部回転ナデ・自然釉付着　肩部同心円状当て具痕	細砂粒多量 良	外面:灰色 内面:灰色 灰オリーブ色	
106	23	SD10 埋土中	須恵器 甕	－	△9.1	外面:平行タタキ 内面:車輪状当て具痕	砂粒多量 良	淡灰色	甕胴部
107	23	SD10 埋土中	須恵器 甕	－	△6.0	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	砂粒多量 良	外面:灰褐色 内面:灰色	甕胴部

具痕が認められる。104は大型の甕の口縁部で、外面には突帯状の低い盛り上がりが巡り、その下に間隔の密な波状文が施される。105は「く」字形に開く口縁部を持つタイプと思われる。106・107は胴部の破片資料である。106は外面平行タタキ、内面には車輪状当て具痕、107は外面平行タタキ、内面は同心円状当て具痕が残る。このような甕の破片は道路状遺構や溝等、近世以降の遺構中からも多く出土している。

第３節　近世以降の調査

１．概要（第24図）

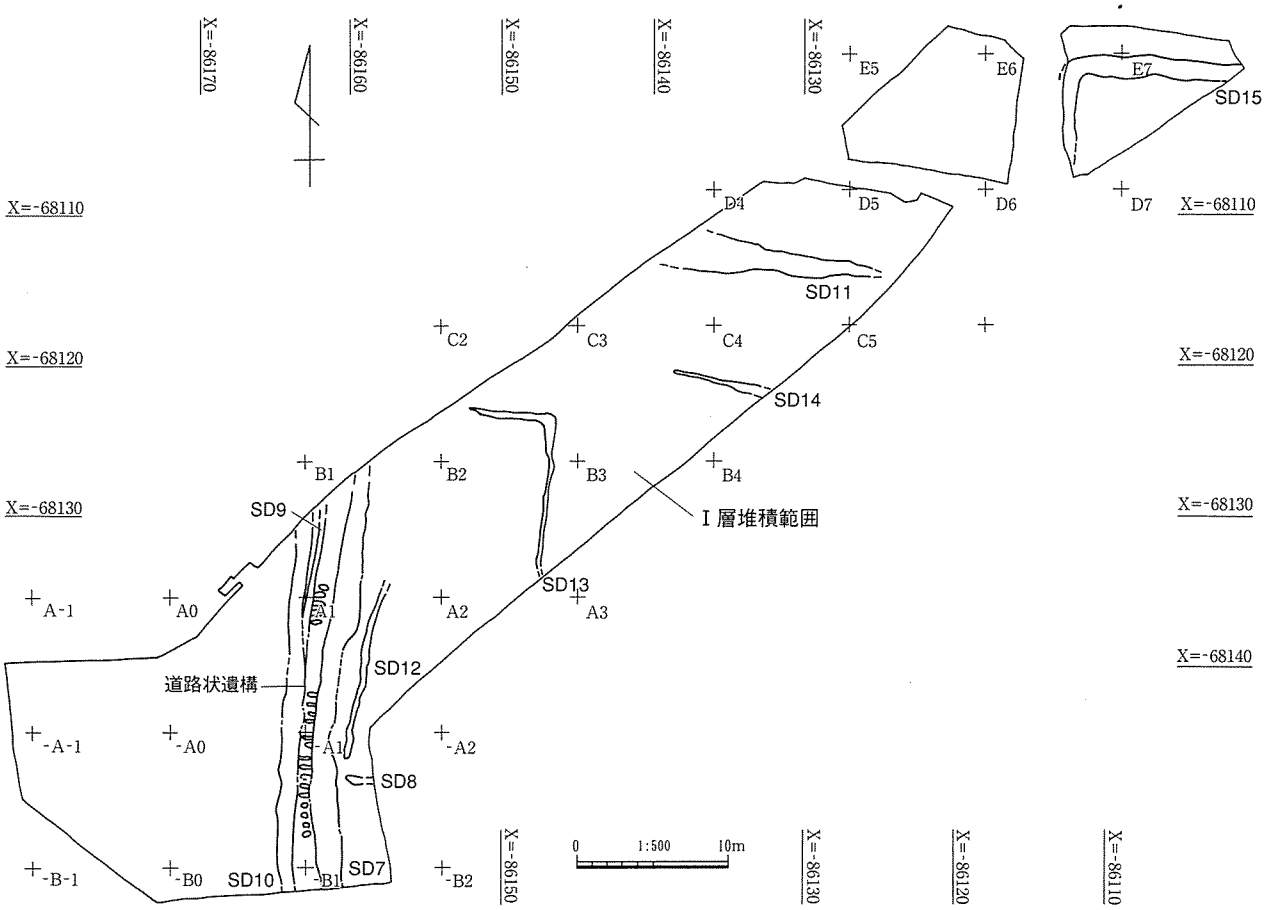
当該期、もしくはその可能性が高い遺構はＡ・Ｂ区で確認され、Ａ区では表土下に堆積するＩ層（本章第１節参照）上面で主に検出している。確認した遺構は、道路状遺構１と溝９基（ＳＤ７～15）である。溝の配置をみると各溝の走向が概ね平行ないし直交している。削平のため寸断されているが、ＳＤ８・12・13により長方形の区画が想定できる。また、ＳＤ12・13間の距離とＳＤ11・14間の距離が約９～10ｍを測り大差ないことから、ＳＤ11・14についても同様な可能性が指摘できよう。このような配置から、溝は水田や畑地に伴う区画溝の可能性がある。ＳＤ７・９・10もＳＤ12と走向がほぼ揃う。ＳＤ７・10は切り合い関係から道路状遺構・ＳＤ９より後出するものである。なお、ＳＤ７は昭和54～56年度調査時検出の「東溝」と位置的に合致し、同一遺構であることが確認された。

２．道路状遺構（第25・26図　図版18・19・20－１）

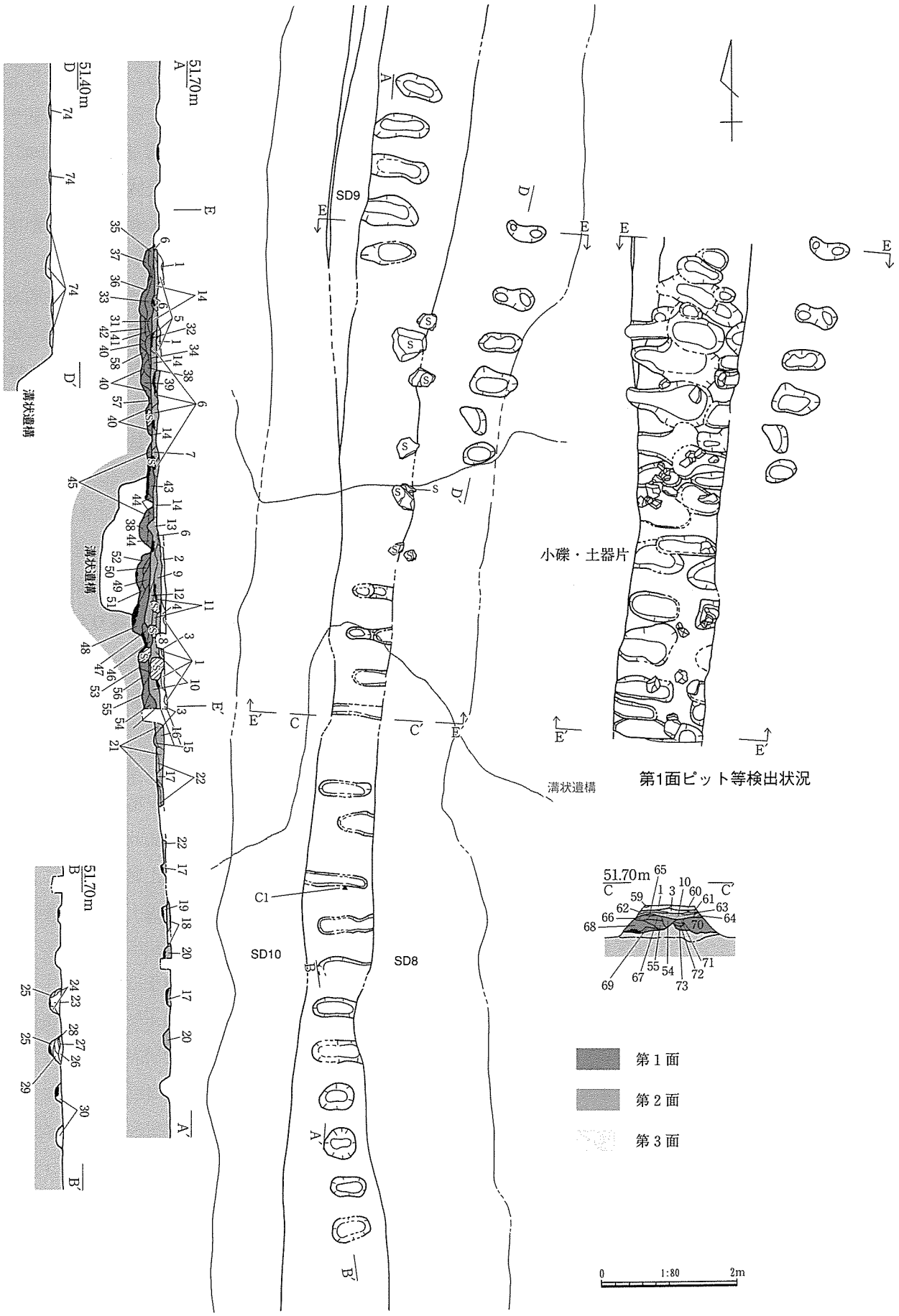
Ａ区南西側、Ｂ１・Ｂ２・Ａ１・Ａ２・－Ａ１・－Ａ２・－Ｂ１・－Ｂ２グリッドにわたって検出された。Ｉ層上面において検出し、溝状遺構（本章第２節）の埋没後に設けられる。概ね南北方向に延びるが、北側と南側でやや東寄りに曲がる傾向にある。ほぼ同方向に走向するＳＤ７・９・10に切られる。検出面では平面形が楕円形状を呈する浅いピットが連続（いわゆる波板状凹凸面）して確認された。南側ではピットの平面形が円形に近くなり、やや深くなる。波板状凹凸面の存在など、昨今の道路遺構調査事例との比較により類似点が認められるため、道路状遺構として報告する。

波板状凹凸面及びピット列は調査区北側・南端部では削平のためか確認されず、どのように延長するのかは不明である。ＳＤ７の底面に凹凸面の痕跡が認められ（Ｄ－Ｄ′）、本来の道幅は更に広い。本遺構を挟んで検出されたＳＤ９・ＳＤ12はほぼ平行に延び（第24図）、規模も類似する。両溝間の距離は心々で約3.5ｍを測り、両溝は道路の側溝であった可能性も考えられる。遺構を縦断するセクション（Ａ－Ａ′）、横断するセクション（Ｃ－Ｃ′）を設け、堆積を確認した。縦断面では中央から北寄りにかけて深くなっている。断面観察から堆積のまとまりを大きく３つに分け、各々を第１・２・３面と呼称し、以下に述べる。

第１面（31～58、65～73層）：堆積の最下面に該当する。ローム層及び溝状遺構の埋土上に浅い楕円形状のピットが多数掘り込まれ、凹凸面を形成している。ピットの密度が高く、平面的に各々の切り合いを把握できず、Ｅ－Ｅ′間における平面図で示した切り合いの多くは断面観察による推



第24図　近世以降遺構分布図


51.70m
A
A′
51.40m
D
D′
溝状遺構
51.70m
B
B′
SD9
SD10
SD8
C1
溝状遺構
小礫・土器片
第1面ピット等検出状況
51.70m
C
C′
第１面
第２面
第３面
0
1:80
2m

第25図　道路状遺構

定である。浅い窪みの底面には数cm程度の小礫と土器片（主に須恵器片）が原則として敷かれており、その点は上位の第２面においても同様である。ピットが密に重複するあり方から、路面を幾度も修復した痕跡と考えている。下位には溝状遺構が埋没しており、周辺は地盤の強度が他の部分よりも脆弱だったからかもしれない。ピット底面に小礫・土器片等を敷くのは修復部分の路床強化のためであろうか。埋土の多くはローム細粒が混じる粘性の強い堆積で、明確な硬化面は認められず、当時の路面は失われていると考える。

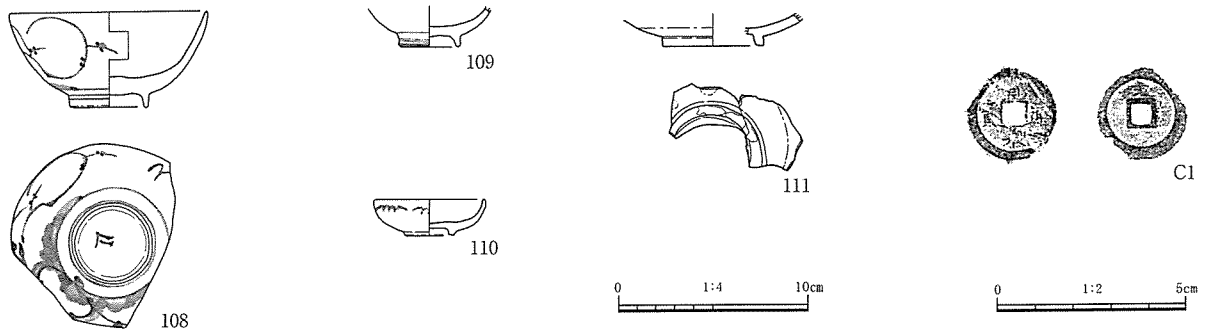
第２面（６～22、62～64層）：第１面の上位に堆積する層群である。Ｅ－Ｅ′間では、不明な部分もあるが概ね40～50cm程度の間隔をおいて浅いピットが連続して認められ、波板状凹凸面を形成している。ただしピットの掘り方を平面的に把握できなかったため、凹面に敷かれた小礫・土器片のまとまりと土層堆積の断面観察により推定した。ピットの埋土（６・17層）はしまりが弱い。ピット群は８・11・10・14・21・22層を掘り込んでいる。これらの堆積はいずれも硬化部分を持たず、しまりも特別強くないため路面は失われていると考えるが、層中には20～50cm程度の比較的大きな礫を含んでおり、基盤強化と推測する。このような堆積状況から当面における路床部分に該当すると考える。

Ｅ－Ｅ′間以外のピットは多くが地山上面での検出のため、どの段階かはっきりしないが、ピット埋土や検出面レベルの近似から、少なくとも第１・２面を通して形成されたものと考えている。

第３面（１～５・59～61層）：主にＥ－Ｅ′間において、第２面の上位に堆積する層群である。多くを削平により失っていると考えられる。不明な部分があるが、３～５層を浅い楕円形状のピットが掘り込んでおり、ピットの埋土は１層でしまりが弱い。Ｅ－Ｅ′間以外では検出レベルから削平されていると考えるのが妥当であろう。

道路状遺構（第25図）　土層堆積一覧

番号	層名	色調	備考	面
1	灰黄褐色シルト	(10YR4/2)	しまり弱	3
2	灰黄褐色シルト	(10YR4/2)		3
3	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/3)		3
4	黒褐色シルト	(2.5Y3/1)		3
5	暗灰黄色シルト	(2.5Y5/2)	ローム粒少量混	3
6	灰黄褐色シルト	(10YR3.5/2)	しまり弱	2
7	灰褐色シルト	(10YR4/2)		2
8	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/3)	ローム粒少量混	2
9	暗褐色シルト	(10YR3/4)	ローム粒少量混	2
10	黒褐色シルト	(2.5Y3/2)		2
11	暗褐色シルト	(10YR3/4)		2
12	灰黄褐色シルト	(10YR4/2)		2
13	褐灰色シルト	(10YR4/1)		2
14	褐色シルト	(7.5Y4/3)		2
15	黒褐色シルト	(2.5Y3/1)	しまり弱　ローム流少量混	2
16	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/2.5)	ローム粒少量混	2
17	黒褐色シルト	(10YR3.5/2)	しまり弱　ローム流少量混	2
18	黒褐色シルト	(10YR2/1.5)		2
19	褐灰色シルト	(10YR4/1.5)	ロームブロック少量混	2
20	褐灰色シルト	(10YR4/1.5)	ロームブロック多量混	2
21	暗褐色シルト	(10YR3.5/3)	ローム粒少量混	2
22	暗黄褐色シルト	(10YR6/6)	暗褐色系ブロック混	2
23	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/4)		
24	褐灰色シルト	(7.5Y4/1)	ロームブロック多量混	
25	明黄褐色シルト	(10YR6/6)	黒褐色系ブロック混	
26	黒褐色シルト	(10YR3/1)	ローム粒少量混	
27	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/3)		
28	黒褐色シルト	(10YR3/1.5)	炭少量混	
29	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/3)	ロームブロック多量混	
30	黒褐色シルト	(10YR3/2)	ローム粒・炭少量混	
31	褐灰色シルト	(10YR3.5/1)	ローム粒少量混	1
32	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/2.5)	ローム粒少量混	1
33	褐灰色シルト	(10YR4/1.5)	ローム粒少量混	1
34	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/2.5)		1
35	灰黄褐色シルト	(10YR4/2.5)	ローム粒多量混	1
36	褐灰色シルト	(7.5Y4/1.5)	ローム粒多量混　粘性強	1
37	褐灰色シルト	(7.5Y3.5/1)		1
38	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/4)		1
39	暗褐色シルト	(10YR3/3)	しまり弱	1
40	暗褐色シルト	(10YR3/3)	39に類似　粘性強	1
41	黄灰色シルト	(2.5Y4.5/1)	ローム粒少量混	1
42	暗褐色シルト	(10YR3/3)	39・40に類似　しまり強	1
43	灰黄褐色シルト	(10YR4/2)	52に類似　ローム粒多量混	1
44	褐灰色シルト	(10YR4/1)	13に類似　粘性やや強	1
45	暗褐色シルト	(10YR3/3)	しまり弱	1
46	暗褐色シルト	(10YR3/4)	しまり弱	1
47	褐灰色シルト	(10YR4/1)	粘性強	1
48	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/4)	粘性強	1
49	暗オリーブ褐色シルト	(2.5Y3/3)	粘性強　ローム粒少量混	1
50	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/3)	ローム粒少量混	1
51	黒褐色シルト	(2.5Y3/1)	ローム粒少量混	1
52	灰黄褐色シルト	(10YR4/2)	ローム粒少量混	1
53	暗オリーブ褐色シルト	(2.5Y3/3)	粘性強　ローム粒少量混　49に類似	1
54	暗灰黄色シルト	(2.5Y4/2)		1
55	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/4)	38・48に類似　ロームブロック多量混	1
56	黒褐色シルト	(10YR3/1)	ローム粒少量混　溝状遺構埋土か	1
57	褐灰色シルト	(5YR4/1)	ローム粒少量混	1
58	褐灰色シルト	(10YR3.5/1)	ローム粒少量混	1
59	黄褐色シルト	(2.5Y5/3)	ローム粒多量混	3
60	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/3)	しまり強	3
61	暗灰黄色シルト	(2.5Y4/2)	しまり強	3
62	灰黄褐色シルト	(10YR4/2)	しまり強	2
63	黄灰色シルト	(2.5Y4/1)	しまり強	2
64	オリーブ褐色シルト	(2.5Y4/6)	しまり強	2
65	暗オリーブ色シルト	(5Y4/3)	しまり強	1
66	暗灰黄色シルト	(2.5Y3.5/2)	しまり強　小礫少量混	1
67	暗褐色シルト	(10YR3/3)	しまり強	1
68	灰褐色シルト	(7.5YR4/2)	小礫、土器細片少量混	1
69	黒褐色シルト	(2.5Y3/2)	しまり弱　ローム粒少量混	1
70	褐灰色シルト	(10YR4/1.5)	54に類似　小礫、土器細片少量混	1
71	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/3)	ロームブロック多量混	1
72	黄褐色シルト	(2.5Y5/3)	ロームブロック多量混	1
73	暗黄褐色シルト	(2.5Y6/6)	ロームブロック多量混	1



第26図　道路状遺構出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土焼成	色調	備考
108	26	道路状遺構造成土中	磁器碗	＊10.2 3.9	5.1	外面:体部呉須による草花文・圏線　高台2重圏線 畳付無釉　高台内に？を書く	密良	灰白色	肥前系
109	26	道路状遺構造成土中	磁器小杯	― 3.0	△2.15	外面:体部下位・高台呉須による圏線 畳付無釉	密良	灰白色	肥前系
110	26	道路状遺構造成土中	磁器紅猪口	＊5.6 ＊2.6	△1.9	外面:口縁付近呉須による文様 内外面全てに施釉　体部下半～底部施釉は雑	密良	灰白色	肥前系
111	26	道路状遺構造成土中	陶器皿	― ＊4.8	△1.75	外面:体部上半 緑白色釉施釉　体部下半無釉 畳付砂目痕付着　内面:緑白色釉施釉	細砂粒微量良	施釉部:緑白色 露胎部:にぶい黄橙色	
C1	26	道路状遺構造成土中	銅銭寛永通宝	径(cm) 2.4	―	裏面に「文」	―	淡青緑色	新寛永一文銭

本遺構出土遺物を第26図に示した。破片資料が多く出土量も多くないため、各面の時期差については言及できない。108～110は肥前系の磁器である。108は碗である。体部はやや内湾しながら外傾し、外面に草花文を描く。109は小杯である。施釉が粗雑で高台下位に釉が及んでいない。110は紅猪口である。小型で施釉は粗雑である。体部外面に文様を描く。19世紀前半頃のものか。111は陶器の皿で、体部外面上半と内面に緑白色を呈する釉を施す。畳付に砂目痕が残る。Ｃ１は銅銭で、寛永通宝である。裏面に「文」字の入る一文銭で、いわゆる新寛永である。

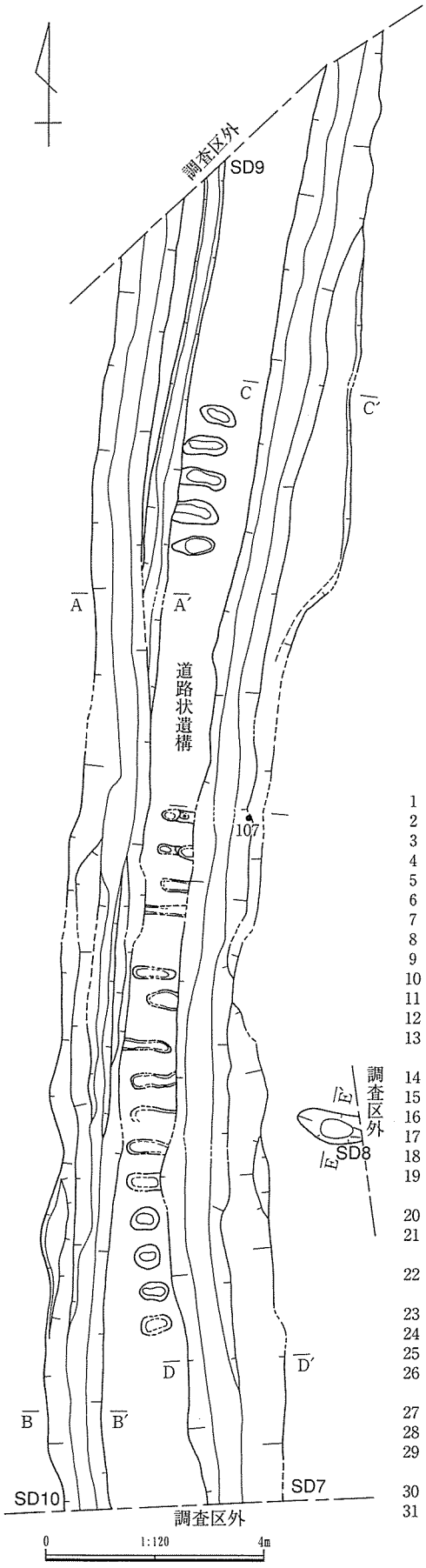
３．溝

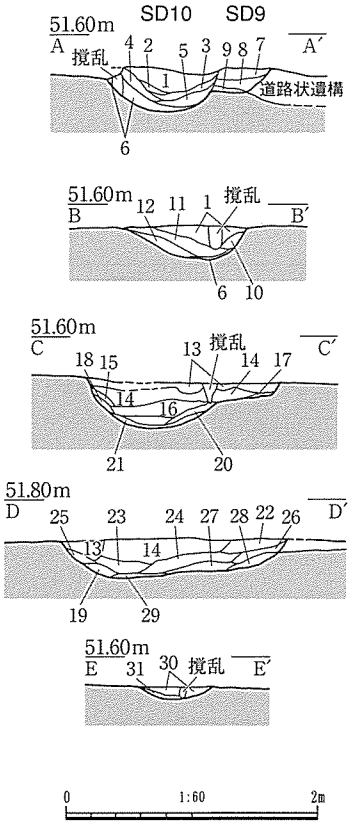
ＳＤ７・８・９・10（第27・28図　図版20－２～４、21－５）

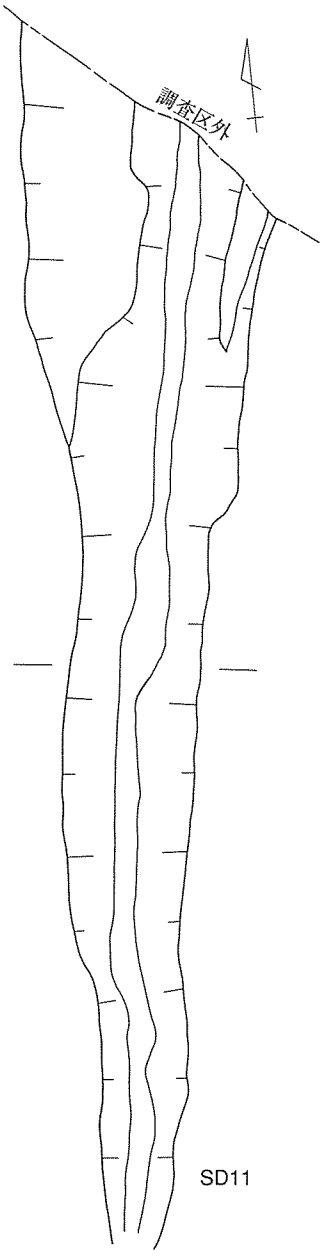
Ａ区南西側のＢ１・Ｂ２・Ａ１・Ａ２・－Ａ１・－Ａ２・－Ｂ１・－Ｂ２グリッドにかけて検出された。いずれもＩ層上面での検出である。ＳＤ10はＳＤ９を切って掘り込まれる。溝７・９・10は概ね南北方向に走向し、北方向へ流下する。ＳＤ８は東西方向を指向する。

ＳＤ７は幅が0.67ｍ～1.25ｍ、検出面からの深さが最大で54cmを測り、東側はテラス状に段を持って掘り込まれる箇所がある。ＳＤ９は幅約0.25～0.4ｍ、検出面からの深さ約30cmで、北側は調査地外に延びる。ＳＤ10は幅0.55～0.95ｍ、検出面からの深さ約50cmを測り、規模はＳＤ７に近似する。ＳＤ８は幅0.4ｍ弱で西側は収束し、東側は調査区外に延びる。ＳＤ７・９・10埋土は基本的に粘性が強いが、若干の砂粒を含んでいる。

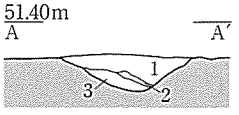
ＳＤ７・10出土遺物を第28図に示した。ＳＤ８・９からは土器細片を少量検出しているが、図化可能なものは無かった。112・113はＳＤ７出土である。112は陶器の鉢で、口縁端部を断面三角形状に内側へ肥厚させ、体部外面は蓮弁状にする。黒褐色釉を外面と口縁部内面に施す。113は肥前系磁器の鉢と思われる。口縁端部を内側へ小さく肥厚させ、断面は三角形状を呈する。外面には呉須による圏線、文様が描かれる。114・115はＳＤ10出土である。114は陶器の皿と思われる。口縁部を欠損しており、外面は無釉である。内面には暗褐色・黄褐色を呈する釉が施される。115は肥前系磁器の皿である。高台部分を欠損し、内面には呉須による圏線・文様が描かれる。







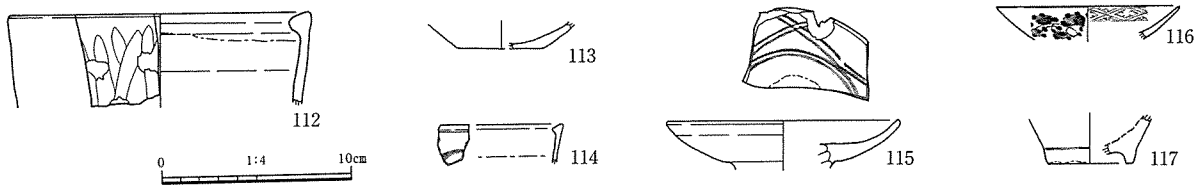
1　黒褐色シルト（10YR3/1）ローム粒混
2　灰黄褐色シルト（10YR4/2）
3　黒褐色シルト（10YR3/2）ローム粒混
4　暗褐色シルト（10YR3/3）ローム粒多量混
5　褐灰色シルト（10YR4/1）
6　暗褐色シルト（10YR3/4）ローム粒多量混
7　暗茶褐色シルト（10YR3/3）Ⅰ層に類似
8　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）
9　暗褐色シルト（10YR3/3）
10　灰褐色シルト（7.5YR4/2）
11　灰褐色シルト（7.5YR4/2）ローム粒混
12　暗褐色シルト（7.5YR3/3）
13　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）
　　ローム粒多量混
14　褐色シルト（7.5YR4/3）土器細片混
15　暗褐色シルト（7.5YR3/3）
16　黒褐色シルト（7.5YR3/2）ローム粒多量混
17　明黄褐色シルト（10YR6/6）
18　明黄褐色砂質シルト（10YR6/6）
19　黒褐色シルト（7.5YR3/1）
　　ロームブロック多量混
20　黒褐色シルト（7.5YR3/3）ローム粒多量混
21　黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強
　　ローム粒少量混
22　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）
　　ローム粒少量混
23　灰褐色シルト（7.5YR4/2）
24　褐色シルト（7.5YR4/3）ローム粒少量混
25　褐色シルト（7.5YR4/3）ローム粒多量混
26　褐色シルト（7.5YR4/3）
　　ロームブロック少量混
27　暗褐色シルト（7.5YR3/3）ローム粒少量混
28　黒褐色シルト（7.5YR3/2）ローム粒多量混
29　黒褐色シルト（7.5YR2/2）粘性強
　　ローム粒少量混
30　褐色シルト（7.5YR4/3）ローム粒少量混
31　暗褐色シルト（7.5YR3/3）ローム粒少量混



1　暗茶褐色シルト（10YR3/3）
　　黄褐色ロームの細粒を密に含む
2　暗茶褐色シルト（10YR3/3）
　　黄褐色ロームの細粒を少量含む
3　暗茶褐色シルト（10YR3/3）
　　黄褐色ロームの細粒を多く含む

0　1:80　2m

第27図　ＳＤ７・８・９・10・11



第28図　ＳＤ７・10・11出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
112	28	SD7 埋土中	陶器 鉢	＊15.6 －	△4.9	外面：口縁～体部連弁様に掘り込み、黒褐色釉施釉 内面：口縁部黒褐色釉施釉　体部無釉　ロクロナデ	細砂粒微量 良	施釉部：黒褐色 露胎部：灰色	
113	28	SD9 埋土中	陶器 皿？	－ ＊4.3	△1.4	外面：体部ロクロナデ　底部ロクロケズリ　無釉 内面：暗褐色、黄緑色釉を施釉	密 良	外面：灰色 内面：暗褐色　黄緑色	
114	28	SD7 埋土中	磁器 鉢？	－	△2.2	外面：口縁～体部呉須による圏線・文様 内面：口縁部施釉　体部は無釉か	密 良	内外面施釉部：灰白色 内面露胎部：褐白色	
115	28	SD9 埋土中	磁器 皿	＊12.1 －	△2.6	外面：施釉 内面：施釉　呉須による圏線等	細砂粒微量 良	明褐灰色	肥前系
116	28	SD11 埋土中	磁器 皿	＊9.7 －	△1.7	外面：唐草文 内面：四方襷文	密 良	灰白色	肥前系
117	28	SD11 埋土中	磁器 瓶？	－ ＊3.8	△2.5	外面：高台上位に圏線　畳付無釉 内面：表面欠損のため不明	密 良	灰白色	肥前系

ＳＤ11（第27・28図　図版21－２・５）

Ａ区Ｄ５～Ｄ６グリッド、緩斜面に位置する。検出した長さは12mで、南東から北西方向に直線状に延びる。幅は最大2.6m、深さは北西端で50cmを測る。底面の標高は北西端が南東端より60cm低い。埋土中は暗褐色シルトで、砂礫の混入など流水の痕跡は窺われない。遺物は埋土中から肥前系の磁器116、117が出土している。

ＳＤ12（第29図　図版21－３）

Ａ区Ａ２・－Ａ２グリッド、緩斜面に位置する。検出した長さは11.6mで、南北方向に直線状に延びる。北端は削平され、遺存していない。幅は最大54cm、深さは８cmである。断面形は皿状を呈する。埋土は茶褐色シルトでＩ層に近似する。遺物は須恵器片が１点出土している。

ＳＤ13（第29図　図版20－５）

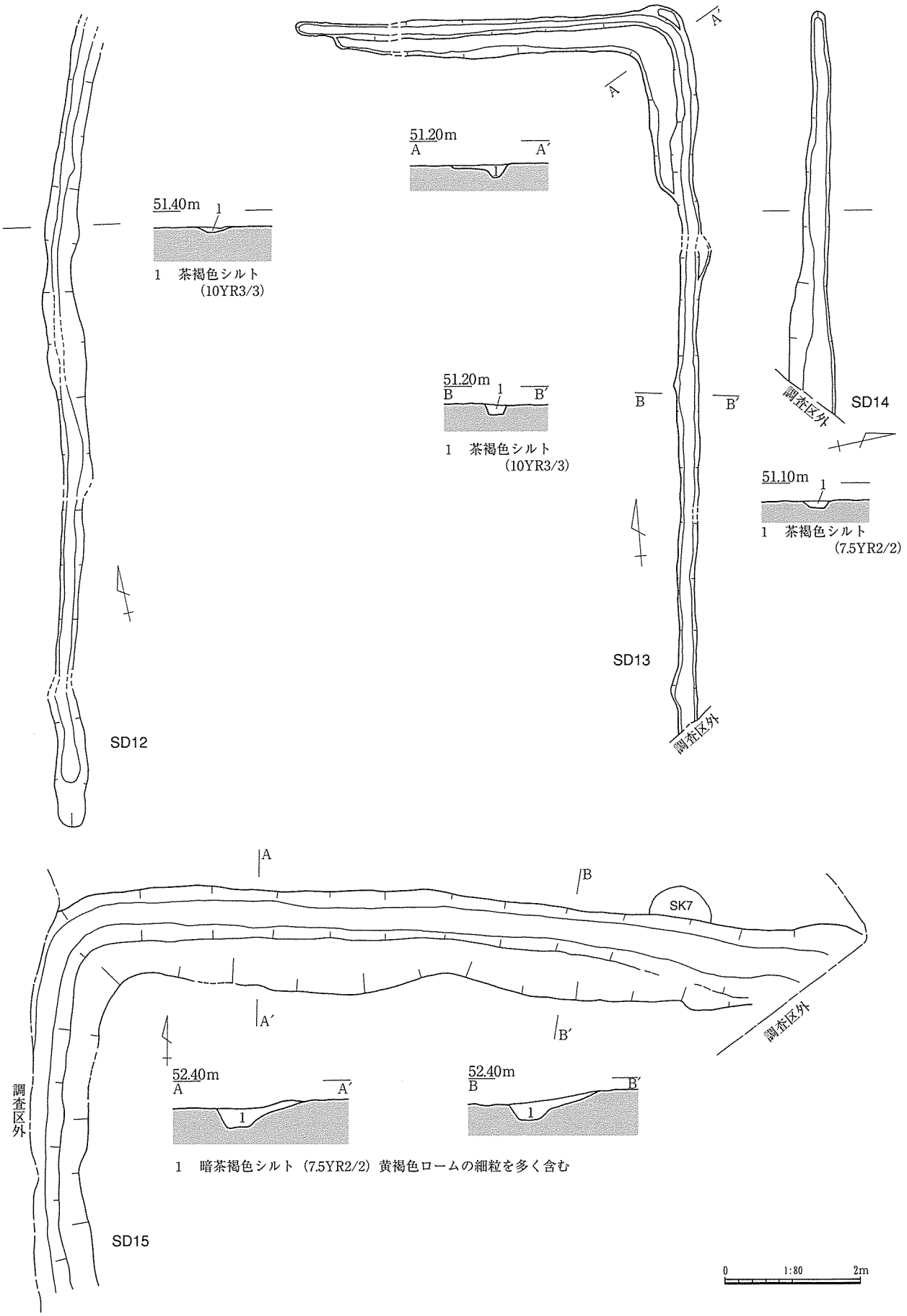
Ａ区Ｂ２・Ｃ３グリッド、緩斜面に位置する。検出した長さは15.5mで、平面形がＬ字状を呈する。幅はＡ－Ａ′ラインで82cm、深さは20cmを測る。屈曲部から西端にかけて２段堀となる。埋土は茶褐色シルトで１層と近似する。遺物は出土していない。

ＳＤ14（第29図　図版21－１）

Ａ区Ｃ４・Ｃ５グリッド、緩斜面に位置する。検出した長さは5.6mで、南東から北西方向に直線状に延びる。幅は最大で65cm、深さは10cmを測る。埋土は茶褐色シルトで１層と近似する。遺物は出土していない。

ＳＤ15（第29図　図版21－４）

Ｂ区Ｅ７・Ｅ８グリッド、平坦地に位置する。検出した長さは16.5mで、Ｂ区北西端でＬ字状に屈曲する。東端は調査区外へと延び、南端、および西端は、削平され遺存していない。検出した長さ16.5m、幅1.0～1.5m、深さ0.28mを測る。底面の標高は屈曲部が最も低く、東端より約20cm低い。埋土中に砂礫の混入など流水の痕跡は窺えない。遺物は出土していない。



第29図　ＳＤ12・13・14・15

第４節　弥生時代の調査、およびその他の遺構・遺物

１．概要（第30図）

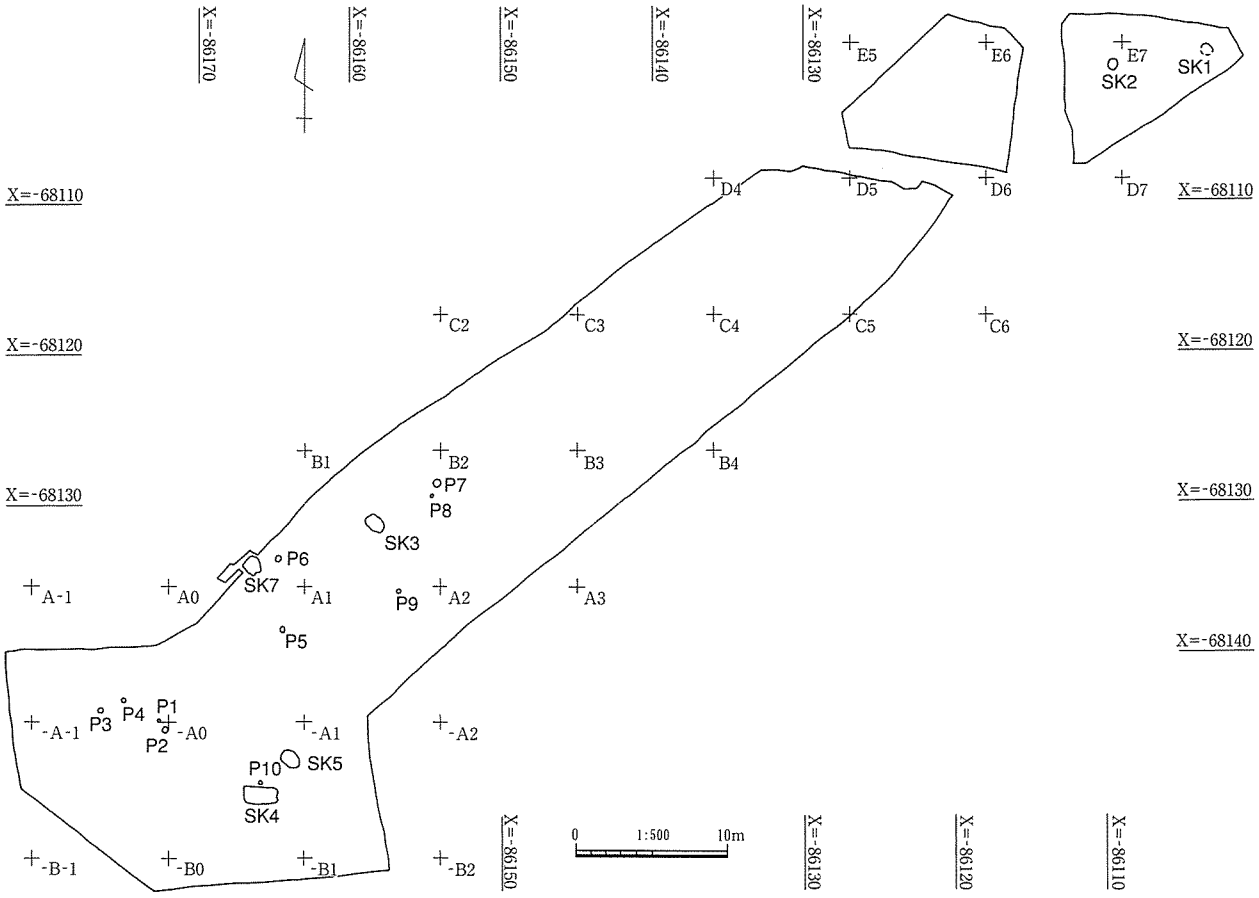
Ａ区西側で土坑４基、ピット10基、Ｂ区で土坑２基を確認した。ＳＫ５・７はⅢ層上面、その他の遺構はⅣ層、もしくはⅤ層上面で検出している。ＳＫ２からは弥生時代中期後葉の土器が多量に出土している。ＳＫ２以外に調査区内において当該期の遺構は検出されていない。ＳＫ３・４は落とし穴と考えられ、その他の遺構については時期や性格を特定するには至っていない。

２．土坑

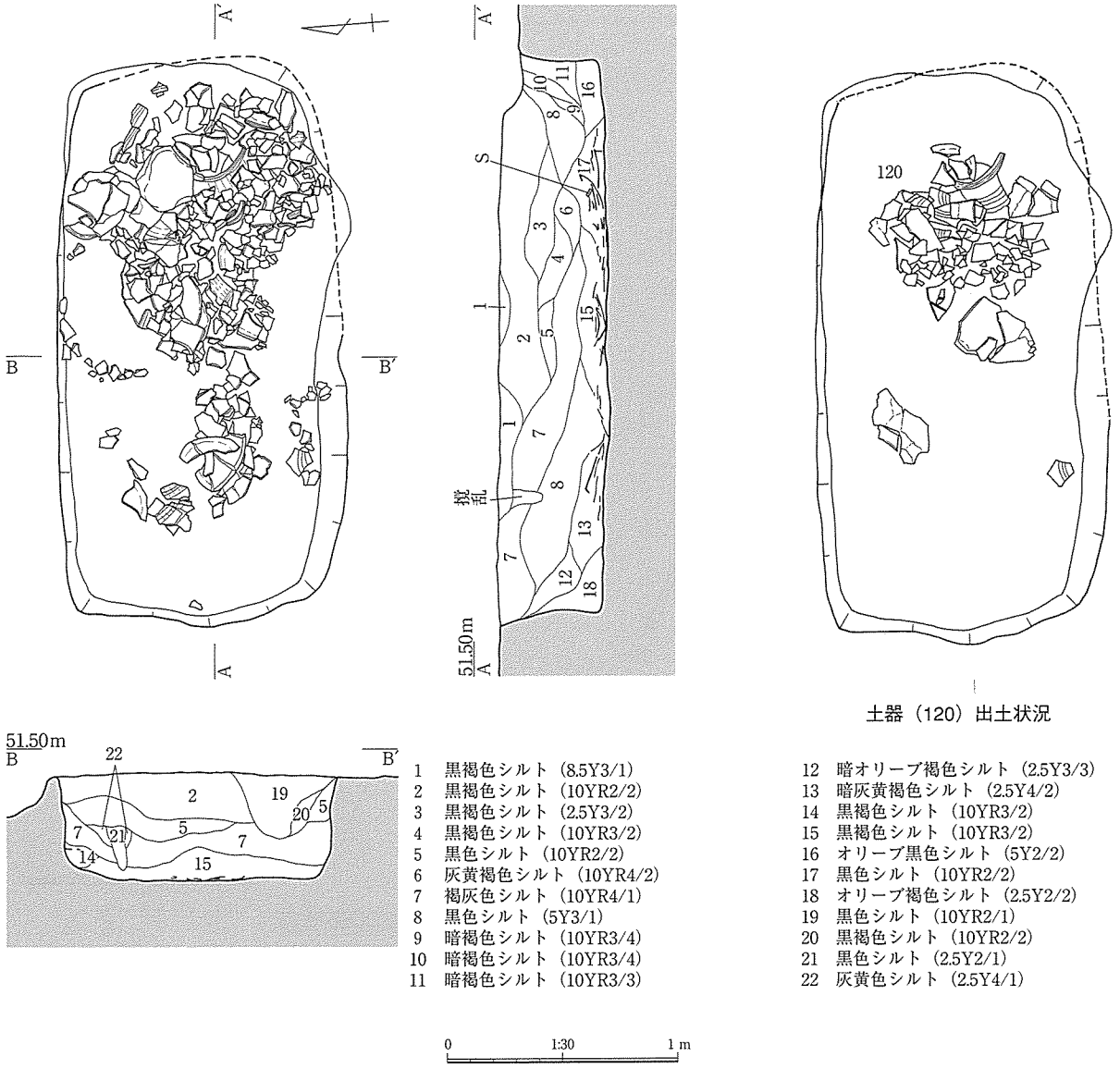
ＳＫ２（第31図　図版22）

Ａ区－Ａ１グリッド、標高51.40ｍの平坦地に位置する。長軸2.47ｍ、短軸１.25ｍの長方形を呈する。検出面からの深さは46cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北東隅でややオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。埋土は22層に細分される。各層ともⅤ層（黄褐色ローム）の細粒やブロックを含み、少量ではあるが弥生時代中期後葉の土器片が出土している。18、20層については本遺構が埋没した後に形成された遺構の埋土の可能性が高い。

底面の東側を中心とした範囲で多量の弥生土器片が出土している。完存する大型の壺120は横倒しにつぶれた状態で出土しており、頸部や胴部破片の一部が西側に50～60cmほど離れた場所に散乱している。その他の土器はばらばらの状態で積み重なっており、個体毎にまとまった出土状況は窺



第30図　弥生時代他　遺構分布図

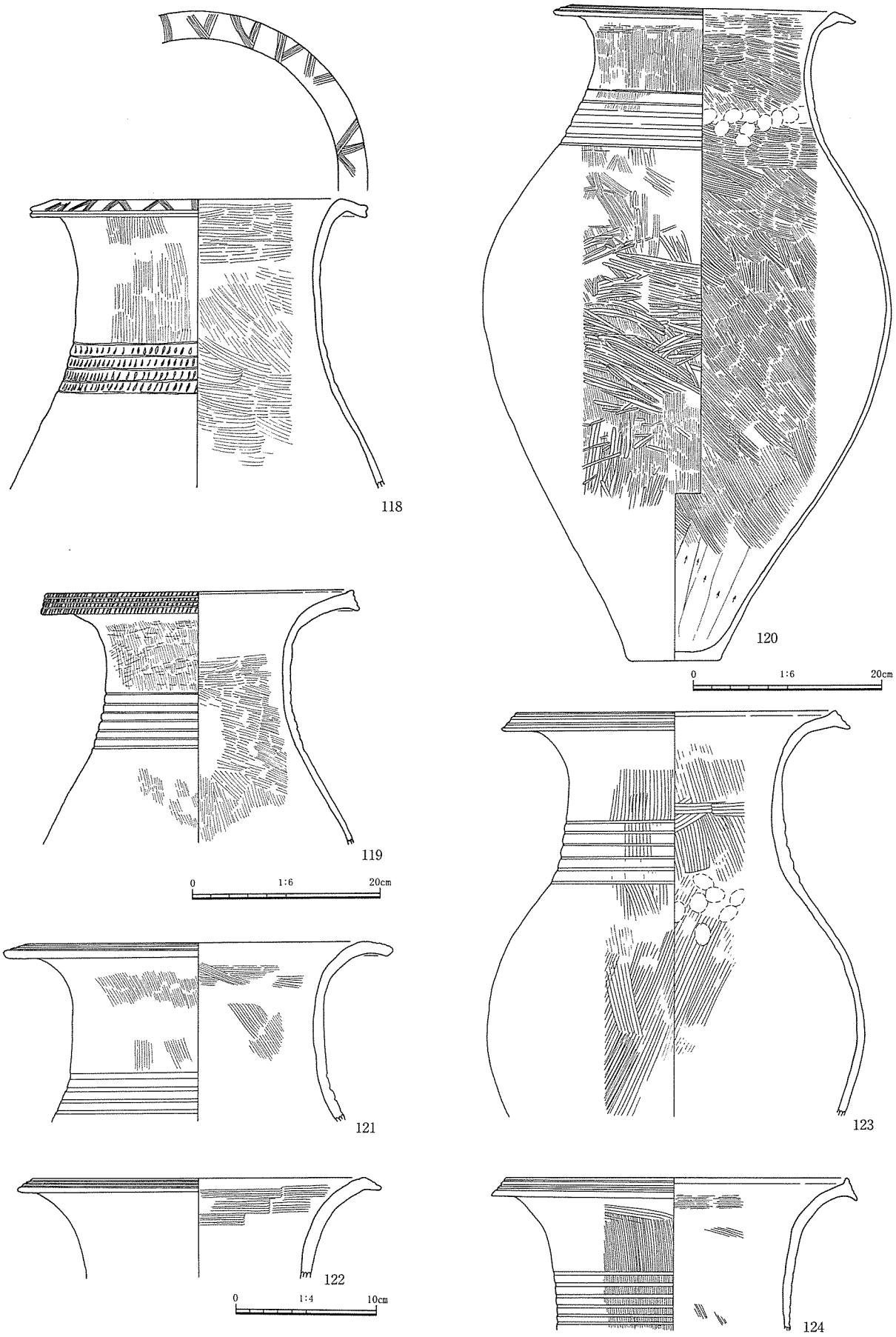


第31図　ＳＫ２

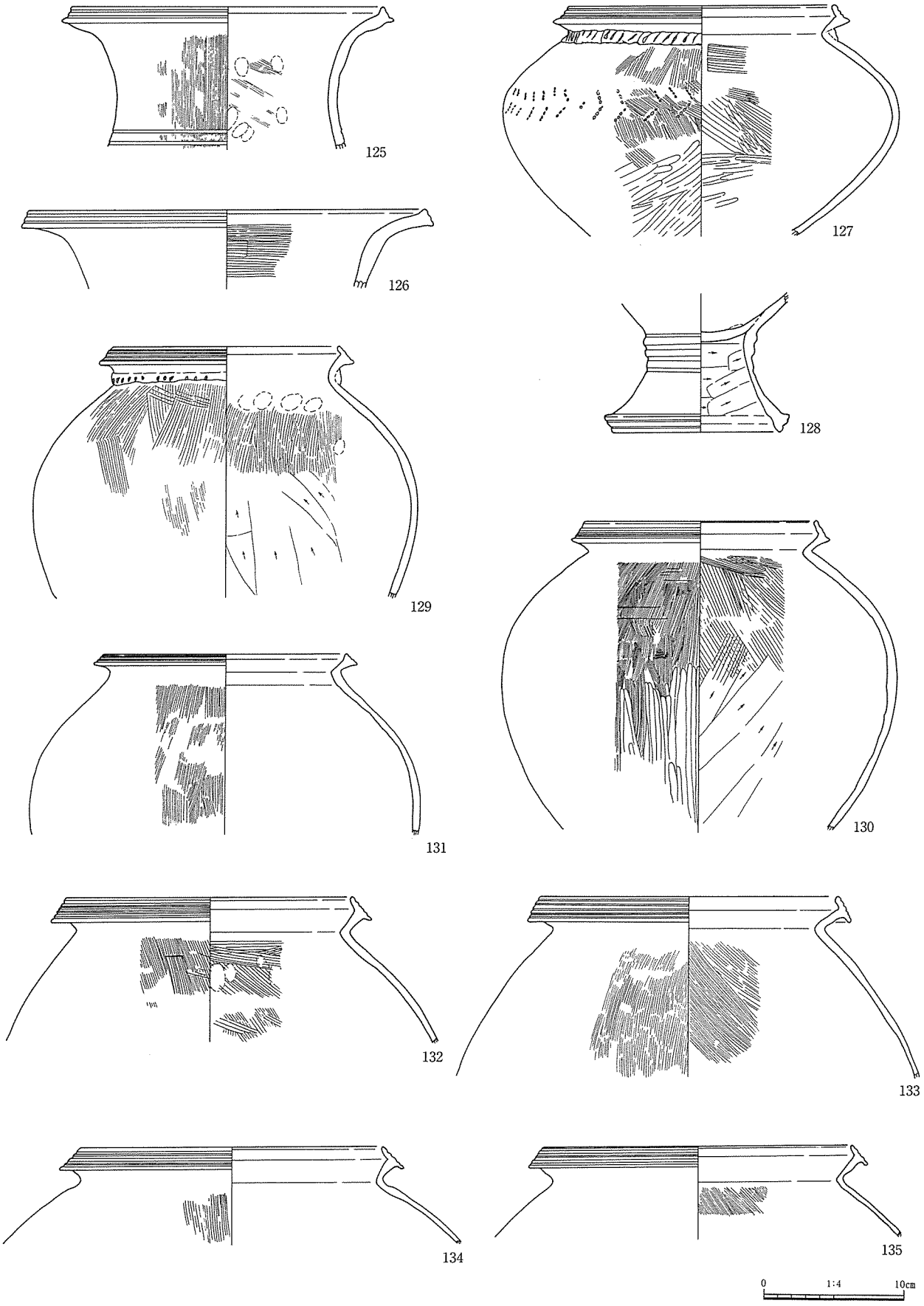
われない。また、底部まで復元できる甕136もあるが、完存するものはみられない。その他に台石Ｓ２、拳大～人頭大の礫が土器とともに出土している。出土した土器が概ね松井Ⅲ～Ⅳ期に比定されることから、遺物は弥生時代中期後葉に本土坑内に廃棄されたと考えられる。

ＳＫ２出土土器（第32～35図　図版23～27）

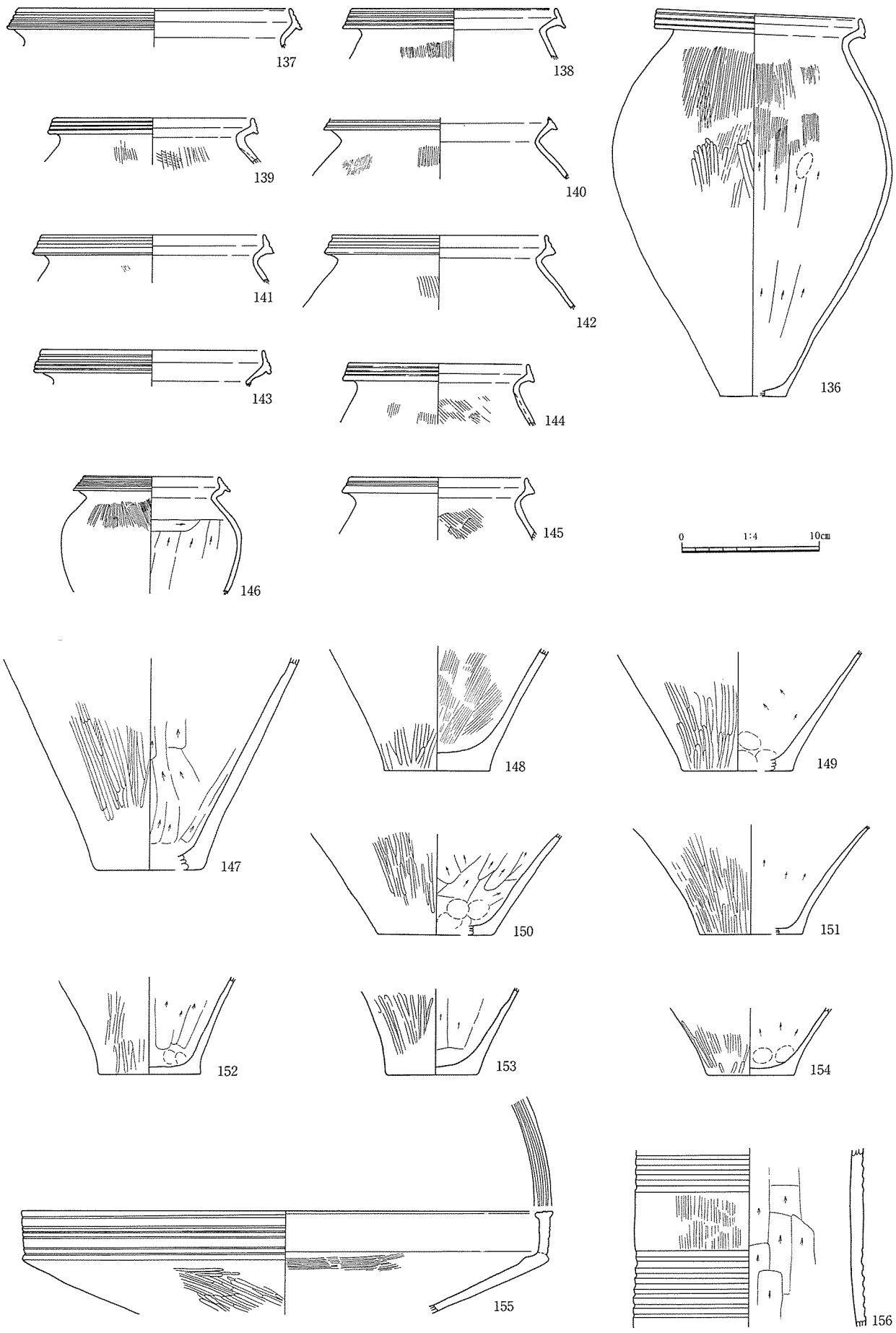
118～128は壺である。118は外に屈曲する口縁部に櫛描文が施され、端部には凹線文が１条巡る。120は高さ70cmの大型品で、内面のハケ調整が上半まで達していない。127は脚付壺で、高さのある脚台部を持つと考えられる。また、胴部最大径付近の外面に刺突文が施され、胎土が赤褐色を呈する。吉備地方からの搬入品である可能性がある。128は台付壺の脚台部と考えられ、127と同じく胎土が赤褐色を呈する。129～146は甕である。129は指頭圧痕貼付突帯を持つが、指頭圧痕は丁寧には施されていない。130、132～135、137は口縁端部を上下に大きく拡張し、断面Ｔ字状、もしくは逆Ｌ字状の内傾する口縁帯をもつ。136はほぼ直立する口縁帯をもち、胎土が赤褐色を呈する。146は小型品である。155は大型の高杯、156は器台の胴部と考えられ、156の外面には赤色塗彩が施さ



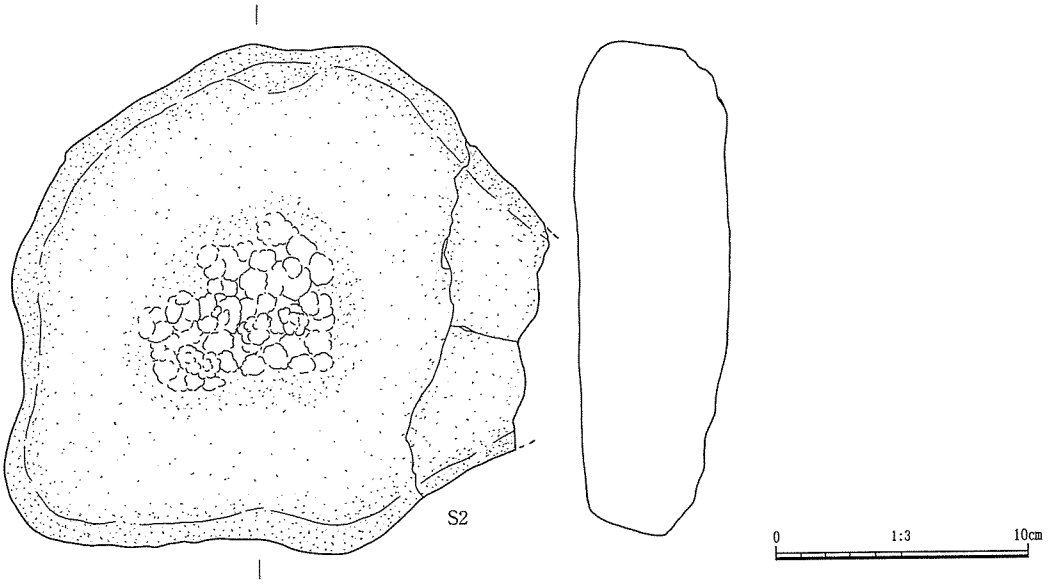
第32図　ＳＫ２出土土器（１）



第33図　ＳＫ２出土土器（２）



第34図　ＳＫ２出土土器（３）



第35図　ＳＫ２出土石器

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	残存率	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
118	37	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～胴部上半 3／5	＊30.0 －	△30.9	外面:口縁平坦部櫛描文　端部凹線文1条　頸部凹線文5条 刻み目　ハケ 内面:口縁部ナデ　頸～胴部ハケ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	にぶい橙色	
119	37	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～胴部上半 2／5	＊33.0 －	△27.0	外面:口縁部凹線文3条　刻み目　頸部凹線文7条 ハケ　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　頸～胴部ハケ	1mm程の白色砂粒を含む 良	橙色	
120	37	SK2 床直	弥生土器 壺	ほぼ完存	27.8 10.0	△70.5	外面:口縁部凹線文3条　頸部凹線文6条 ハケ　胴部ハケ後ミガキ 内面:口縁部～胴部ハケ　底部ヘラケズリ　頸部指頭圧痕	1mm程の白色砂粒を含む 良	にぶい橙色	
121	37	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～頸部 4／5	23.6 －	△12.8	外面:口縁部凹線文5条　頸部凹線文　ハケ 内面:口縁部ナデ　頸部ハケ	1mm程の白色砂粒を含む 良	橙色	
122	37	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～頸部 4／5	＊23.5 －	△7.2	外面:口縁部凹線文3条　頸部磨耗のため調整不明 内面:口縁部ナデ　頸部磨耗のため調整不明	1mm程の白色砂粒を含む 良	黄橙色	
123	37	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～胴部上半 3／5	＊22.9 －	△29.1	外面:口縁部凹線文3条　頸部凹線文6条　胴部上半ハケ 内面:口縁部ナデ　頸部胴部上半ハケ　一部指頭圧痕	1mm程の白色砂粒を含む 良	橙色	
124	37	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～頸部 3／5	24.6 －	△10.9	外面:口縁部凹線文3条　頸部ハケ　凹線文5条 内面:口縁部ナデ　頸部ハケ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
125	38	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～頸部 4／5	22.2 －	△10.2	外面:口縁部凹線文2条　頸部ハケ　凹線文 内面:口縁部ナデ　頸部ハケ　一部指頭圧痕	1mm程の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
126	38	SK2 床直	弥生土器 壺	口縁部～頸部 1／4	＊28.4 －	△5.6	外面:口縁部凹線文3条　頸部ハケ 内面:口縁部ナデ　頸部以下磨耗のため調整不明	1mm程の白色砂粒を含む 良	橙色	
127	38	SK2 床直	弥生土器 脚付壺	口縁部～胴部 4／5	＊18.8 －	△16.5	外面:口縁部凹線文3条　指頭圧痕貼付突帯 胴部中程刺突文　上半ハケ　下半ヘラミガキ 内面:口縁部ナデ　胴部上半ハケ　下半ヘラミガキ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	赤褐色	外面赤色塗彩
128	38	SK2 床直	弥生土器 台付壺	脚部 ほぼ完存	－ 11.6	△10.0	外面:脚部凹線文4条　端部凹線文2条 内面:脚部ヘラケズリ　端部ナデ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	赤褐色	
129	38	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部 2／5	＊16.0 －	△18.0	外面:口縁部凹線文4条　指頭圧痕貼付突帯を持つ 胴部上半ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部上半ハケ　指頭圧痕　下半ヘラケズリ	1～2mmの白色砂粒を密に含む 良	にぶい黄橙色	
130	38	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部下半 2／5	＊16.6 －	△22.2	外面:口縁部凹線文4条　胴部上半ハケ　下半ヘラミガキ 内面:口縁部ナデ　胴部上半ハケ　下半ヘラケズリ	細砂粒多量 良	にぶい黄橙色	外面赤色塗彩
131	38	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部上半 1／6	＊17.2 －	△13.0	外面:口縁部凹線文3条　胴部上半ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部磨耗のため調整不明	1mm程の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
132	38	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部上半 3／5	20.55 －	△10.5	外面:口縁部凹線文5条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部上半ハケ　指頭圧痕	1mm程の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
133	38	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部上半 1／4	＊21.3 －	△13.0	外面:口縁部凹線文5条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部ハケ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	にぶい橙色	
134	38	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部上半 1／8	＊21.7 －	△7.0	外面:口縁部凹線文4条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部磨耗のため調整不明	1mm以下の白色砂粒を含む 良	赤褐色	
135	38	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部上半 1／8	＊22.2 －	△6.6	外面:口縁部凹線文5条　胴部磨耗のため調整不明 内面:口縁部ナデ　胴部上半ハケ	1mm程の白色砂粒を含む 良	淡黄褐色	
136	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～底部 3／5	14.9 4.9	△28.4	外面:口縁部凹線文3条　胴部上半ハケ　下半ミガキ 内面:口縁部ナデ　胴部上半ハケ　下半ヘラケズリ	1mm程の白色砂粒を含む 良	赤褐色	
137	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／8	＊19.8 －	△2.9	外面:口縁部凹線文4条 内面:口縁部ナデ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	褐灰色	
138	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／4	＊14.6 －	△3.8	外面:口縁部凹線文4条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部上半ハケ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	褐灰色	
139	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／2	＊14.5 －	△3.3	外面:口縁部凹線文3条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部ハケ	1mm程の白色砂粒を含む 良	橙色	
140	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／8	－ －	△4.45	外面:口縁部凹線文　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部磨耗のため調整不明	1mm以下の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
141	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／6	＊16.2 －	△3.5	外面:口縁部凹線文2条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	褐灰色	№142と同一個体か。
142	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／8	＊15.6 －	△5.4	外面:口縁部凹線文2条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	№141と同一個体か。
143	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／8	＊16.1 －	△2.55	外面:口縁部凹線文4条 内面:口縁部ナデ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
144	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／8	＊13.0 －	△4.5	外面:口縁部凹線文3条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部ハケ	1mm程の白色砂粒を含む 良	灰黄褐色	
145	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部 1／8	＊12.8 －	△4.55	外面:口縁部凹線文2条　胴部ハケ? 内面:口縁部ナデ　胴部ハケ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
146	39	SK2 床直	弥生土器 甕	口縁部～胴部上半 1／5	＊9.8	△8.6	外面:口縁部凹線文4条　胴部ハケ 内面:口縁部ナデ　胴部ヘラケズリ	1mm以下の白色砂粒を含む 良	橙色	

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	残存率	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土焼成	色調	備考
147	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部3／5	－＊8.0	△15.5	外面:ハケ後ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ	1mm程の白色砂粒を含む良	橙色	
148	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部底部完存	－＊7.8	△8. 9	外面:ヘラミガキ 内面:ハケ	1mm程の白色砂粒を含む良	橙色	
149	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部底部1／2	－＊8.0	△8.7	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ　底部指頭圧痕	1mm程の白色砂粒を含む良	にぶい橙色	
150	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部底部1／2	－＊8.4	△7.4	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ　底部指頭圧痕	1mm程の白色砂粒を含む良	にぶい橙色	
151	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部底部1／3	－＊7.6	△7.8	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ　底部ナデ	1mm程の白色砂粒を含む良	にぶい橙色	
152	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部底部完存	－＊7.2	△7.0	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ　底部指頭圧痕	1mm程の白色砂粒を含む良	赤橙色	
153	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部底部完存	－＊6.3	△6.3	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ	1mm以下の白色砂粒を含む良	橙色	内面炭化物付着
154	39	SK2床直	弥生土器壺・甕	胴部下半～底部底部ほぼ完存	－＊9.4	△4.9	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ　底部指頭圧痕	1mm以下の白色砂粒を含む良	にぶい橙色	
155	39	SK2床直	弥生土器高坏	口縁部～受部1／8	＊37.0－	△7.5	外面:口縁上端部凹線文3条　口縁部凹線文6条　胴部ヘラミガキ 内面:口縁部ナデ　胴部ハケ	1mm以下の白色砂粒を含む良	橙色	
156	39	SK2床直	弥生土器器台	胴部1／8	胴径16.8－	△13.1	外面:凹線文　ハケ 内面:ヘラケズリ	1mm以下の白色砂粒を含む良	橙色	外面赤色塗彩

遺物番号	挿図番号	遺構層位	器種	法量				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(kg)	
S2	40	SK2	台石	△21.2	20.3	6.0	3.8	裏面に被熱による剥離が認められる

れている。

ＳＫ３（第36図　図版28－１）

Ａ区Ｂ２グリッド、標高51.10ｍの緩斜面に位置する。平面形は長径1.48ｍ、短径0.9cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは99cmを測る。底面に円形のピットが２基存在する。Ｐ１は長軸50cm、短軸20cm、深さ42cm、Ｐ２は径17cm、深さ35cmを測る。遺物は出土していない。形態から落とし穴と考えられる。

ＳＫ４（第36図　図版28－２・３）

Ａ区－Ａ１グリッド、標高51.30ｍの平坦地に位置する。平面形は長径1.38ｍ、短径0.96ｍの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.1ｍである。底面には径12cmの円形のピットが存在する。深さ32cmである。遺物は出土していない。形態から落とし穴と考えられる。

ＳＫ５（第36図　図版28－４～６）

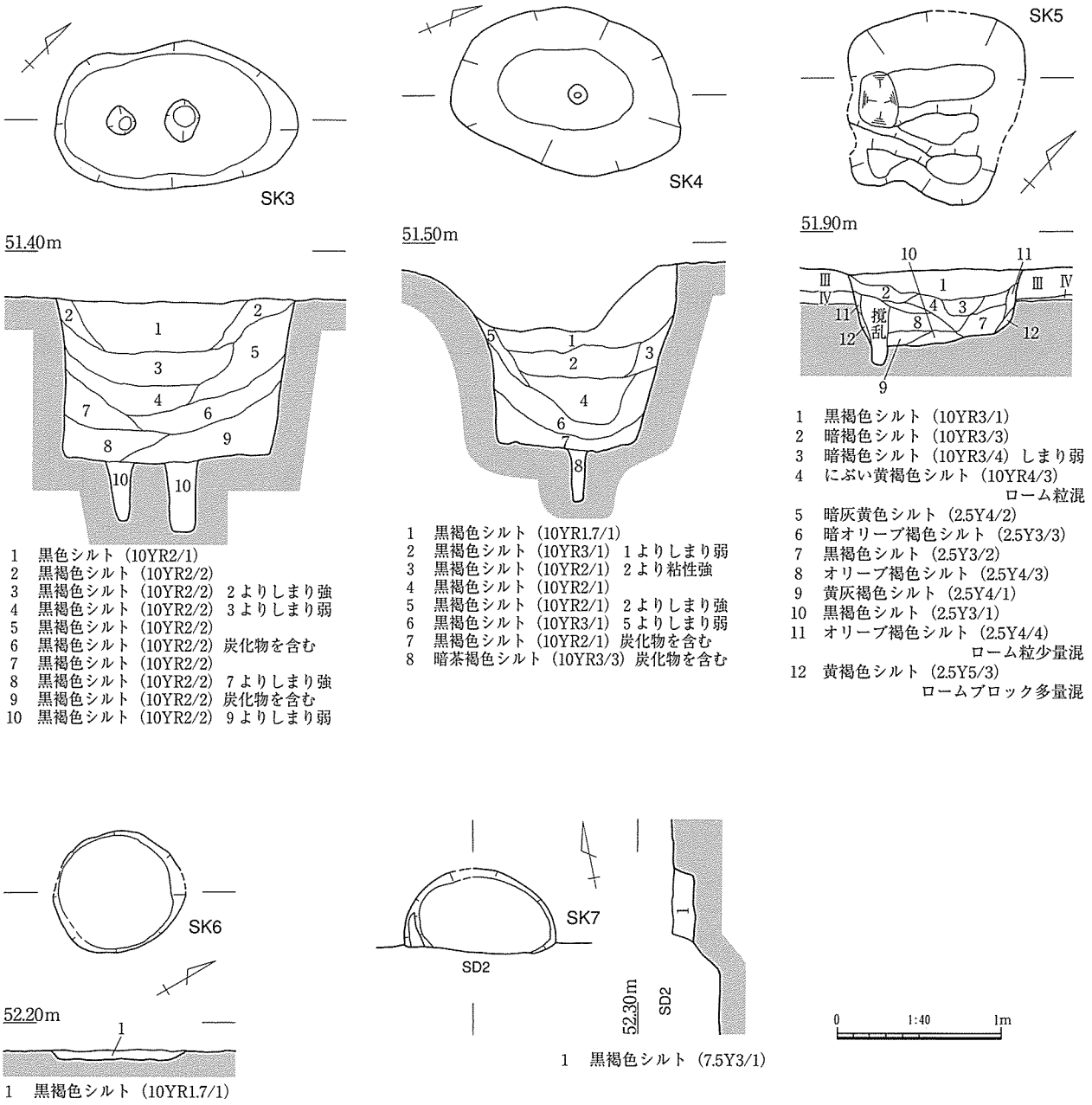
Ｂ１グリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出した。調査地境で検出したため、一部調査区を拡張している。平面形は不整な方形を呈し、長軸1.18ｍ、短軸1.08ｍ、深さは約45cmを測る。断面形は逆台形で、底面には凹凸がある。遺物は出土せず、時期や性格については不明である。

ＳＫ６（第36図　図版29－１）

Ｂ区Ｅ７グリッド、標高52.00ｍの平坦地に位置する。Ⅳ層上面で検出した。平面形は直径56cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは９cmである。埋土中には0.5～１cm角の炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

ＳＫ７（第36図　図版29－２）

Ｂ区Ｅ８グリッド、標高52.10ｍの平坦地に位置する。Ⅲ－16層上面で検出した。南側はＳＤ２により切られる。平面形は長径90cm、短径50cm以上の楕円形を呈する。断面形は逆台形で、検出面からの深さは15cmである。遺物は出土していない。



第36図　ＳＫ３・４・５・６・７

第１表　ピット計測表

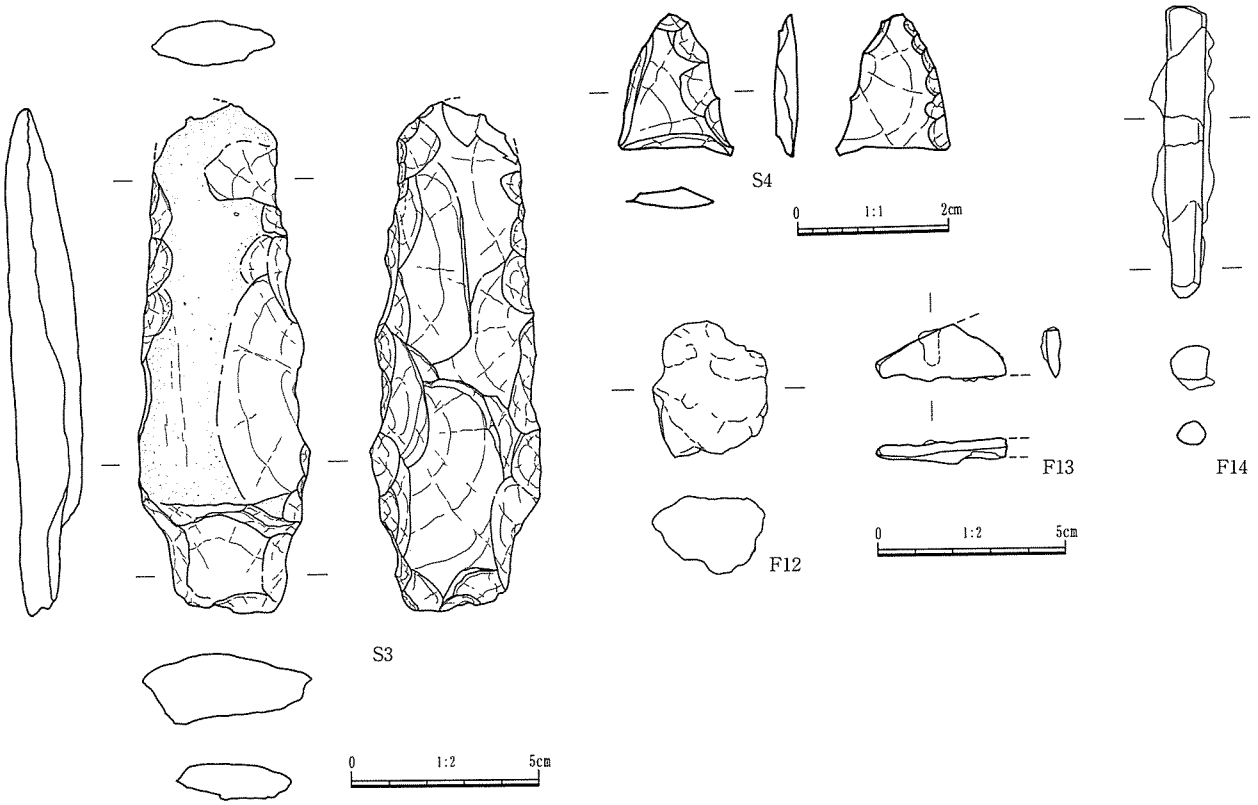
遺構名	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色
P1	A0	30	25	16	暗褐色シルト(7.5YR3/3)、土師細片を含む
P2	−A0	50	44	24	暗褐色シルト(7.5YR3/3)
P3	A0	40	30	27	暗褐色シルト(7.5YR3/3)
P4	A0	36	30	25	黒褐色シルト(10YR3/2)
P5	A1	43	37	22	黒褐色シルト(10YR3/2)
P6	B1	45	44	13	黒褐色シルト(10YR3/2)
P7	B2	60	50	13	暗褐色シルト(7.5YR3/3)
P8	B2	24	20	14	暗褐色シルト(7.5YR3/3)
P9	A2	34	30	10	暗褐色シルト(7.5YR3/3)
P10	−A1	37	35	24	黒褐色シルト(10YR3/2)

３．ピット（第１表　第30図）

Ａ区西側でピットを10基確認している。埋土はすべて単層で、黒褐色系のものと褐色系のものに大別される。Ｐ１からは土師器の細片が出土しているが、時期は特定できない。柱痕を確認できたものはなく、調査範囲において規則的に並んでいる様子も窺えない。

４．遺構外遺物（第37図　図版29－３～５）

Ｓ３は用途不明品である。表面には自然面が残る。両側縁は細かな剥離が施されているが、鋭利ではなく、やや摩滅している。基部付近の側縁には抉りが入れられ、茎を作りだしているようにも見える。未成品か。Ｆ12・13はⅡ層、Ｆ14はⅢ層から出土している。Ｆ13は三角形を呈する。鍛打によるものか、ややねじれが生じている。



第37図　遺構外出土石器・鉄関連遺物

遺物番号	挿図番号	遺構層位	器種	法量				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
S3	40	表土	不明	13.5	4.5	1.7	138	未成品？
S4	40	Ⅰ層	石鏃	1.85	1.5	0.3	1.0	

第４章　坂長下屋敷遺跡

第１節　遺跡の立地と土層堆積

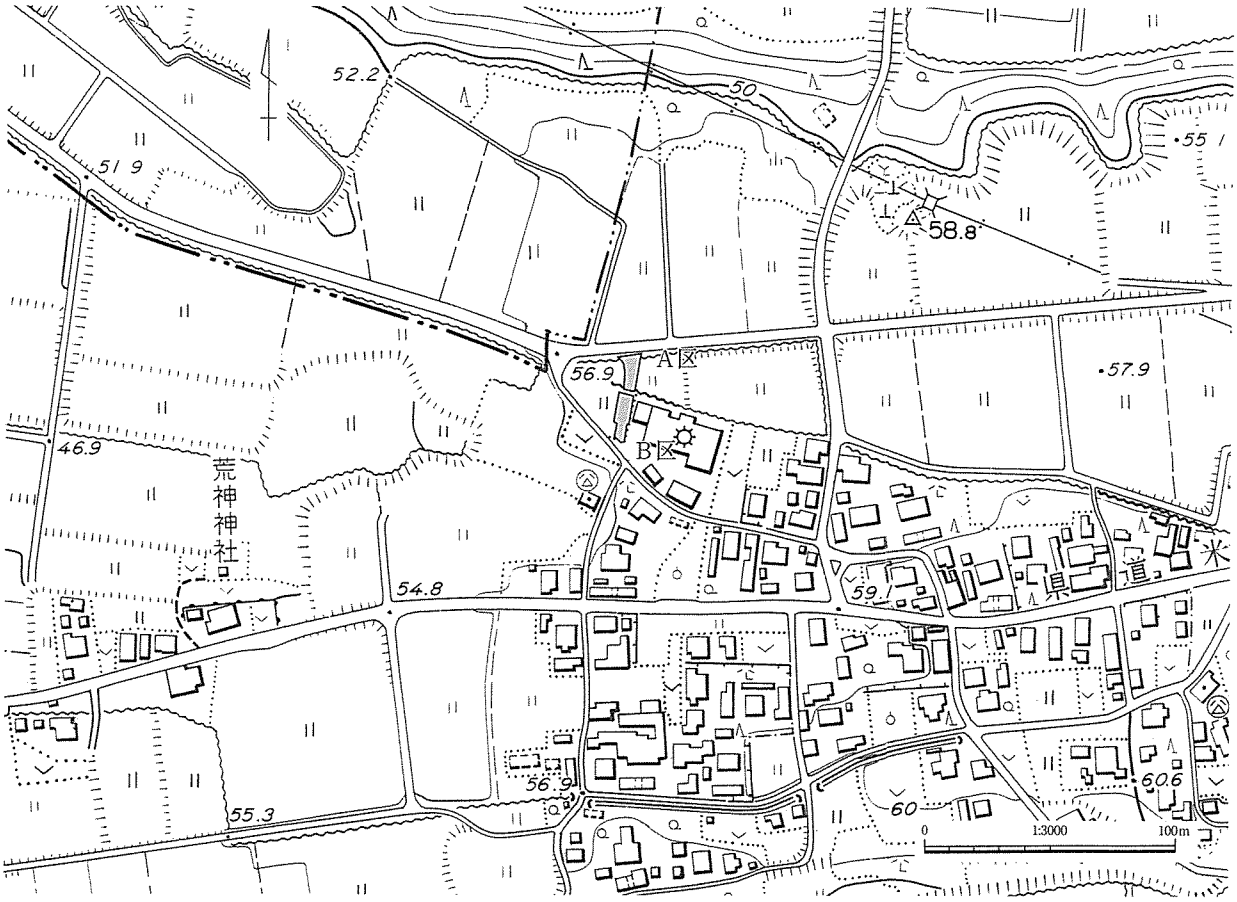
１．遺跡の立地（第38図）

遺跡は長者屋敷遺跡から谷地形を挟み、約400m離れた台地上に位置する。谷地形は調査地の南側で収束し、南東側には現在の集落が広がっている。

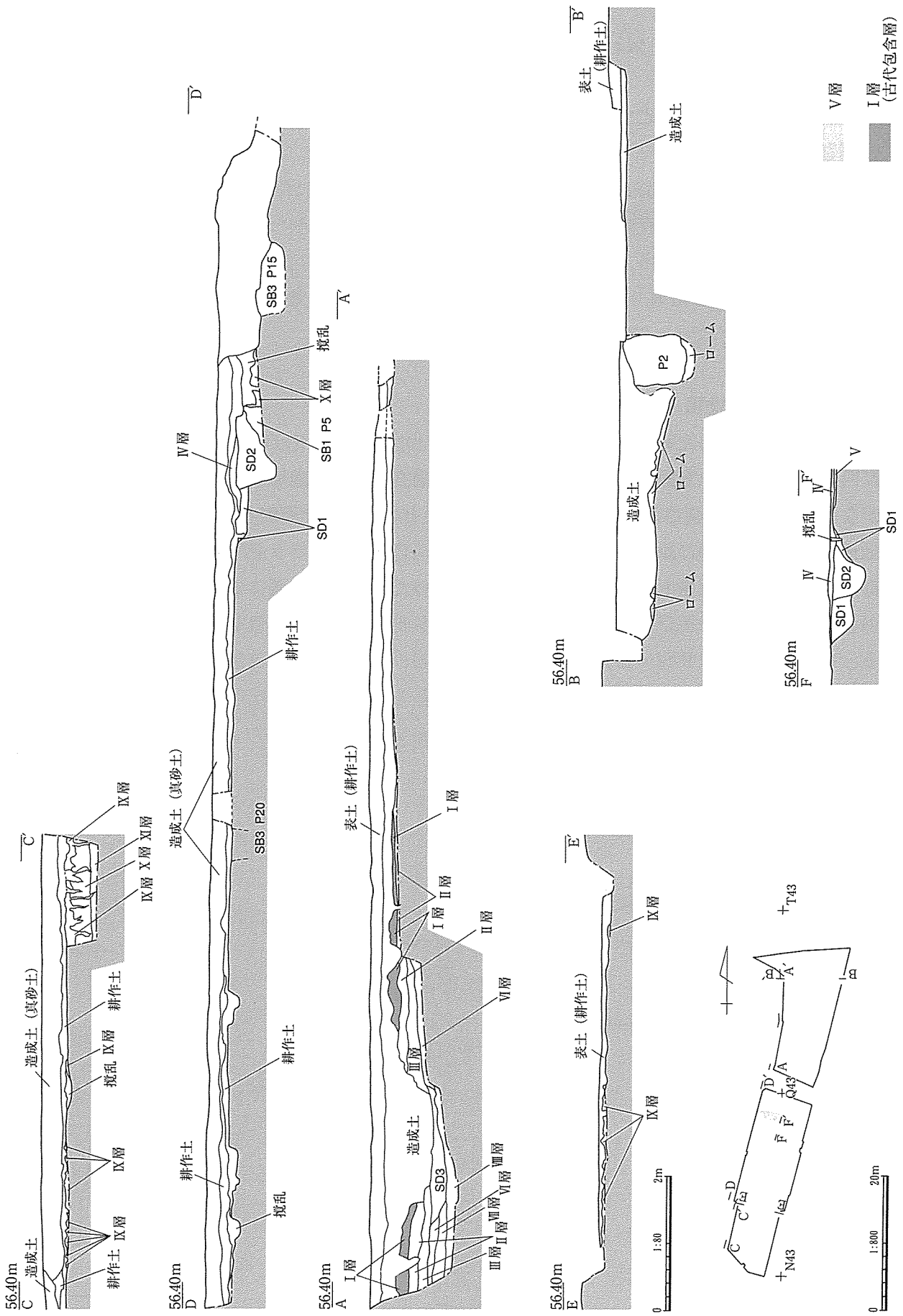
調査は北側の調査区をＡ区、南側の調査区をＢ区として行った。調査前はＡ区が耕作地、Ｂ区が耕作土の上に真砂土を造成し、駐車場として利用されていた。地表面の標高はＡ区で約55.27～55.56m、Ｂ区は約55.32m～55.80mである。

２．調査地の土層堆積（第39図）

堆積状況を確認するためのトレンチを設定し（第40図）、掘り下げを行った。調査区の東壁、および西壁の土層断面を記録した。断面観察の結果、調査地周辺は圃場整備などにともない削平・造成がなされ、地形が改変されていることが判明した。とくにＡ区北壁際とＢ区北側は削平が著しい。Ａ区南側からＢ区北側にかけて（Ｒ42・43グリッド～Ｑ42・43グリッド周辺）は谷地形をなし、この部分にのみ黒褐色シルト（Ⅰ～Ⅴ層）が堆積していた。ローム上面にて検出した遺構にも黒褐色系の埋土をもつものが多いことから、本来は黒褐色シルトが調査地周辺を被覆していたものと思われる。このうちⅠ層はＲ42・43グリッド周辺に堆積し、古代の遺物を包含する。



第38図　遺跡周辺の地形



第39図　調査区土層断面

調査地の堆積状況を下記に記す。

Ⅰ層：黒褐色シルト

Ａ区南側に５～20cmの厚さで堆積する。古代の遺物（第56図）が出土している。

Ⅱ層：黒褐色シルト

Ａ区南側に５～28cmの厚さで堆積する。上面で古代の遺構を検出した。上面での標高は約55.30～55.50mである。遺物は出土していない。

Ⅲ層：黒褐色シルト

Ａ区南側に６～22cmの厚さで堆積する。遺物は出土していない。

Ⅳ層：黒褐色シルト

Ｑ42・43グリッド周辺のみに約10cmの厚さで堆積する。遺物は出土していないが、ＳＤ１・２を被覆する層で、平安時代以降に堆積したと考えられる。

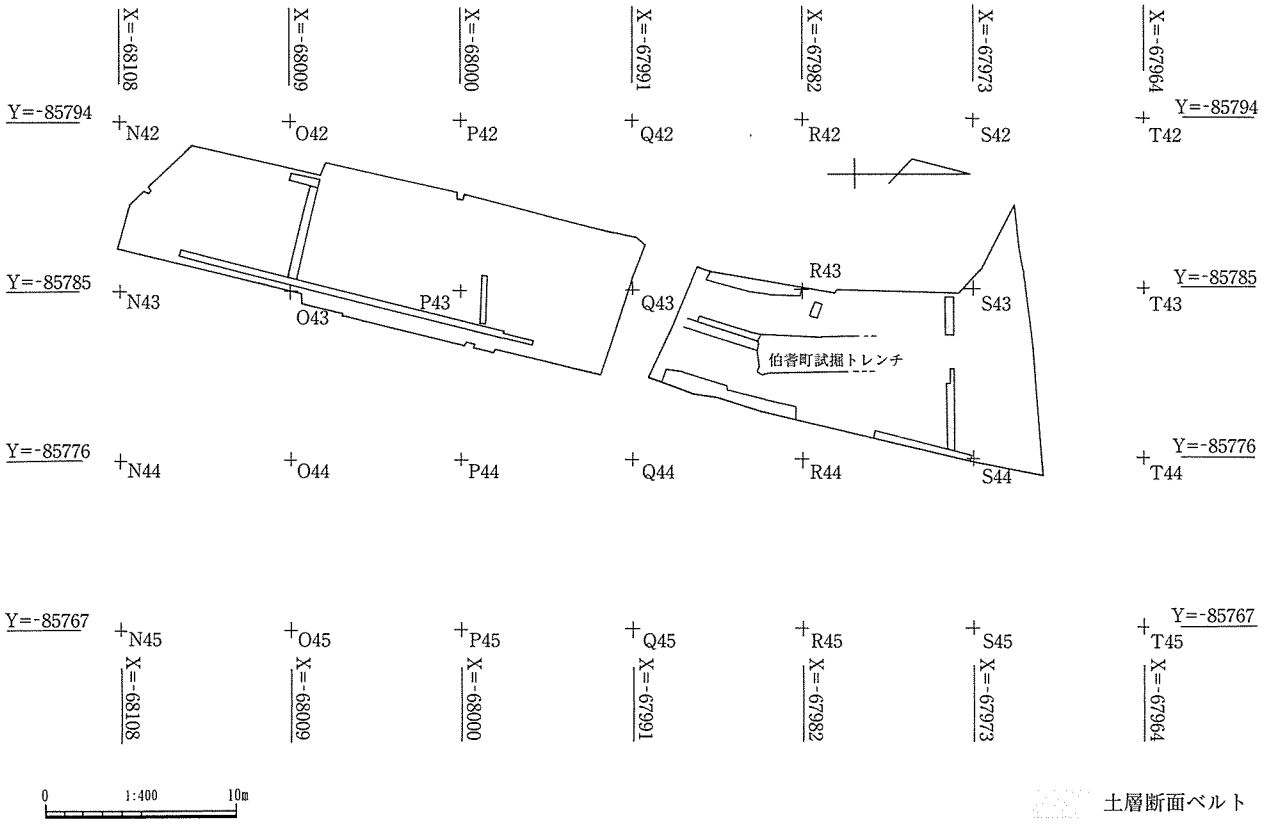
Ⅴ層：黒褐色シルト

Ｑ43グリッドにわずかに残存する。上面で古代の遺構を検出した。遺物は出土していない。

Ⅵ層：明褐色粘土

Ⅶ～Ⅺ層：ローム

色調により６層に分けられる。Ⅶ層が明褐色、Ⅷ層が淡褐色、Ⅸ層がにぶい褐色、Ⅹ層が明黄褐色、Ⅺ層が明褐色を呈する。



第40図　グリッド、およびトレンチ配置図

第２節　古代の調査

１．概要（第41・42図　第２表）

掘立柱建物３棟、溝２基、ピット列１基、ピット２基を検出した。調査区内は削平が著しく、一部を除き、ローム（Ⅵ・Ⅸ層）上面で遺構を検出した。Ａ区に堆積するⅠ層は当該期の遺物包含層である。Ｂ区に堆積するⅣ・Ⅴ層は削平により、一部のみで確認された。Ａ区Ｒ42・43グリッド周辺ではⅡ層上面、Ｂ区Ｑ42・43グリッド周辺ではⅤ層上面で遺構を検出した。検出面の標高はＡ区で約55.30～55.50m、Ｂ区で約55.50～55.80mである。

検出した遺構のうち、ＳＢ２・３は大型の掘立柱建物で、ＳＢ２は東西棟（桁行１間以上、梁行２間）、ＳＢ３は南北棟（桁行６間、梁行４間）の廂付建物である。両棟はＬ字状に並び、方位はほぼ真北をとる。両棟の東側の柱筋が通っており、棟間距離は約12.3mを測る。なお、建物の配置からＳＢ３の南側でも東西棟の存在が想起されたが、調査範囲内において建物は確認されていない。ＳＢ３はＳＢ１、ＳＤ１・２と重複し、それにより、遺構はＳＢ１→ＳＢ３→ＳＤ１→ＳＤ２の順に変遷する。遺構の方位はＳＢ２、３がほぼ真北を示すのに対してＳＢ１が12°東偏し、ＳＤ１・２は72°西偏する。

遺物はＳＤ１・２などの遺構、および包含層や撹乱土中から出土している。遺物の総数は極めて少ない。土器を中心に鍛冶滓などの鉄関連遺物も少量ながら出土している。土器は赤彩された土師器の皿・坏、須恵器坏が主体をなす。

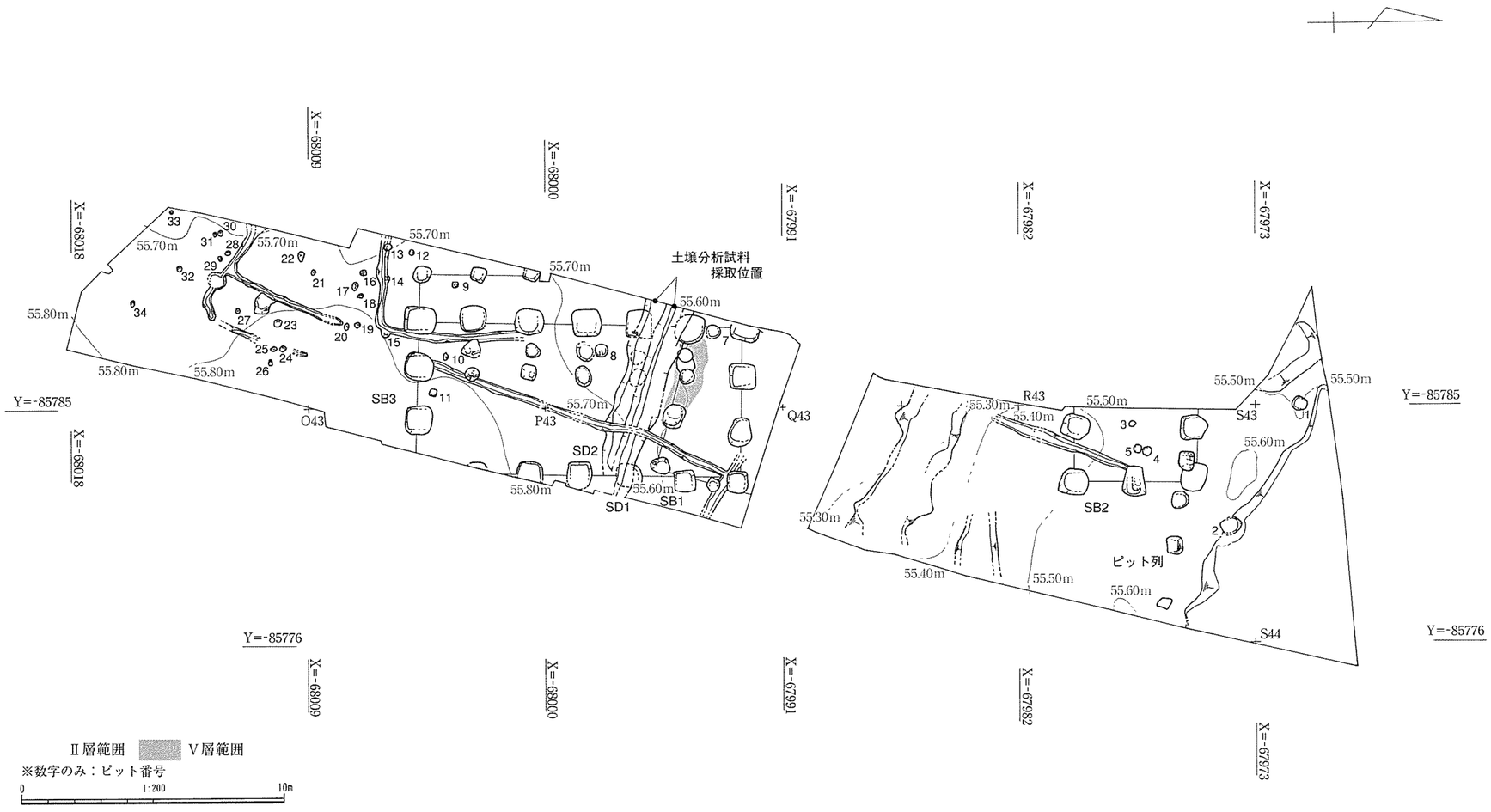
２．掘立柱建物

ＳＢ１（第43図　第３表　図版32）

Ｂ区Ｑ43・44グリッド、平坦面に位置する。北側は削平され、西側はＳＤ２、ＳＢ３に切られる。桁行３間（約6.0m）以上、梁行１間（約2.3m）以上の東西棟である。主軸はＮ－12°－Ｅである。Ｐ１、２には切り合いがみられ、建替えが行われた可能性がある。柱掘りかたは平面円形を呈す。検出面での規模は長軸が約51～92cm、短軸が約47～77cmを測る。Ｐ１～４の底面の標高は約54.82～55.03mである。柱間寸法は桁行が約2.0m、梁行が約2.3mである。Ｐ１では径約10cm、Ｐ２では径約15cmの柱痕跡が観察される。遺物は出土していない。ＳＢ３に切られることから、８世紀後半には廃絶されていたと想定される。

ＳＢ２（第44図　第４表　図版33～35）

Ａ区Ｓ44グリッド、平坦面に位置する。西側は調査区外となり、未検出である。桁行１間（約2.0m）以上、梁行２間（約4.5m）の東西棟である。Ｐ３、４はⅡ層上面で検出した。Ｐ１はピット列１Ｐ１に切られる。主軸はＮ－１°－Ｅである。柱掘りかたは平面方形を呈し、検出面での規模は長辺が約1.03～1.1m、短辺が約78～97cmを測る。深さは約85cm～1.11mを測り、Ｐ３～５の底面の標高は約54.58m～54.67mである。柱間寸法は梁行が約2.1m～2.4m、桁行が約2.0mである。Ｐ１～４の土層断面では径20cm前後の柱痕跡が観察される。Ｐ２の底面には基礎固め（11層）の堆積がみられ、その上に柱材が据えられたと考えられる。11層上面の標高は約54.62mである。Ｐ５の２層は、柱抜き取り痕跡と思われる。なお、建替えの痕跡はみられない。遺物は土器小片が数点出土している。すべて柱掘りかた埋土からの出土である。Ｐ２の柱掘りかた埋土から出土した157は、


X=-68018
X=-68009
X=-68000
X=-67991
X=-67982
X=-67973
Y=-85785
Y=-85776
55.70m
55.80m
55.60m
55.50m
55.40m
55.30m
土壌分析試料
採取位置
SB3
SB1
SB2
SD1
SD2
P43
O43
Q43
R43
S43
S44
ピット列
Ⅱ層範囲
Ⅴ層範囲
※数字のみ：ピット番号
0
1:200
10m

第41図　遺構分布図

第２表　遺構一覧表

掘立柱建物

〔　〕内は推定値

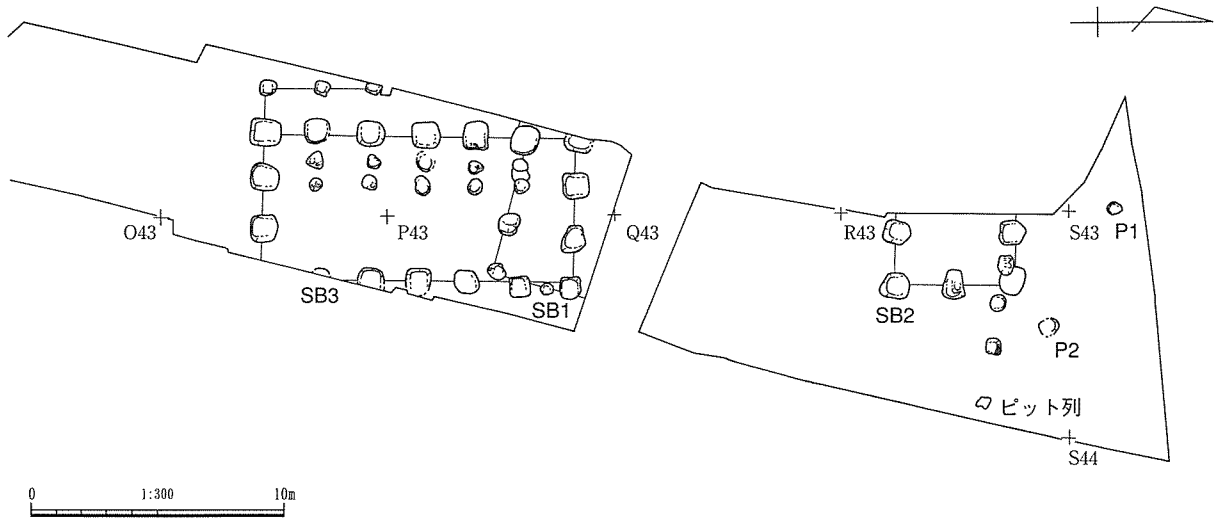
遺構名	建物区分	規模		面積	主軸方位	時期	備考
		桁行	梁行				
ＳＢ１	側柱建物	３間（6.0m）以上	｛２間(4.6m)｝	－	Ｎ－12°－Ｅ	８Ｃ代	
ＳＢ２	側柱建物	２間（4.0m）以上	２間(4.5m)	－	Ｎ－１°－Ｅ	８Ｃ後半～９Ｃ前半	
ＳＢ３	側柱建物	建物全体（廂を含む）		建物全体（廂を含む）	Ｎ－１°－Ｅ	８Ｃ後半～９Ｃ前半	西面に廂あり
		６間（12.3m）	｛４間(5.7m)｝	{70.1㎡}			
		身舎のみ		身舎のみ			
		６間（12.3m）	３間(3.9m)	50.0㎡			

溝

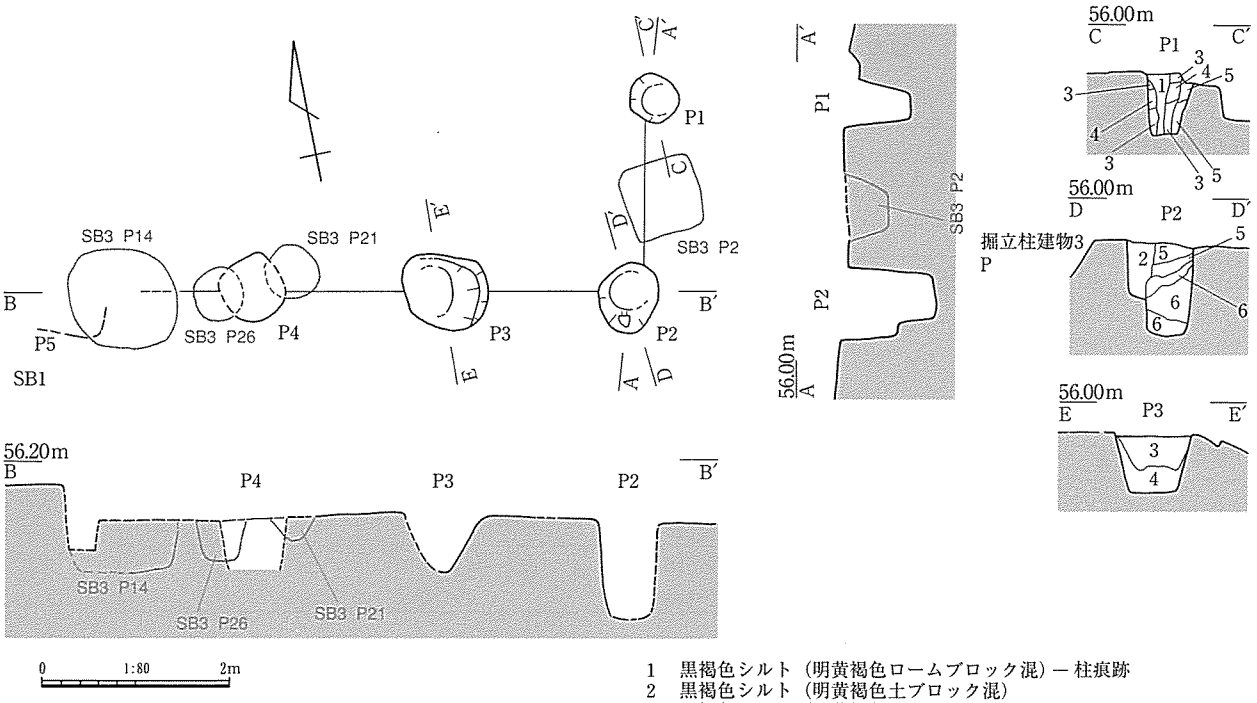
遺構名	規模			底面の標高	主軸方位	時期	備考
	長さ	幅	深さ				
ＳＤ１	7.6m以上	1.5～1.9m	32cm	東端：55.5m 西端：55.5m	Ｎ－72°－Ｗ	９Ｃ前半	
ＳＤ２	7.6m以上	0.8～1.1m	57cm	東端：55.4m 西端：55.1m	Ｎ－72°－Ｗ	９Ｃ後半～ 10Ｃ前半	

ピット列

遺構名	規模	主軸	時期	備考
ピット列	３間(5．6m)以上	Ｎ－80°－Ｗ	古代	



第42図　掘立柱建物分布図



第43図　ＳＢ１

第３表　ＳＢ１計測表

柱穴

No.	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	備　考
Ｐ１	51	47	68	54.82	重複
Ｐ２	66	66	105	54.93 54.52	重複
Ｐ３	92	77	64	55.03	
Ｐ４	67	－	－	－	検出のみ ＳＢ３Ｐ21・26と重複
Ｐ５	－	－	－	－	検出のみ （一部トレンチ掘削）

柱痕跡

No.	柱痕跡直径 (cm)
Ｐ１	10
Ｐ２	15
Ｐ３	－
Ｐ４	－
Ｐ５	－

柱間寸法

No.	柱間寸法 (m)
Ｐ１－Ｐ２	2.3
Ｐ２－Ｐ３	2.0
Ｐ３－Ｐ４	2.0
Ｐ４－Ｐ５	－

第４表　ＳＢ２計測表

柱穴

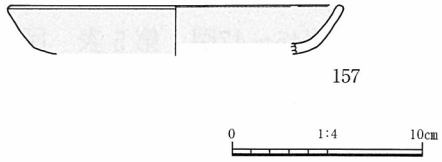
No.	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深　さ (cm)	底面の標高 (m)	備　考
Ｐ１	110	95	－	－	検出のみ ピット列Ｐ１と重複
Ｐ２	113	78	111	54.48	土師器皿(157)出土
Ｐ３	103	97	91	54.63	
Ｐ４	108	87	85	54.67	
Ｐ５	106	95	99	54.58	

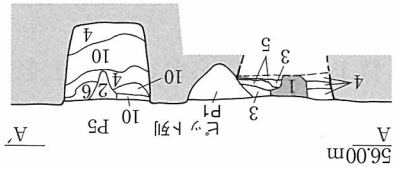
柱痕跡

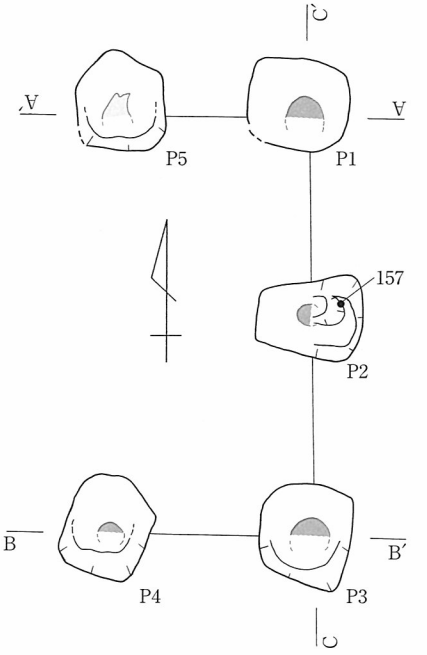
No.	柱痕跡直径 (cm)
Ｐ１	19
Ｐ２	21
Ｐ３	24
Ｐ４	20
Ｐ５	－

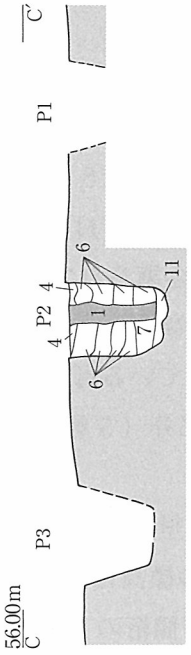
柱間寸法

No.	柱間寸法 (m)
Ｐ１－Ｐ２	2.1
Ｐ２－Ｐ３	2.4
Ｐ３－Ｐ４	2.0
Ｐ５－Ｐ１	2.0
Ｐ１－Ｐ３	4.5
Ｐ４－Ｐ５	4.5







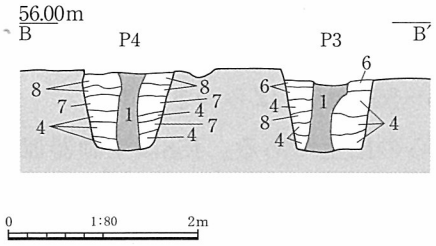


1　暗褐色シルト
（明黄褐色ロームブロック混、もろい）　柱痕跡

2　灰褐色シルト
（明黄褐色ロームブロック混）　柱抜取り穴

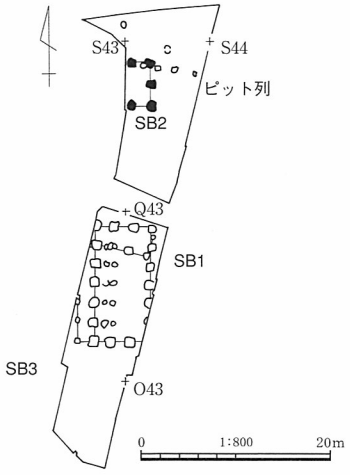
3　黒褐色シルト
（明黄褐色ロームブロック混）
4　にぶい褐色シルト
（明黄褐色ロームブロック混）
5　にぶい褐色シルト
6　にぶい褐色シルト
（黒褐色シルト・明黄褐色ロームブロック混）
7　暗褐色シルト（明黄褐色ロームブロック混）
8　灰褐色シルト（明黄褐色ロームブロック混）
9　暗褐色シルト
10　暗褐色シルト
（黒褐色シルト・明黄褐色ロームブロック混）
柱掘りかた埋土

11　にぶい褐色シルト
（明黄褐色ロームブロック混、しまる）　基礎固め

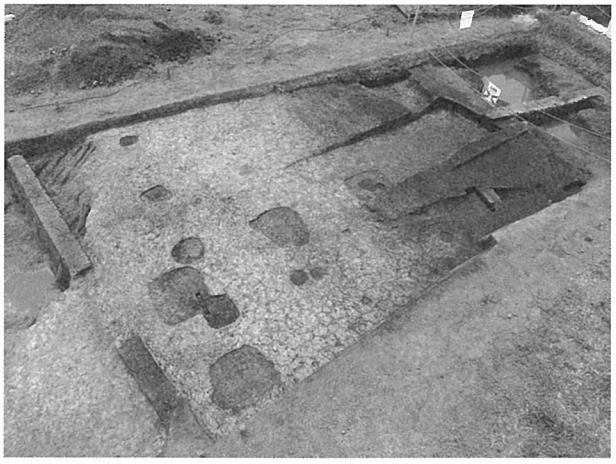


柱痕跡

柱抜取り穴



SB2位置図



ＳＢ２検出状況（北西から）

第44図　ＳＢ２、および出土遺物

内外面共に赤色塗彩が施された土師器皿である。本遺構の時期は出土遺物とＳＢ３の時期から８世紀後半～９世紀前半と推定される。

ＳＢ３（第45～47図　第５表　図版34－２～42－２）

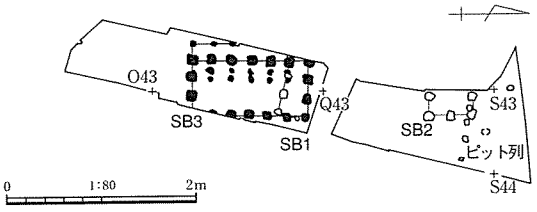
Ｂ区Ｐ43・44、Ｑ43・44グリッド、平坦面に位置する。北側はＳＤ１・２に切られ、ＳＢ１を切る。南北棟で西側には廂が付く。東側の廂の有無については調査区外のため、確認できていない。建物の規模は桁行６間（約5.7m）、梁行４間（約12.3m）で、身舎内の床面積は約70.1㎡となる。主軸の方位はＮ－１°－Ｅである。

入側柱Ｐ１～17の柱掘りかたは平面方形を呈し、検出面での規模は長辺が約82cm～1.2m、短辺が約75cm～1.08mを測る。深さは約35～89cmを測り、底面の標高は54.74～55.12mである。柱間寸法は桁行が2.0～2.1m、梁行が約1.9～2.0mである。Ｐ５・７～９・12・16・17の土層断面では径約20～27cmの柱痕跡（１層）が観察される。Ｐ４・10・11・13には柱抜き取り痕跡（２～４層）がみられ、柱は掘りかたをほとんど壊すことなく抜き取られている。また、Ｐ12は柱穴が重複しており、新段階の柱掘りかたが掘削された痕跡が平面・断面ともに確認できる。Ｐ13についても切り合い痕跡（22層）がわずかに確認され、柱穴が重複している可能性はあるが断定はできない。Ｐ１・２・16・17の底面には灰白色を呈した円形の変色部分（５層）が検出され、柱のあたりと推察される。変色部分は直径が約20～23cmを測る。

廂となるＰ18～20の柱掘りかたは平面方形を呈し、検出面での規模は長辺が約57～67cm、短辺が約52～64cmを測る。深さは約44～66cm、底面の標高は約55.04～55.31mである。柱間寸法はＰ18－19で約2.2m、Ｐ19－20で約2.1mである。身舎西側桁のＰ９～11との柱間寸法は約1.7～1.9mである。柱痕跡の直径はＰ19が16cm、Ｐ20が20cmであり、Ｐ18では柱抜き取り痕が確認できる。

身舎内の西側で検出されたＰ21～30は梁行方向で柱筋が通る。検出面での規模は長軸約51～75cm、短軸約46～63cmを測る。深さは約15～49cm、底面の標高は約55.16～55.58mとばらつきがある。

遺物は土器小片が数点出土している。すべて柱掘りかた埋土からの出土である。158は土師器皿、159は外面赤色塗彩の土師器坏、160は把手もしくは支脚であろうか。161・162は須恵器坏である。161は体部がやや内湾し、口縁端部は僅かに外反する。162は口縁端部の屈曲が甘い。出土遺物とＳＤ２に切られることから判断して、本遺構の時期は８世紀後半～９世紀前半と推定される。



第45図　ＳＢ３位置図

SB3　土色

1	黒褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	柱痕跡
2	黒褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	柱抜取り穴
3	灰褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	柱抜取り穴
4	にぶい褐色シルト（黒褐色シルト・明黄褐色ブロック混）	柱抜取り穴
5	明白褐色ローム（変色部分）	柱のあたり
6	黒褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	柱掘りかた埋土
7	にぶい褐色シルト（黒褐色シルト・明黄褐色ブロック混）	柱掘りかた埋土
8	にぶい褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	柱掘りかた埋土
9	にぶい褐色シルト（黒褐色シルト混）	柱掘りかた埋土
10	にぶい褐色シルト	柱掘りかた埋土
11	灰褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	柱掘りかた埋土
12	灰褐色シルト	柱掘りかた埋土
13	灰褐色シルト（黒褐色シルト・明黄褐色ブロック混）	柱掘りかた埋土
14	明黄褐色シルト（灰褐色シルト混）	柱掘りかた埋土
15	にぶい褐色シルト（黒褐色シルト混、しまる）	基礎固め
16	にぶい褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	基礎固め
17	にぶい褐色シルト（黒褐色シルト・明黄褐色ブロック混、しまる）	基礎固め
18	黒褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	基礎固め
19	にぶい褐色シルト	基礎固め
20	黒褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	古段階の柱掘りかた埋土
21	にぶい褐色シルト（黒褐色シルト・明黄褐色ブロック混）	古段階の柱掘りかた埋土
22	灰褐色シルト（明黄褐色ブロック混）	古段階の柱掘りかた埋土

56.40m
造成土（真砂土）
SD2
SD1
耕作土
撹乱
56.00m
P15
P14
P26
P13
P10
P12
P11
P9
P21
P22
P23
P24
P25
P27
P28
P29
P30
P18
P19
P20
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P16
P17
P28
P23
P29
P24
P30
P25
P18
P19
P20
P9
P8
P7
0
1:80
2m
柱痕跡
修復痕跡
柱抜取り穴
柱のあたり

第46図　ＳＢ３

第５表　ＳＢ３計測表

柱穴

No.	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深　さ (cm)	底面の標高 (m)	備　考
Ｐ１	83	75	39	55.10	
Ｐ２	82	79	49	55.04	
Ｐ３	96	87	51	55.12	ＳＤ１・２と重複
Ｐ４	100	89	69	55.10	土製品(160)出土
Ｐ５	—	101	70	55.09	須恵器(162)出土
Ｐ６	—	—	—	—	
Ｐ７	104	103	73	55.07	
Ｐ８	110	108	87	54.92	
Ｐ９	122	108	81	54.96	
Ｐ10	101	98	87	54.90	
Ｐ11	109	98	80	54.96	
Ｐ12	112	101	89	54.80	柱穴重複、Ｆ15出土
Ｐ13	112	93	72	54.96	ＳＤ１・２と重複
Ｐ14	112	104	46	55.05	ＳＤ１と重複、土師器坏(159)出土
Ｐ15	—	106	58	54.74	土師器皿(158)出土
Ｐ16	103	97	43	54.97	
Ｐ17	111	88	35	55.11	須恵器坏(161)出土
Ｐ18	—	52	66	55.04	
Ｐ19	57	55	58	55.17	
Ｐ20	67	64	46	55.31	
Ｐ21	57	56	26	55.35	ＳＢ１Ｐ４と重複
Ｐ22	68	48	15	55.29	ＳＤ１・２と重複
Ｐ23	75	57	19	55.53	
Ｐ24	59	53	28	55.49	
Ｐ25	56	46	19	55.58	
Ｐ26	58	55	49	55.35	ＳＤ２、ＳＢ１Ｐ４と重複
Ｐ27	51	46	42	55.16	ＳＤ１・２と重複
Ｐ28	57	57	25	55.41	
Ｐ29	54	46	18	55.57	
Ｐ30	72	63	23	55.53	

柱痕跡

No.	柱痕跡直径 (cm)
P5	24
P7	24
P8	27
P9	25
P10	22
P12	20
P16	24
P17	24
P19	16
P20	20

No.	柱のあたり直径 (cm)
Ｐ１	20
Ｐ２	23
P16	23
P17	20

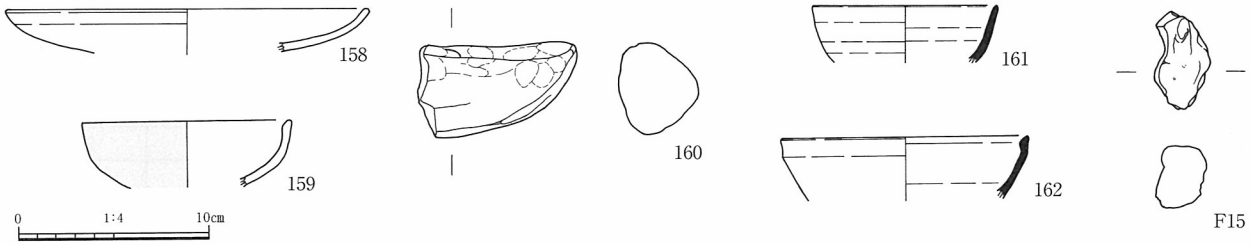
柱間寸法

No.	柱間寸法 (m)
Ｐ１－Ｐ２	2.1
Ｐ２－Ｐ３	—
Ｐ３－Ｐ４	—
Ｐ４－Ｐ５	2.1
Ｐ５－Ｐ６	—
Ｐ６－Ｐ７	2.0
Ｐ７－Ｐ８	1.9
Ｐ８－Ｐ９	2.0
Ｐ９－Ｐ10	2.1
Ｐ10－Ｐ11	2.1
Ｐ11－Ｐ12	2.0

No.	柱間寸法 (m)
Ｐ12－Ｐ13	—
Ｐ13－Ｐ14	—
Ｐ14－Ｐ15	—
Ｐ15－Ｐ16	1.9
Ｐ16－Ｐ17	1.9
Ｐ１－Ｐ15	—
Ｐ２－Ｐ14	—
Ｐ３－Ｐ13	—
Ｐ４－Ｐ12	5.8
Ｐ５－Ｐ11	5.7
Ｐ６－Ｐ10	—

No.	柱間寸法 (m)
Ｐ９－Ｐ20	1.8
Ｐ10－Ｐ19	1.7
Ｐ11－Ｐ18	1.9

No.	柱間寸法 (m)
Ｐ18－Ｐ19	2.2
Ｐ19－Ｐ20	2.1



第47図　ＳＢ３出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
157	44	SB2 P2 柱掘りかた 埋土上層	土師器 皿	＊17.3 －	△2.6	外面:体部回転ナデ 赤色塗彩 内面:体部回転ナデ 赤色塗彩	密 砂粒少量 良	外面:にぶい黄橙色 橙色 灰色 内面:橙色 赤褐色	
158	47	SB3 P15 柱掘りかた 埋土	土師器 皿	＊18.6 －	△2.3	外面:磨耗のため調整不明 内面:磨耗のため調整不明	やや密 やや良	外面:にぶい橙色 橙色 内面:橙色	
159	47	SB3 P14 柱掘りかた 埋土	土師器 坏	＊10.7 －	△3.5	外面:磨耗のため調整不明 赤色塗彩 内面:磨耗のため調整不明	密 砂粒多量 やや良	橙色	
161	47	SB3 P17 柱掘りかた 埋土	須恵器 坏	＊9.7 －	△3.0	外面:体部回転ナデ 内面:体部回転ナデ 自然釉	密 砂粒少量 良	灰色	
162	47	SB3 P5 柱掘りかた 埋土	須恵器 坏	＊12.8 －	△3.4	外面:体部回転ナデ 内面:体部回転ナデ	密 良	灰色	

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	最大幅 長さ(cm)	最大厚	特徴	胎土 焼成	色調	備考
160	47	SB3 P4 柱掘りかた 埋土	土製品 把手又は土製支脚？	4.6 8.4	5.8	ナデ 指頭圧痕	密 砂粒少量 良	橙色 灰黄褐色 灰褐色	

ＳＢ３Ｐ14遺物出土状況（北東から）

ＳＢ３Ｐ16遺物出土状況（南東から）

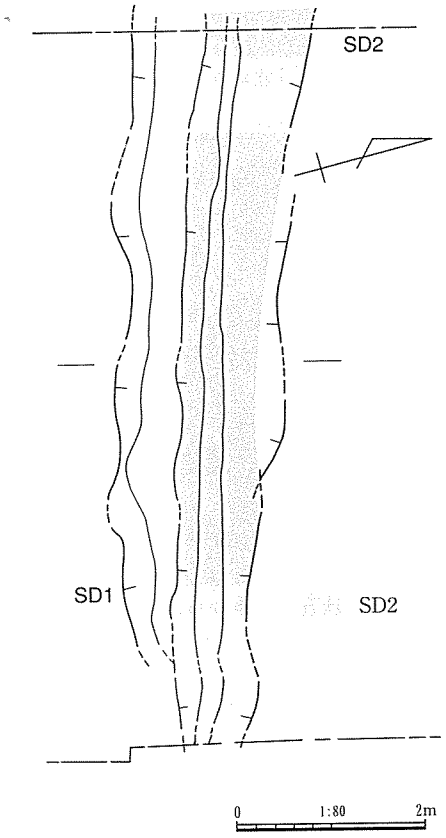
３．溝

ＳＤ１（第48～51図　図版43～46）

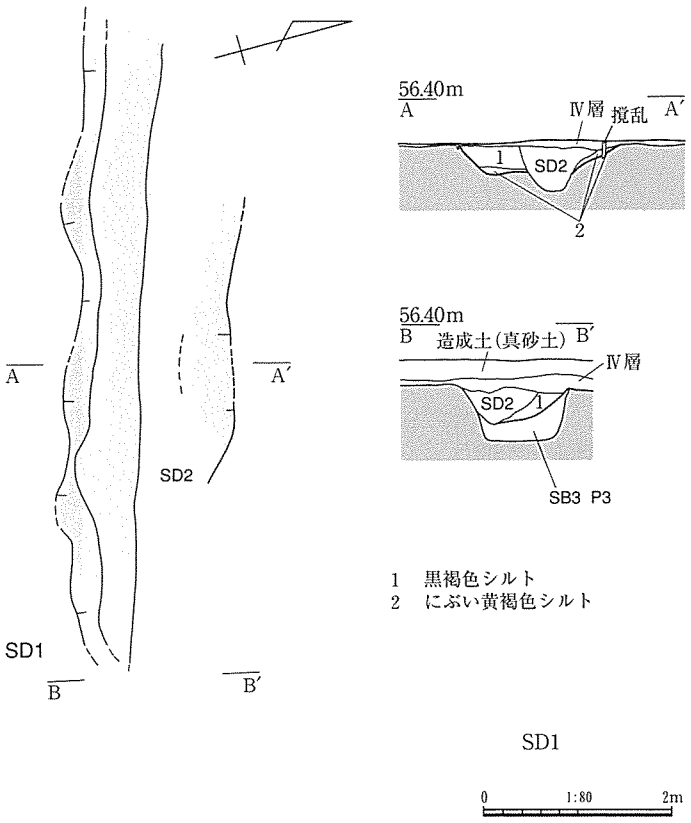
Ｂ区Ｑ43・44グリッド、平坦面に位置し、東西両端は調査区外へと延びる。中央部はＳＤ２に切られ、ＳＢ１・３を切る。主軸はＮ－72°－Ｗである。検出面での幅は約1.8m、深さは東側で約29cm、西側で約16cmである。底面の標高は概ね55.5mであり、東西で比高差は認められない。断面形は逆台形を呈す。埋土は主に黒褐色シルト（１層）が堆積する。

土層断面から埋土（１層）をサンプリングし珪藻分析を行った。分析の結果、保存状態の良い珪藻化石が多数検出された。検出された珪藻は陸生珪藻が非常に少なく、中～下流性河川指標種群を含む真＋好流水性種が種数・割合とも多い。よって、溝内が流水の環境下にあった可能性が指摘された（第６章第１節参照）。

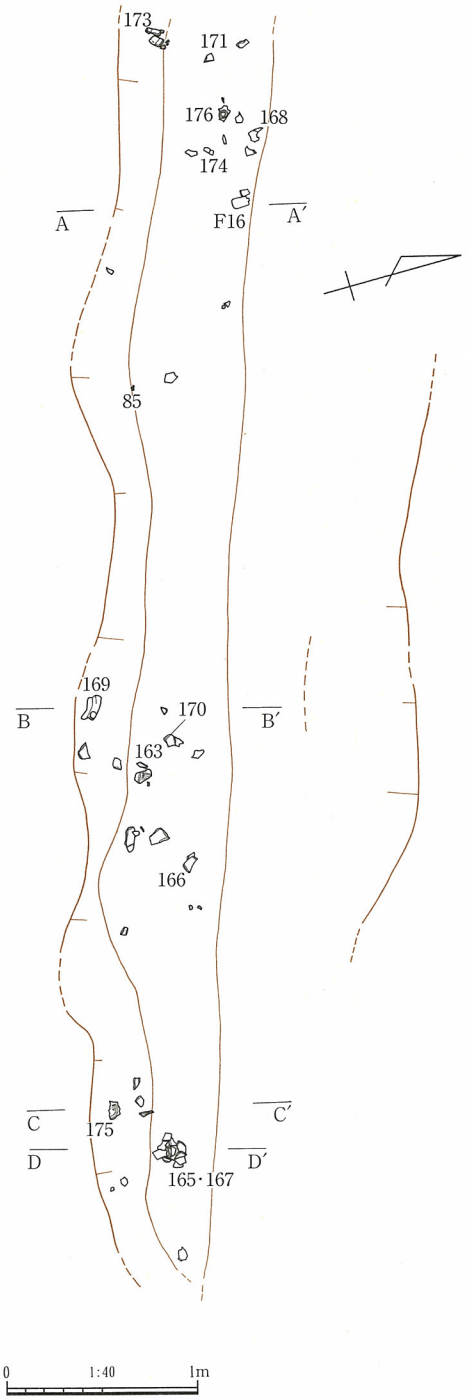
遺物は、南側を中心にすべて１層から出土している。ほぼ完存、または1/2程度に復元できる個体が数点みられ、広範囲に散乱することなく、比較的まとまりをもった出土状況を示す。163は赤彩が施された土師器皿、164～166は赤彩の土師器坏で、口縁端部はやや外反する。167は土師器高台付坏で赤色塗彩が施される。168は土師器高坏の筒部、169・170は土師器甕の口縁部片である。172～174は体部がやや内湾して立ち上がる須恵器坏である。173は焼成がやや不良で、底部外面は荒いナデ調整となる。175は底部外面に静止糸切りの痕跡が残る。Ｆ16は扁平な板状の鉄製品である。出土遺物より本遺構は９世紀前半以降に埋没したと想定される。

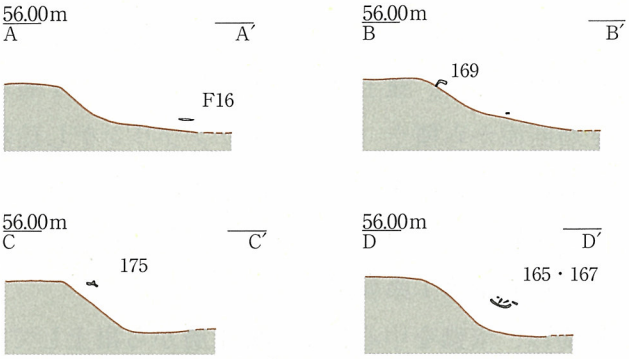


第48図　ＳＤ１・２



第49図　ＳＤ１

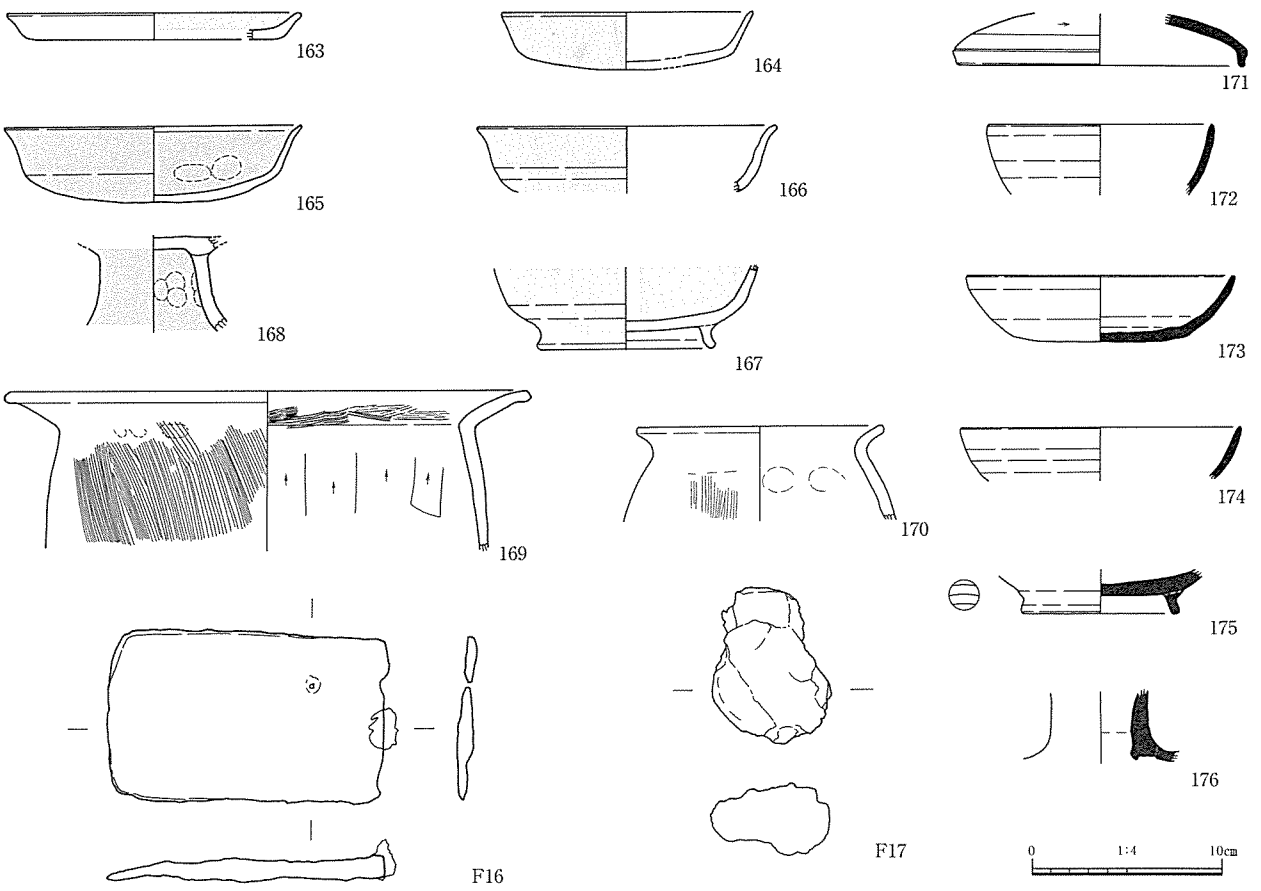




ＳＤ１遺物出土状況（北東から）

ＳＤ１Ｆ16出土状況（北東から）

第50図　ＳＤ１遺物出土状況



第51図　ＳＤ１出土遺物

ＳＤ２（第52図　図版46－５・６、47－１～４）

Ｂ区Ｑ43・44グリッド、平坦面に位置し、東西両端は調査区外へと延びる。ＳＢ２・３、ＳＤ１を切る。ＳＤ１に並行し、主軸はＮ－72°－Ｅである。検出面での幅は東側で90cm、西側で約1.1m、深さは東側で約36cm、西側で約57cmである。底面の標高は東端で約55.4m、西端で約55.1mであり、比高差が約30cmある。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰褐色シルトである。

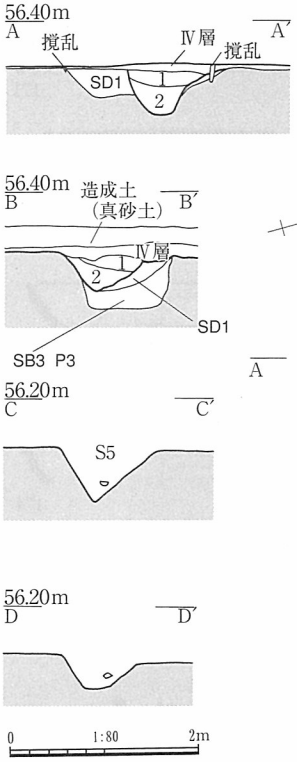
土層断面から埋土をサンプリングし珪藻分析を行った。分析の結果、１・２層ともに中～下流性河川指標種群を含む好流水性種・流水不定性種が認められ、ＳＤ１に群集が近似することが判明した。よって、本遺構は溝内が流水の環境下にあった可能性が指摘された（第６章第１節参照）。

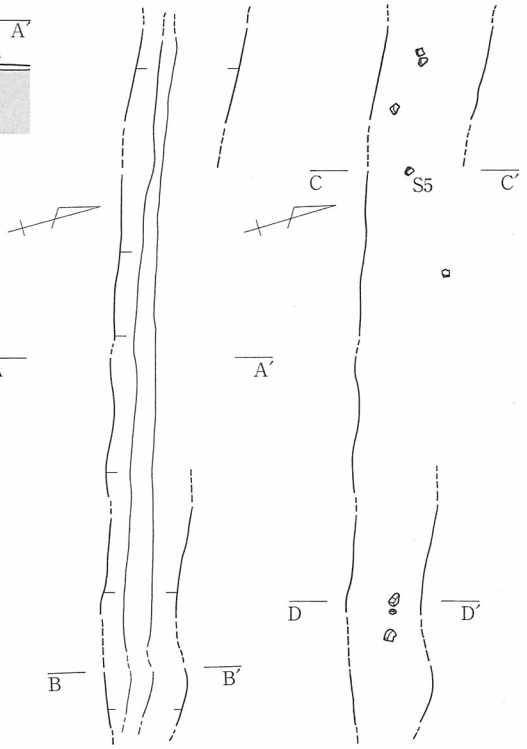
遺物は破片資料が多く、量も少ない。177は土師器皿、178は土師器坏で赤色塗彩が施される。移動式竈片179は基部が残存し、付け庇のものである。181は須恵器坏で口縁部が直線的に外傾し、焼成はやや不良である。埋土下層から底面直上にかけてはＳ５砥石と拳大の自然礫７点が出土している。本遺構は出土遺物から９世紀後半～10世紀前半に埋没したと考えられる。

４．ピット

ピット列（第53図　第６表　図版42－３～７）

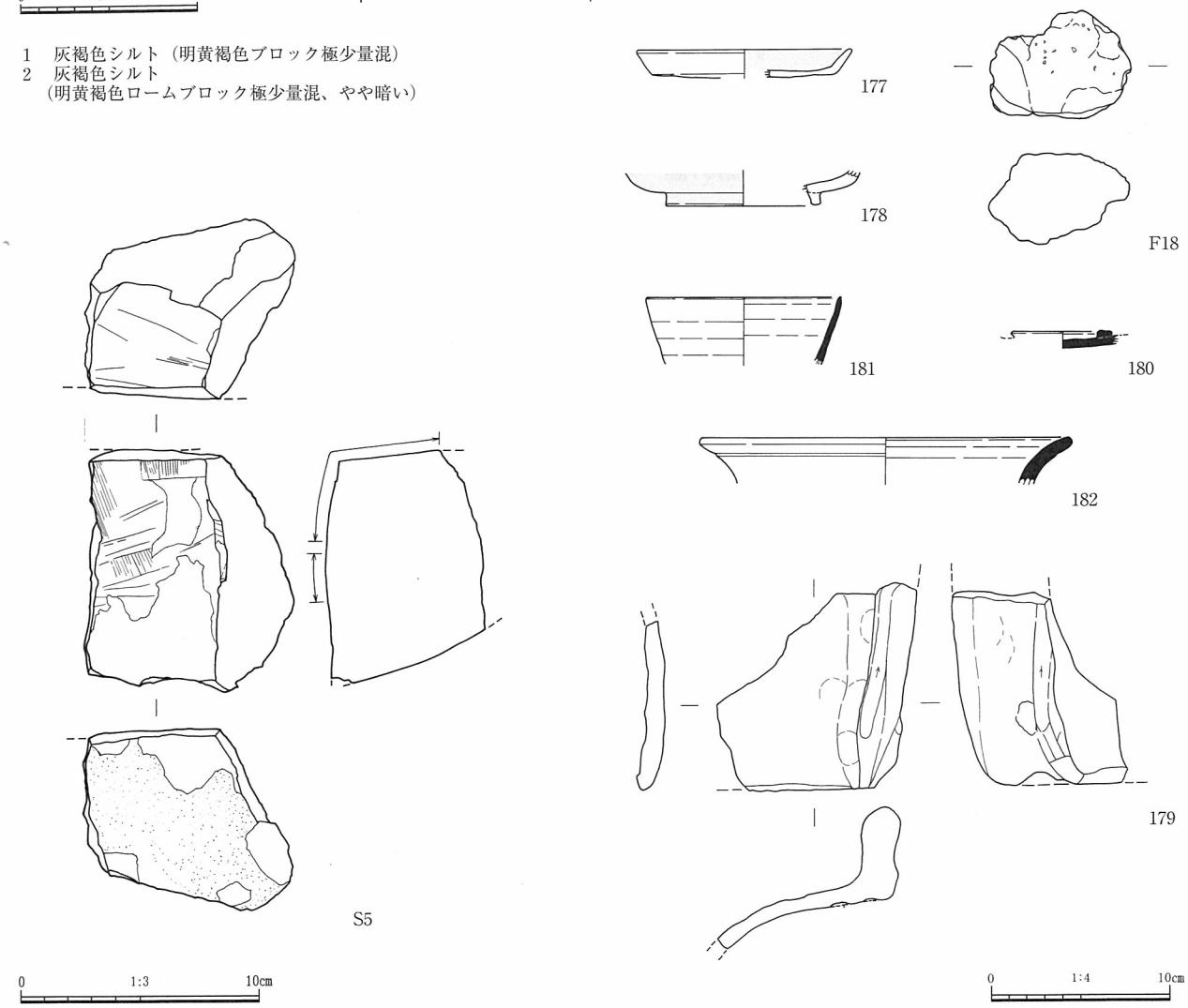
Ａ区Ｓ44グリッド、平坦面に位置する。直線的に並ぶ４基のピットを検出した。北側は撹乱が著しく、関連するピット等の遺構の有無は分からない。Ｐ１はＳＢ２Ｐ１を切る。主軸はＮ－80°－Ｗである。掘りかたは平面方形、または円形を呈し、Ｐ１～３の検出面での規模は長軸が約65～71cm、短軸約60cmを測る。深さは約31～51cmを測り、底面の標高は約55.06m～55.25mである。Ｐ４





ＳＤ２礫出土状況（西から）

1　灰褐色シルト（明黄褐色ブロック極少量混）
2　灰褐色シルト
（明黄褐色ロームブロック極少量混、やや暗い）



第52図　ＳＤ２、および出土遺物

＊復元値　△残存値

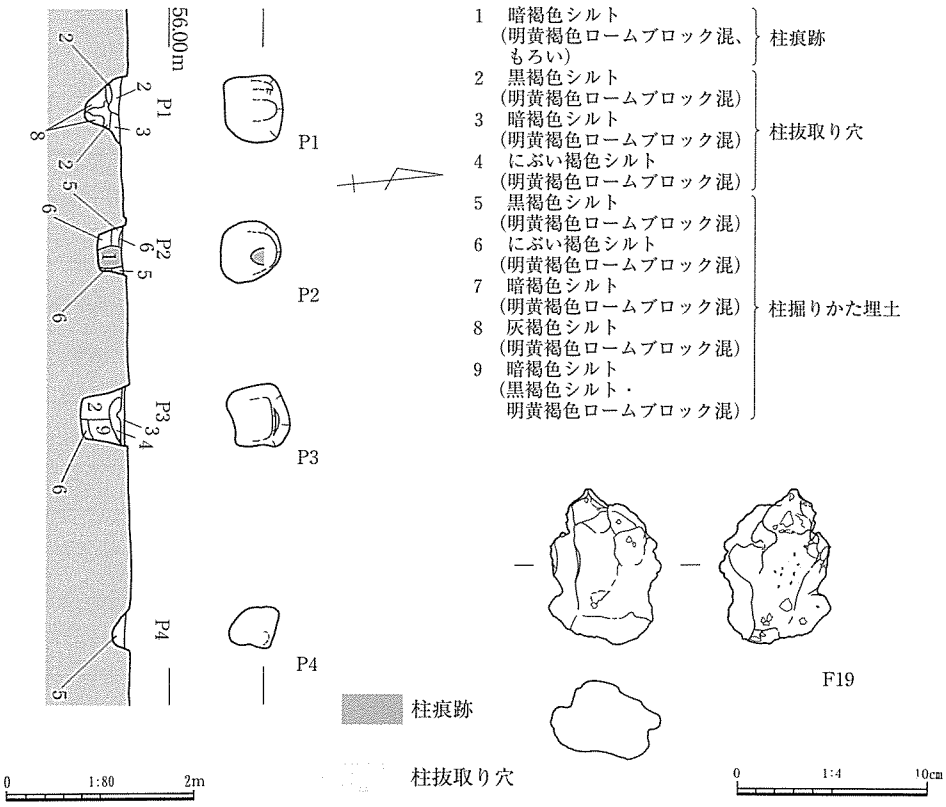
遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
163	51	SD1 埋土中	土師器 皿	＊15.4 －	△1.5	外面:回転ナデ　底部調整不明　磨耗著しい 内面:回転ナデ　赤色塗彩	やや密 砂粒多量 やや良	内面:浅黄橙色 黒褐色 外面:浅黄橙色 にぶい赤褐色	
164	51	SD1 埋土中	土師器 坏	＊13.0 －	3.1	外面:調整不明　赤色塗彩　磨耗著しい 内面:磨耗のため調整不明	やや密 やや良	外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙色 赤褐色	
165	51	SD1 埋土中	土師器 坏	15.5 －	4.1	外面:回転ナデ　底部ヘラケズリ　赤色塗彩 内面:回転ナデ　一部、指頭圧痕　赤色塗彩　磨耗著しい	密　砂粒小量 良	明赤褐色 にぶい黄橙色	
166	51	SD1 埋土中	土師器 坏	＊15.6 －	△3.5	外面:回転ナデ　底部調整不明　赤色塗彩　磨耗著しい 内面:磨耗のため調整不明	やや密 砂粒少量 やや粗	明赤褐色 橙色 にぶい黄橙色	
167	51	SD1 埋土中	土師器 高台付坏	－ ＊9.0	△4.4	外面:体部・高台回転ナデ　底部ナデ　赤色塗彩 内面:ナデ　赤色塗彩　磨耗著しい	密 やや良	明赤褐色　浅黄橙色 橙色	
168	51	SD1 底面直上	土師器 高坏	－ －	△5.0	外面:坏部・脚部ナデ　赤色塗彩　磨耗著しい 内面:坏部調整不明　赤色塗彩 脚部ナデ　指頭圧痕　赤色塗彩 坏部・脚部磨耗著しい	やや密 砂粒少量 やや粗	赤褐色 橙色 にぶい黄橙色	脚部
169	51	SD1 埋土中	土師器 甕	＊27.2 －	△8.4	外面:口縁部ナデ　体部ハケ 内面:口縁部ハケ後ナデ　体部ケズリ	やや密 砂粒少量 やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	
170	51	SD1 底面直上	土師器 甕	＊12.7 －	△5.0	外面:口縁部ナデ　体部ハケ 内面:口縁部・体部ナデ	密　砂粒小量 良	黒褐色	
171	51	SD1 埋土中	須恵器 蓋	＊15.0 －	△2.7	外面:天井部ヘラケズリ　口縁部回転ナデ 内面:天井部・口縁部回転ナデ	密　砂粒小量 良	灰色	
172	51	SD1 埋土中	須恵器 坏	＊11.7 －	△3.3	回転ナデ	密　砂粒小量 良	灰色	
173	51	SD1 埋土中	須恵器 坏	＊14.1 －	3.6	外面:口縁部・体部回転ナデ 底部ヘラ切り後荒いナデ 内面:口縁部・体部回転ナデ 底部ナデ	やや密 やや良	灰白色 灰色	
174	51	SD1 埋土中	須恵器 坏	＊14.8 －	△2.8	回転ナデ	やや密 軟	白灰色	
175	51	SD1 埋土中	須恵器 高台付坏	－ ＊7.9	△1.6	外面:体部回転ナデ　底部静止糸切り 内面:ナデ	密　砂粒小量 良	灰色	
176	51	SD1 埋土中	須恵器 壺	－ －	△3.8	外面:高台回転ナデ 内面:頸部回転ナデ 頸部から肩部ケズリ　肩部ナデ	密 砂粒小量 良	外面:赤灰色 内面:灰色	
177	52	SD2 埋土中	土師器 皿	＊11.8 －	△1.6	外面:磨耗のため調整不明 内面:ナデ　赤色塗彩	やや密 砂粒多量 良	外面:にぶい橙色 内面:にぶい橙色 橙色　赤褐色	
178	52	SD2 埋土中	土師器 高台付坏	－ ＊8.0	△1.9	外面:ナデ？　赤色塗彩　磨耗著しい 内面:磨耗のため調整不明	密　砂粒小量 やや良	外面:橙色 内面:浅黄橙色	
179	52	SD2 埋土中	土製品 移動式竈	－ －	△11.5	体部外面:磨耗のため調整不明 体部内面:ケズリ？　磨耗著しい 基部内外面:ナデ　磨耗著しい 庇内外面:ナデ・ケズリ　磨耗著しい	密　砂粒多量 良	淡黄橙色	基部残存 付け庇
180	52	SD2 埋土上層	須恵器 坏蓋	つまみ径 4.7	△0.9	回転ナデ	密 良	灰色	輪状つまみ
181	52	SD2 埋土中	須恵器 坏	＊10.9 －	△3.8	回転ナデ	やや密 やや軟	灰色　灰黄色	
182	52	SD2 埋土中	須恵器 甕	＊20.7 －	△2.6	外面:回転ナデ　1条の沈線 内面:回転ナデ	密 良	灰黄褐色	

の検出面での規模は長軸が約45cm、短軸が約40cmを測る。深さは約18cmで、底面の標高は約55.40mである。各ピット間の距離は心々でＰ１－２、Ｐ２－３が約1.6m、Ｐ３－４が約2.4mとなる。Ｐ２の土層断面では径20cm前後の柱痕跡（１層）が観察され、Ｐ１・３の２～４層は柱を抜き取った痕跡の可能性が考えられる。遺物はＰ２より椀形鍛冶滓Ｆ19が出土した。土器は出土していない。本遺構はＳＢ２を切ることから、８世紀後半～９世紀前半以降に掘削されたものと想定している。

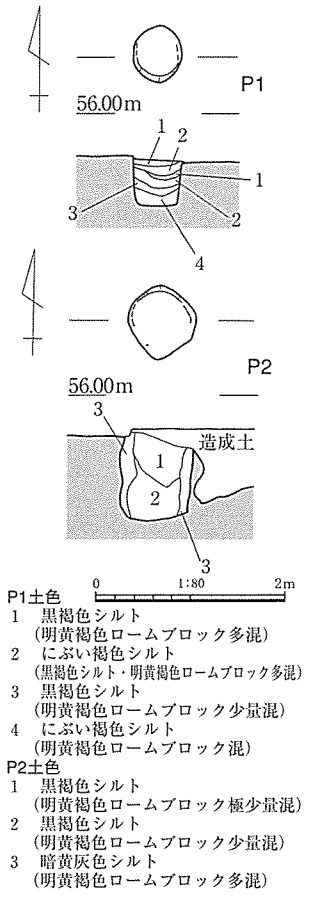
Ｐ１・２（第54・55図　第７表　図版42－８）

Ｓ44グリッド周辺では、ＳＢ２・ピット列とともに、Ｐ１～５を検出した。Ｐ１・２の規模はＳＢ１・ピット列のピットとほぼ同規模である。また、埋土の色調も類似することから、本節で扱うことにした。なお、Ａ区に検出したＰ３は埋土中より古代の遺物が出土しているが、ピットの規模が小規模であり、埋土の色調も異なることから第４章３節で扱っている。

Ｐ１はＡ区Ｔ44グリッド、平坦面に位置する。北東・南西側は削平が著しい。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸が約60cm、短軸約52cmを測る。深さは約54cmを測り、底面の標高は約55.02mである。柱痕跡は認められない。埋土は黒褐色シルトとにぶい褐色シルトが互層状に堆積



第53図　ピット列、および出土遺物



第54図　Ｐ１・２

第６表　ピット列計測表

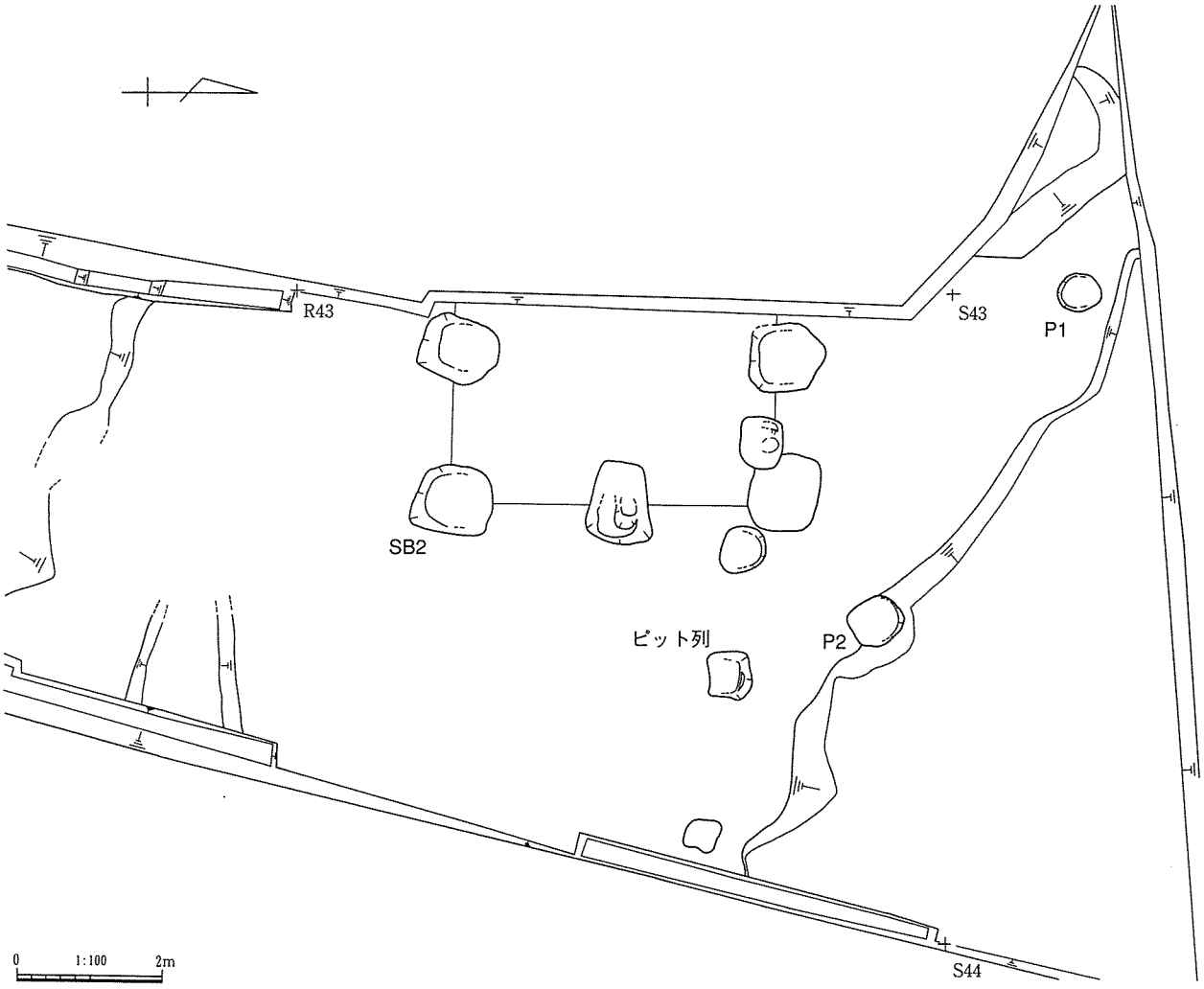
No.	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面の標高（m）	備考
Ｐ１	71	61	44	55.11	ＳＢ２Ｐ１と重複
Ｐ２	69	60	31	55.25	Ｆ19出土
Ｐ３	65	60	51	55.06	
Ｐ４	45	40	18	55.40	

第７表　Ｐ１・２計測表

遺構名	地区	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面の標高（m）	備考
P1	A区T43～44	60	52	54	55.02	
P2	A区S44	70	66	92	54.63	

している。遺物は出土していない。

Ｐ２はＡ区Ｓ44グリッド、平坦面に位置する。北側は削平を受ける。平面円形を呈し、検出面での規模は長軸が約70cm、短軸が約66cmを測る。深さは約92cmを測り、底面の標高は約54.63mである。埋土は黒褐色シルト、および暗黄灰色シルトが堆積する。遺物は出土していない。



第55図　Ｓ44グリッド周辺遺構図

５．当該期の出土遺物

包含層出土遺物（第56図　図版47－５・６）

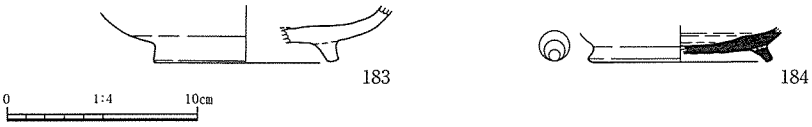
Ａ区南側は古代以前において狭小な谷地形をなしていたと考えられ、黒褐色シルト（Ⅰ～Ⅲ層）が堆積している。調査は古代の遺構面であるⅡ層上面までで終了しており、Ⅱ層以下は部分的なトレンチ調査にとどめた。トレンチ調査では、Ⅱ層以下の堆積層において遺物は出土していない。

Ⅰ層では土器が数点出土している。土師器183は赤色塗彩が施された高台付皿である。須恵器184は高台付坏の底部片である。底部外面にわずかに糸切りの痕跡が残る。

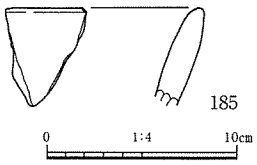
その他の出土遺物（第57・58図　図版48・49）

ここでは、Ｐ３（第４章第３節参照）、および造成土・撹乱土、近世以降の用水路(註1)（Ａ区Ｒ44グリッド）から出土した当該期の遺物を掲載した。Ｐ３から出土した185は土師器甕の口縁部片である。土師器坏底部と思われる。外面は赤色塗彩され、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。198は須恵器高台付坏であり、底部には回転糸切り痕がみられる。197は須恵器坏、199は須恵器高台付坏である。197・199とも淡い色調で、焼成が悪い。

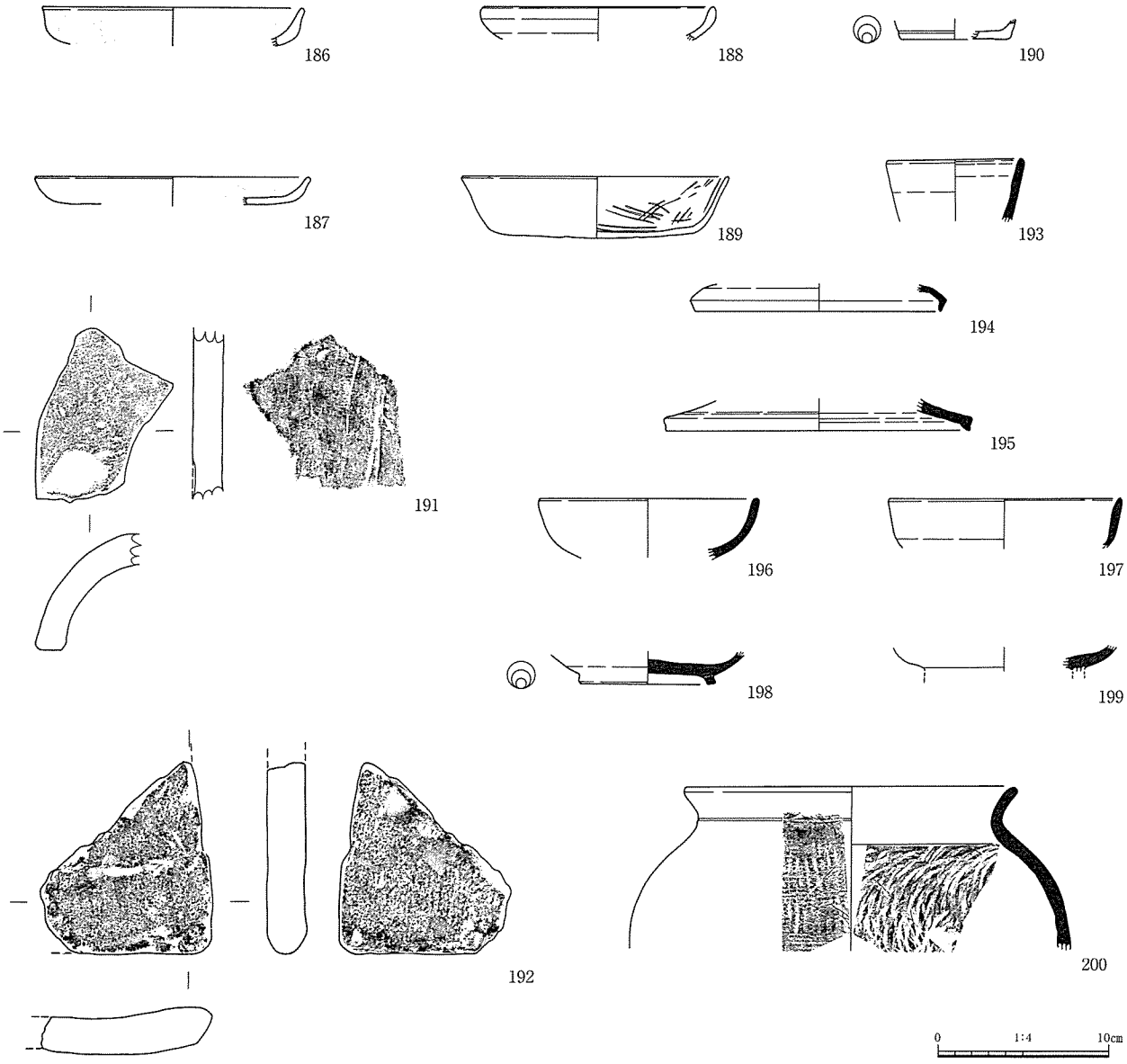
（註１）旧佐野川用水路跡と考えられる。



第56図　Ⅰ層出土遺物



第57図　Ｐ３出土遺物



第58図　当該期の出土遺物

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
183	56	A区R43 Ⅰ層	土師器 高台付皿	＊9.1 －	△3.0	回転ナデ　赤色塗彩	密 やや良	淡橙色　赤褐色	
184	56	A区R43 Ⅰ層	須恵器 高台付坏	－ ＊9.1	△1.9	外面:底部わずかに糸切の痕跡残る　磨耗のため調整不明 内面:ナデ	やや密 砂粒少量 やや粗	灰白色	
185	57	P3 上層	土師器 甕	－ －	△5.2	ナデ　磨耗著しい	密　砂粒少量 良	外面:にぶい黄橙色 橙色 内面:にぶい褐色 灰褐色　黒褐色	
186	58	B区Q43・44 撹乱	土師器 皿	＊15.2 －	△2.2	回転ナデ　赤色塗彩	密　砂粒多量 良	橙色　赤褐色	
187	58	B区Q43・44 撹乱	土師器 皿	＊16.2 －	△1.6	外面:摩耗のため調整不明　赤色塗彩 内面:口縁部回転ナデ　底部ナデ？　赤色塗彩	密　砂粒少量 良	橙色　赤褐色	
188	58	A区T44 造成土	土師器 坏	＊13.6 －	△2.0	外面:回転ナデ　赤色塗彩 内面:磨耗のため調整不明	密 良	外面:にぶい橙色 赤褐色 内面:にぶい橙色	
189	58	B区Q43 撹乱	土師器 坏	＊15.6 －	3.7	外面:口縁部・体部回転ナデ？ 底部ヘラ切り後ナデ？　磨耗が著しい 内面:調整不明　暗文状の工具痕　磨耗が著しい	密 やや良	灰白色　浅黄橙色	
190	58	B区O43 撹乱	土師器 坏	－ ＊6.2	△1.1	外面:体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り　赤色塗彩 内面:体部回転ナデ　1条沈線　底部調整不明 磨耗が著しい	密 良	浅黄橙色	
193	58	B区Q43・44 撹乱	須恵器 蓋	＊7.8 －	△3.6	回転ナデ	密 良	灰色	口縁部
194	58	A区R44 旧用水路 撹乱	須恵器 坏蓋	＊14.2 －	△1.6	回転ナデ	密 良	灰色	
195	58	A区S44 表土	須恵器 坏蓋	＊17.9 －	△1.8	外面:回転ナデ　自然釉付着 内面:回転ナデ	密 良	灰色	
196	58	A区R44 旧用水路 撹乱	須恵器 坏	＊12.8 －	△3.6	回転ナデ	密　砂粒少量 良	灰色	
197	58	B区P43 撹乱	須恵器 坏	＊13.6 －	△2.9	回転ナデ？　磨耗が著しい	粗　砂粒少量 軟	灰白色	
198	58	B区Q43・44 撹乱	須恵器 高台付坏	－ 8.1	△1.9	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:体部回転ナデ　底部ナデ	密 良	灰色	
199	58	B区Q43・44 撹乱	須恵器 高台付坏	－ －	△1.3	外面:体部回転ナデ　磨耗著しい 内面:体部回転ナデ？　底部ナデ	密　砂粒多量 やや軟	外面:灰白色 内面:にぶい黄橙色	
200	58	B区 Q42～44 撹乱	須恵器 甕	＊19.5 －	△9.6	外面:口縁部回転ナデ　体部平行タタキ後横方向の荒いナデ　頸部1条沈線　自然釉付着 内面:口縁部回転ナデ　体部同心円当て具痕	密　砂粒少量 良	灰色	

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	器種	最大幅(cm)	長さ(cm)	最大厚(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
191	58	A区R44 旧用水路 撹乱	丸瓦	4.6	8.4	5.8	凸面・側面:ナデ 凹面:布目圧痕　布端圧痕？	密 やや軟	凸面:淡灰黄褐色 灰褐色 凹面:灰色	
192	58	A区R44 旧用水路 撹乱	平瓦	4.6	8.4	5.8	凸面:布目圧痕？　広端面・側面:荒いナデ 凹面:布目圧痕　布端圧痕？	密 やや軟	淡黄橙色	

第３節　その他の遺構と遺物

１．溝

ＳＤ３（第59図）

Ａ区Ｒ44グリッドに位置し、調査区東壁・西壁の土層断面で確認された。Ⅲ層直下が遺構検出面となる。上層は近世以降の用水路による削平が著しい。幅は西端で約2.0ｍを測る。底面の標高は東端が約54.77ｍ、西端が54.72ｍであり、西端が５㎝低い。埋土は明褐色シルトで、砂礫などの堆積はみられない。遺物は出土していない。

２．土坑

ＳＫ１（第60図）

Ｂ区Ｏ43グリッド、平坦面上に位置する。平面形は円形を呈す。検出面での規模は長径が77㎝、短径が65㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、深さは19㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

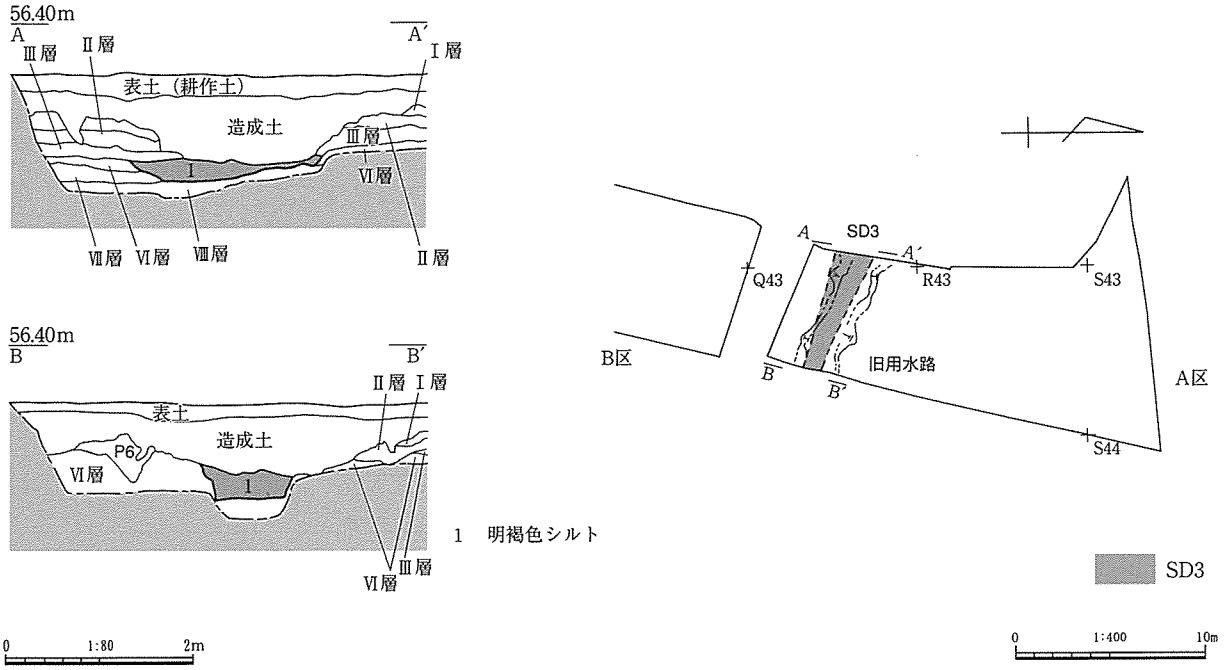
ＳＫ２（第60図）

Ｂ区Ｏ43グリッド、平坦面上に位置する。平面形は円形を呈す。検出面での規模は長径が72㎝、

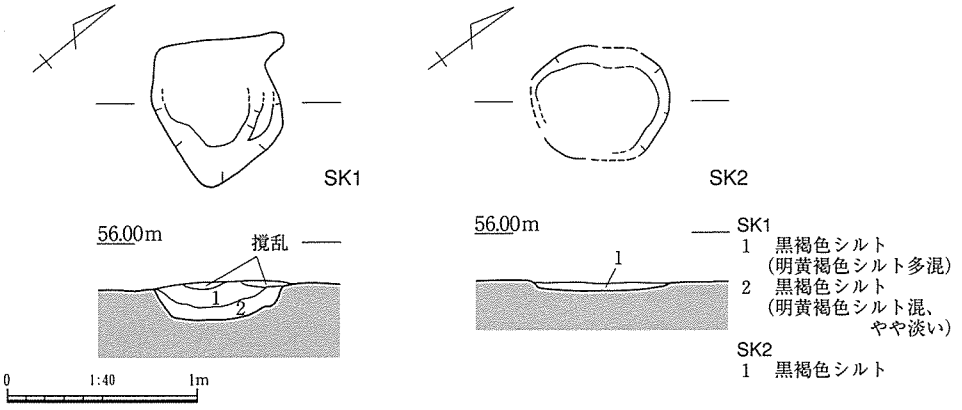
短径が60cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは４cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

３．ピット（第62図　第８表）

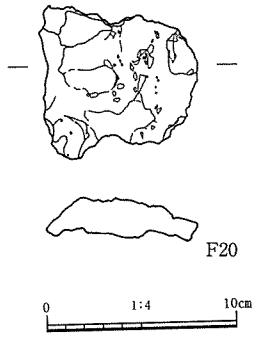
Ｂ区西側を中心に33基のピットを検出した。埋土は灰褐色シルトと黒褐色シルトのものとに分かれる。Ａ区では２基のピットを検出した。Ｐ３は埋土が灰褐色シルトのもので、埋土上層から185（第４章第２節）が出土している。Ｐ６は東壁断面でのみ確認し、平面による検出は行っていない。埋土は黒褐色シルトである。他のピットの詳細については第８表にまとめた。



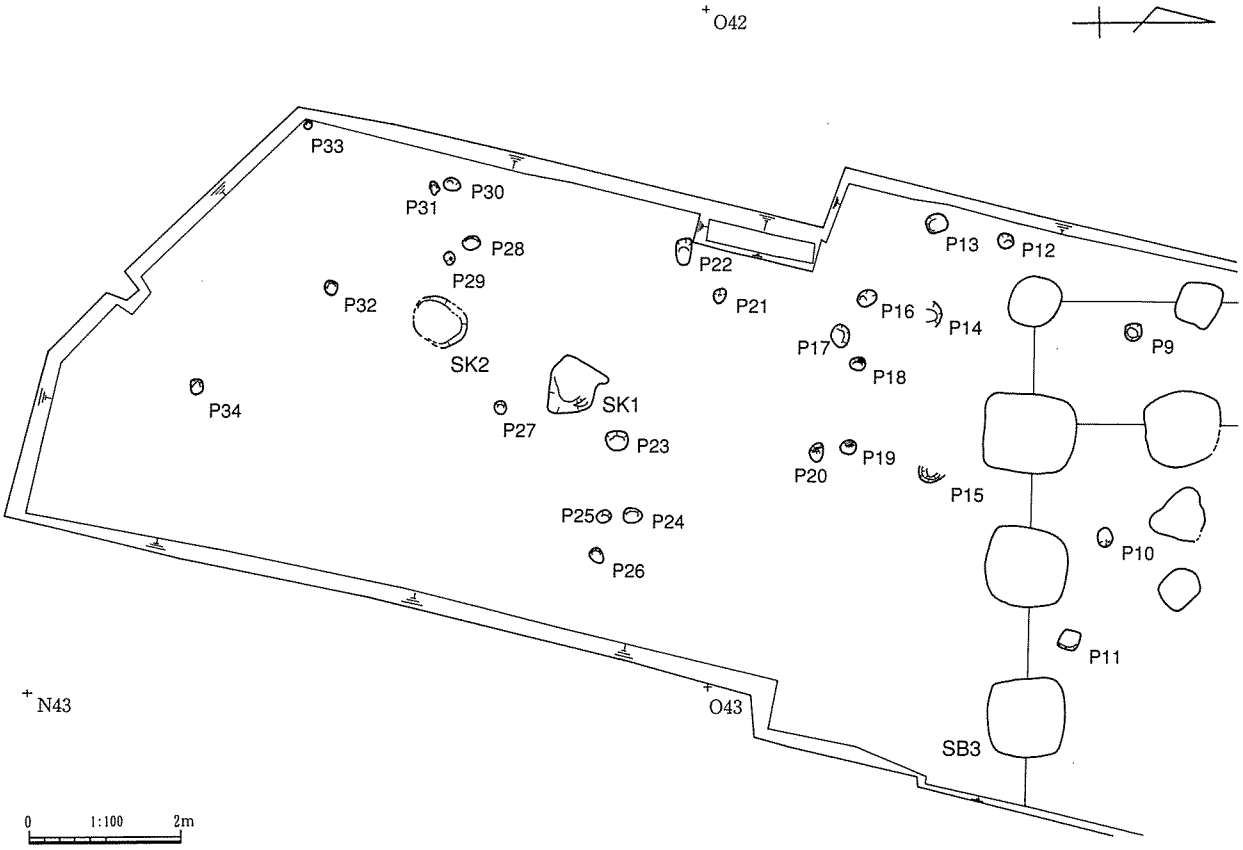
第59図　ＳＤ３土層断面図



第60図　ＳＫ１・２



第61図
調査区内出土鉄製品



第62図　Ｐ43～Ｏ43グリッド遺構図

第８表　ピット計測表

遺構名	地区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)	土色・備考
P3	A区S44	23	21	—	—	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)検出のみ、185埋土上層出土
P4	A区S44	33	33	18	55.36	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P5	A区S44	31	31	7	55.46	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P6	A区R44	—	—	—	—	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P7	B区Q43	19	15	11	55.66	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P8	B区Q43	26	15	7	55.70	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P9	B区P43	23	23	8	55.69	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P10	B区P43	28	20	10	55.68	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P11	B区P43	26	26	6	55.72	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P12	B区P43	21	19	26	55.43	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P13	B区P43	27	27	27	55.43	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P14	B区P43	—	—	23	55.57	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P15	B区P43	—	—	14	55.62	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P16	B区P43	27	21	19	55.56	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P17	B区P43	27	26	11	55.68	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P18	B区P43	21	17	17	55.62	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P19	B区P43	19	18	20	55.57	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P20	B区P43	25	19	18	55.61	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P21	B区P43	22	17	26	55.48	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P22	B区O43	35	19	12	55.62	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P23	B区O43	33	28	20	55.60	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P24	B区O43	23	23	5	55.73	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P25	B区O43	24	17	7	55.73	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P26	B区O43	18	18	10	55.69	灰褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P27	B区O43	17	15	8	55.71	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P28	B区O43	24	19	7	55.66	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P29	B区O43	17	16	36	55.44	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P30	B区O43	22	17	23	55.48	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P31	B区O43	17	13	11	55.58	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P32	B区O43	19	18	11	55.59	黒褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P33	B区O43	12	12	10	55.61	灰褐色シルト(明黄褐色ブロック混)
P34	B区O43	17	13	11	55.67	灰褐色シルト(明黄褐色ブロック混)

第５章　鉄関連遺物の調査

第１節　調査概要と方針

長者屋敷遺跡では鉄製品（未成品を含む）８点、鍛冶関連遺物５点、坂長下屋敷遺跡では鉄製品１点、鍛冶関連遺物が５点出土し、両遺跡周辺でも近年の発掘調査により奈良・平安期の鉄関連遺物が確認されている(註1)。また、長者屋敷遺跡の南西に位置する荒神上遺跡では1983年に発掘調査が実施され、鉄滓等が土坑内からまとまって出土している。長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡周辺は会見郡衙に比定され、鉄関連遺物の検討を行うことは物資の生産や調達など会見郡衙の具体的な様相を知る手がかりになると考えられる。そこで、本章では荒神上遺跡、大殿所在遺跡、大殿墓ノ谷遺跡について概観し、出土した鉄関連遺物の報告を行う。なお、荒神上遺跡については遺構や鉄関連遺物の帰属時期を再検討するため、報告書では未掲載であった土器についても掲載する。

第２節　各遺跡の概要

１．荒神上遺跡

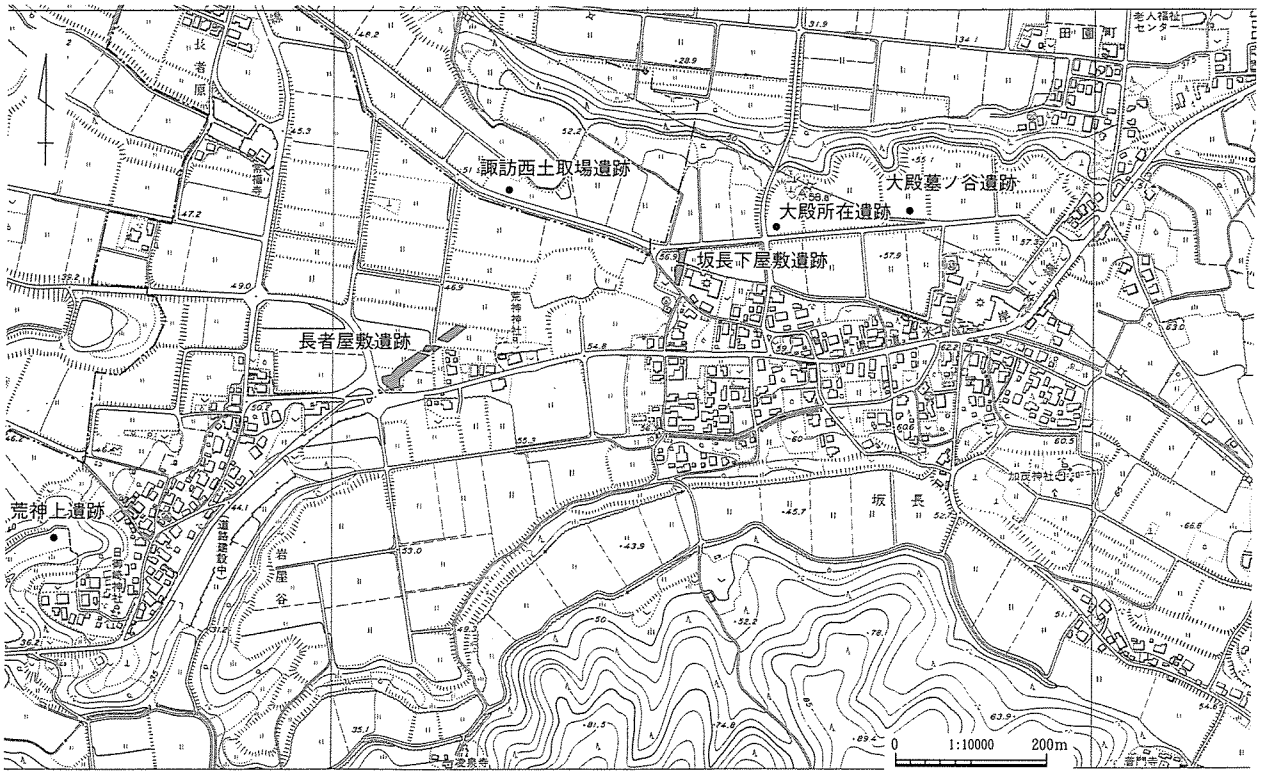
所 在 地：伯耆町岩屋谷字荒神上　長者屋敷遺跡から南西へ約500ｍの標高45ｍの台地上

調査面積：500㎡

調査主体：岸本町（現伯耆町）教育委員会

調査期間：昭和57年８月～９月

報 告 書：岸本町教育委員会1983「長者原遺跡群発掘調査報告書Ⅱ（岩屋谷字荒神上遺跡）」

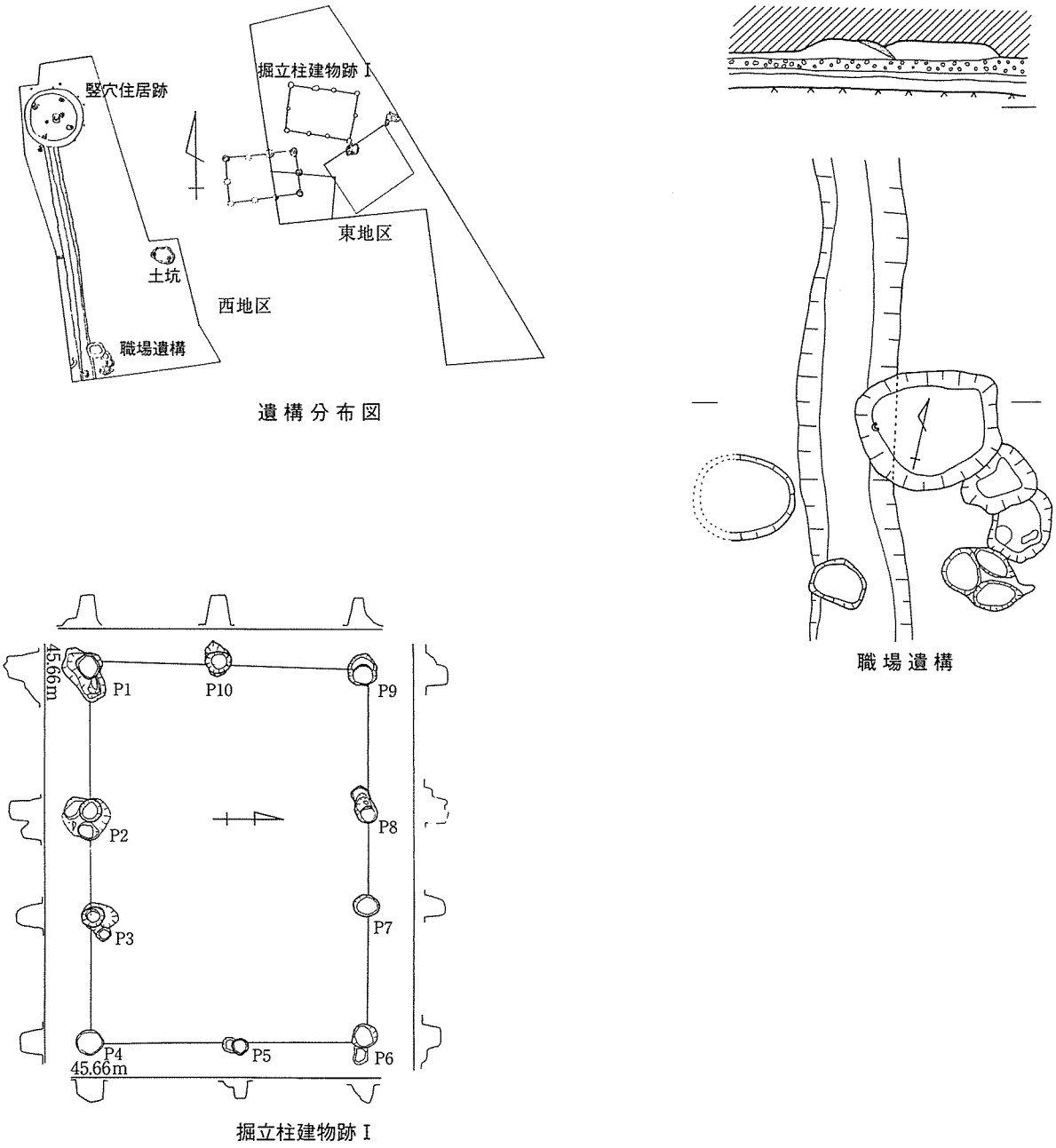


第63図　鉄関連遺物出土遺跡

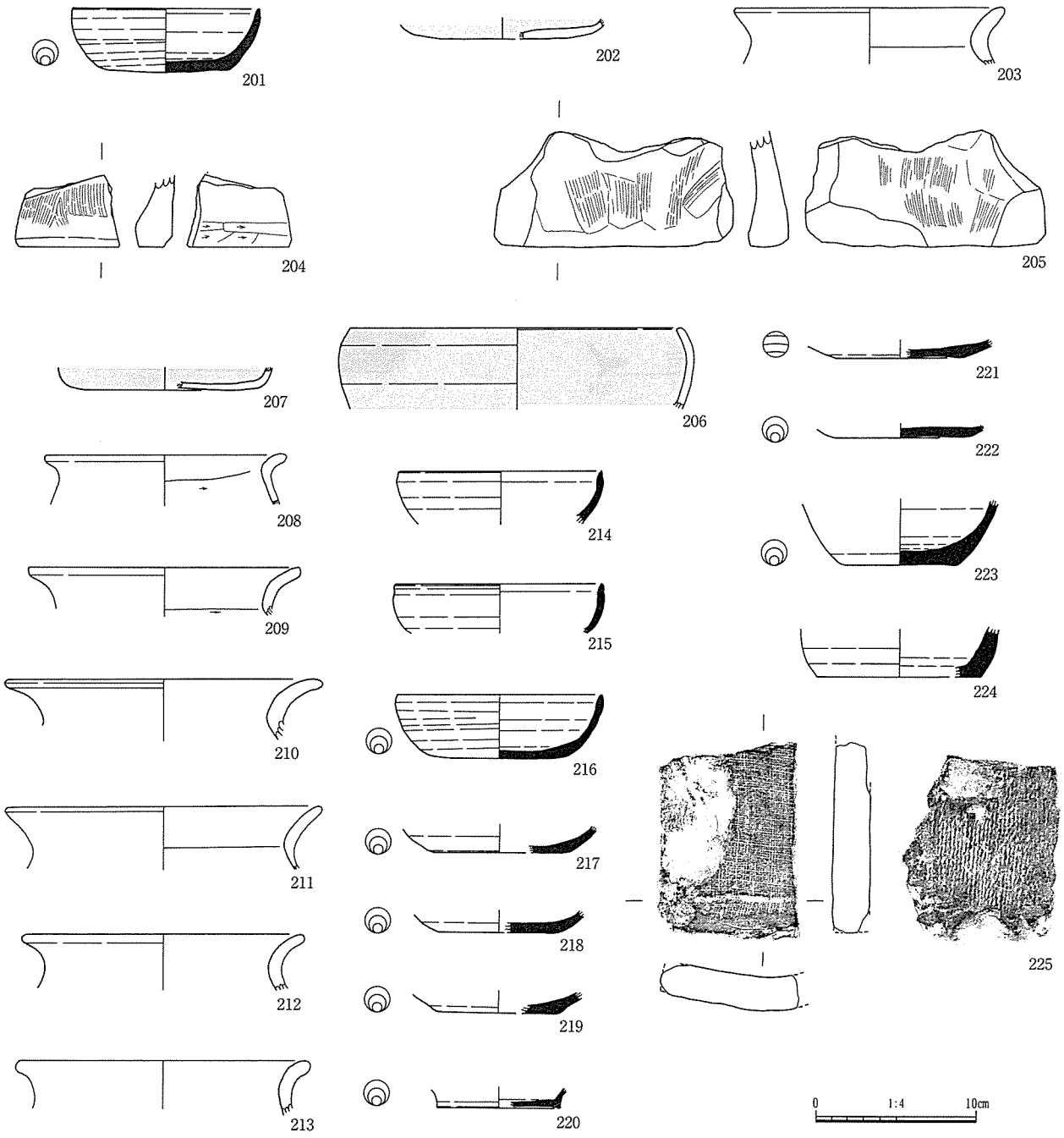
遺構の概要（第64図）

調査区は西地区、東地区に分かれる。東地区では掘立柱建物跡２棟が確認されている。掘立柱建物Ｉは桁行３間（６ｍ）、梁行２間（4.2m）の東西棟である。主軸はほぼ東西正方位である。柱穴は径約30～40cmの楕円形で、深さは約30～50cmである。柱間寸法は心々で2.0～2.2mのものが多い。また、多くの柱穴で２、３基が切り合っており、建替えが想定されている。柱穴からは須恵器、土師器が出土している（第66図）。

西地区では「職場遺構」と称される土坑群、土坑１基が確認されている。「職場遺構」は径４ｍほどの近接した範囲で検出された土坑６基からなると考えられる。各土坑の平面形は直径50cm～１ｍくらいの楕円形、不整形を呈する。土坑内から木炭、灰、焼土とともに鍛冶関連遺物（第73図）がまとまって出土している。その他の遺構として弥生時代中期の竪穴住居１棟、「職場遺構」より



第64図　荒神上遺跡遺構図（「岸本町教委1983」から転載、一部改変）



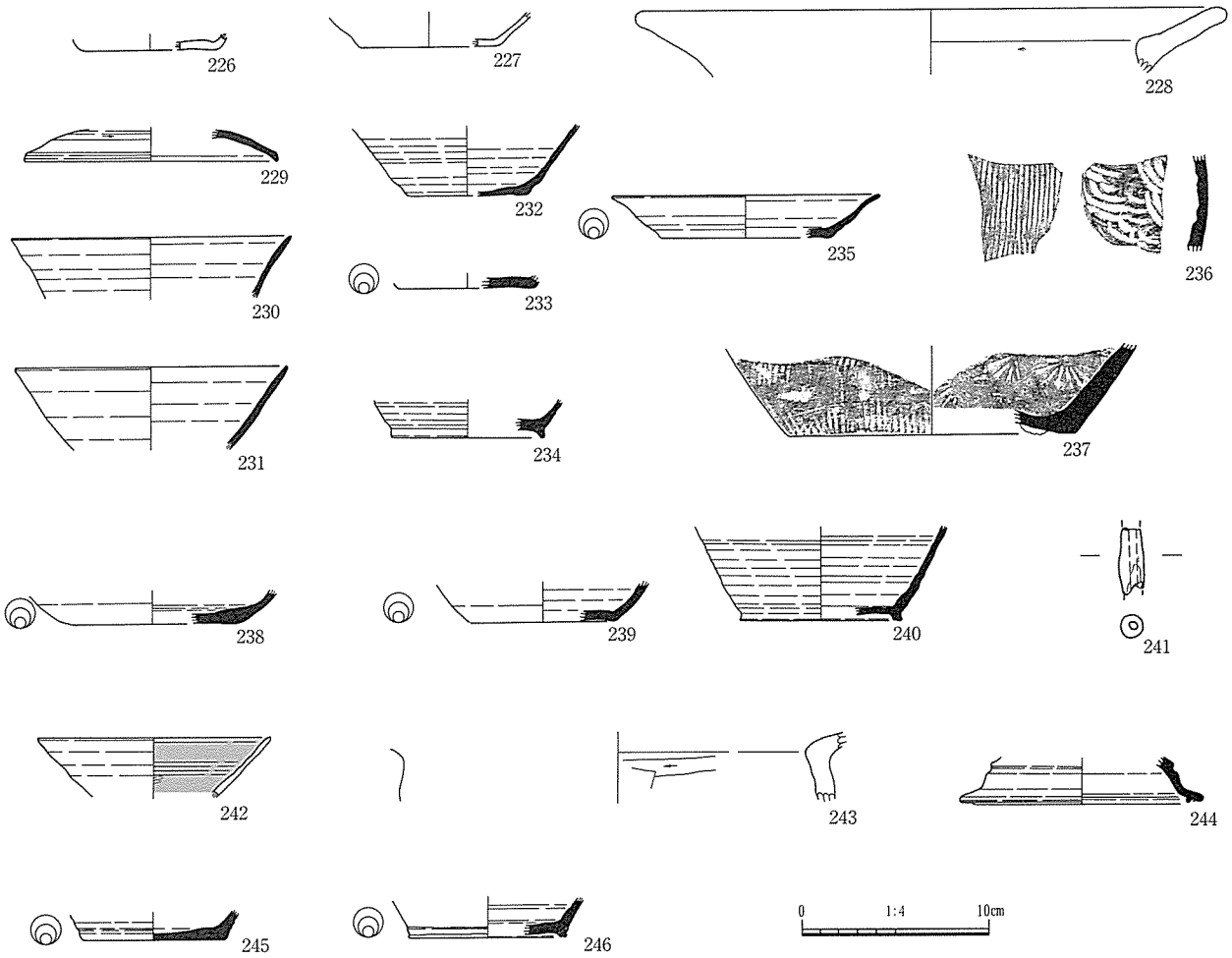
第65図　荒神上遺跡西地区出土遺物

新しい時期の溝状遺構が検出されている。

出土土器（第65・66図　図版50、51－１・２）

荒神上遺跡出土土器について、西地区・東地区に分け、その概要について述べる。

第65図は西地区出土土器である。201～206は職場状遺構もしくはその周辺から出土した資料である。201は須恵器で、無高台の坏である。底部切り離しは回転糸切りで、口縁端部の屈曲はほとんど認められない。202・203・206は土師器である。202は皿で内外面に赤色顔料が塗布される。磨耗のため調整は不明である。203は甕である。206は鉢と思われ、口縁部で内湾する器形を持つ。内外面に赤色顔料が塗布される。204・205は移動式竈でいずれも基部付近が残存する。外面はケズリ後粗雑なハケ調整、内面はケズリが主体である。207～225は遺構に伴わない遺物群で、207～213は土



第66図　荒神上遺跡東地区出土遺物

師器である。207は坏で、内外面に赤色顔料塗布の痕跡が残る。208～213は甕で口縁部が「く」字状に外反する。214～224は須恵器で、214～219は無高台の坏である。214～216は口縁部が残存し、端部の屈曲が甘い。217～219は底部資料で、底部切り離しは回転糸切りである。220は高台付坏で、底部周縁に低い高台が付く。221・222は皿である。221の底部は静止糸切りされる。223・224は無高台の壺で、底部が残存する。225は平瓦である。下面は縄目タタキ、上面には布目痕跡が残る。

第66図には東地区出土土器を図示した。226～238はＢグリッド検出の掘立柱建物柱穴より出土した土器で、226～237は掘立柱建物Ⅰ（柱穴１～10）から、238は掘立柱建物Ⅱ（柱穴Ａ～Ｃ）からの出土である。226・227は土師器の坏である。227は器壁が薄手で、体部は外傾し立ち上がる。228は口縁部で、「く」字状に屈曲するものである。甕と思われるが、移動式竈の掛口部の可能性もある。229～238は須恵器である。229は坏蓋で、口縁部の下方への屈曲は僅かである。230～233は坏で、全体的に焼成が良くない。230・231は灰白色を呈し、薄手の体部は開き気味で直線的に外傾する。232は器形的に230・231と類似するが、焼成が不良で色調は暗灰褐色を呈する。233は焼成がさらに不良で、にぶい橙色を呈する。234は高台付坏で、底部周縁に低めの高台が付く。235は皿で高台の付かないものである。体部は開き気味に外傾し、口縁部は外反する。236・237は甕である。236は胴部破片で外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕がみられる。237は外面に平行タタキ、内面は車輪状当て具痕がみられ、底部外面には不明な溶解物が付着している。238は無高台の坏で、

＊復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	地区 遺構等	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
201	65	西地区 職場跡	須恵器 坏	11.8 7.6	4.05	外面:口縁～体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:口縁～体部回転ナデ 底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒少量 良	灰色	
202	65	西地区 生産付近	土師器 坏	― 11.2	△1.2	外面:磨耗のため不明　赤色塗彩 内面:磨耗のため不明　赤色塗彩	細砂粒微量 良	外面:浅黄橙色 内面:橙色	
203	65	西地区 生産付近	土師器 甕	＊16.5 ―	△3.65	外面:磨耗のため不明 内面:口縁部調整不明　胴部ヘラケズリ　磨耗著しい	砂粒多量 良	にぶい橙色	
204	65	西地区 職場跡	土製品 移動式竈	―	△4.5	外面:ケズリ後ハケメ　端部・接地面ケズリ 内面:ケズリ	砂粒多量 良	橙色	脚裾部片
205	65	西地区 職場跡	土製品 移動式竈	―	△7.3	外面:端部・接地面ケズリ　磨耗著しい 内面:ケズリ　磨耗著しい	砂粒多量 良	淡橙色	脚裾部片
206	65	西地区 生産付近	土師器 鉢	＊20.7 ―	△5.1	外面:磨耗のため不明　赤色塗彩 内面:磨耗のため不明　赤色塗彩	細砂粒微量 良	にぶい黄橙色	
207	65	西地区 南	土師器 皿	― ＊12.2	△1.4	外面:磨耗のため不明　赤色塗彩 内面:磨耗のため不明　赤色塗彩	細砂粒微量 良	橙色 にぶい橙色　赤褐色	
208	65	西地区 南	土師器 甕	＊15.0 ―	△3.1	外面:磨耗のため不明 内面:口縁部調整不明　体部ケズリ　磨耗著しい	砂粒多量 良	明橙色	
209	65	西地区 南	土師器 甕	＊17.0 ―	△3.0	外面:磨耗のため不明 内面:口縁部ナデ　磨耗著しい　煤付着	細砂粒多量 良	外面:にぶい橙色 内面:灰褐色　黒色(煤)	
210	65	西地区 南	土師器 甕	＊20.0 ―	△3.85	外面:磨耗のため不明 内面:磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい黄橙色	
211	65	西地区 南	土師器 甕	＊19.8 ―	△4.0	外面:磨耗のため不明 内面:磨耗のため不明	細砂粒多量 良	明橙色	
212	65	西地区 南	土師器 甕	＊17.6 ―	△1.4	外面:磨耗のため不明 内面:磨耗のため不明　煤付着	砂粒多量 良	明橙色	
213	65	西地区 南	土師器 甕	＊18.4 ―	△3.2	外面:磨耗のため不明　体部に黒斑有 内面:磨耗のため不明	砂粒多量 良	明橙色	
214	65	西地区	須恵器 坏身	＊12.8 ―	△3.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	細砂粒多量 良	灰色	体部下半～底部欠損
215	65	西地区 西	須恵器 坏身	＊13.2 ―	△3.1	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	砂粒多量 良	灰色	体部下半～底部欠損
216	65	西地区	須恵器 坏身	12.8 8.4	4.05	外面:口縁・体部回転ナデ　底部回転糸切り後ナデ 内面:回転ナデ　底部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒多量 良	灰色	
217	65	西地区	須恵器 坏身	― ＊9.0	△1.7	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ　底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒多量 良	灰色	
218	65	西地区	須恵器 坏身	― ＊7.6	△1.4	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ　底部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒多量 良	灰色	
219	65	西地区	須恵器 坏身	― ＊8.0	△1.4	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒多量 良	灰色	
220	65	西地区 南	須恵器 高台付坏	― ＊7.6	△1.25	外面:体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	細砂粒微量 良	淡灰色	
221	65	西地区	須恵器 皿	― ＊8.0	△1.1	外面:体部回転ナデ　底部静止糸切り 内面:回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒多量 良	灰色	
222	65	西地区	須恵器 皿	― ＊8.0	△0.75	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:底部回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒多量 良	淡灰色	
223	65	西地区 南	須恵器 壺	― ＊7.2	△4.0	外面:胴部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ　自然釉付着	砂粒多量 良	外面:にぶい赤褐,黒褐 内面:黒褐色	
224	65	西地区 南	須恵器 壺	― ＊10.3	△3.2	外面:胴部下半回転ヘラケズリ後ナデ　底部調整不明 内面:回転ナデ	細砂粒微量 良	淡灰色	
226	66	東地区 B 柱穴6	土師器 坏	― ＊7.5	△0.85	外面:磨耗のため調整不明 内面:磨耗のため調整不明	砂粒多量 良	橙色	
227	66	東地区 B 柱穴4	土師器 坏	― ＊7.3	△1.8	外面:磨耗のため調整不明 内面:磨耗のため調整不明	細砂粒少量 良	橙色	
228	66	東地区 B 柱穴2	土師器 甕？	＊32.1 ―	△3.5	外面:掛口部ヨコナデ　磨耗著しい 内面:掛口部ヨコナデ　胴部ヘラケズリ　磨耗著しい	砂粒多量 良	橙褐色	移動式竈掛口部の可能性有
229	66	東地区 B 柱穴2	須恵器 坏蓋	＊13.6 ―	△1.7	外面:天井部回転ヘラケズリ　口縁部回転ナデ 内面:回転ナデ	砂粒多量 良	灰色	
230	66	東地区 B 柱穴4	須恵器 坏	＊15.0 ―	△3.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	砂粒少量 良	灰色	
231	66	東地区 B 柱穴4	須恵器 坏	＊14.6 ―	△4.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	砂粒多量 やや軟	灰黄色、灰白色	
232	66	東地区 B 柱穴8	須恵器 坏	― ＊6.6	△3.8	外面:体部回転ナデ、底部調整不明　磨耗著しい 内面:回転ナデか　磨耗著しい	砂粒多量 やや軟	外面:黒灰色、暗灰褐色 内面:黒褐色	
233	66	東地区 B 柱穴4	須恵器 坏	― ＊7.2	△0.6	外面:底部回転糸切り 内面:回転ナデ	砂粒少量 軟	にぶい橙色	
234	66	東地区 B 柱穴2	須恵器 高台付坏	― ＊8.2	△2.0	外面:体部・高台回転ナデ　底部欠損のため調整不明 内面:回転ナデ	細砂粒多量 良	灰色	
235	66	東地区 B 柱穴4	須恵器 皿	＊14.4 ＊9.3	2.35	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	砂粒少量 良	灰色	
236	66	東地区 B 柱穴10	須恵器 甕	―	△5.3	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	砂粒多量 良	灰色	
237	66	東地区 B 柱穴2	須恵器 甕	― ＊15.6	△4.8	外面:胴部平行タタキ　底部に溶解物付着 内面:回転ナデ、車輪状当て具痕	砂粒多量 良	外面:淡灰色 内面:暗灰色	
238	66	東地区 C 柱穴	須恵器 坏	― ＊8.8	△1.8	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	細砂粒少量 良	灰褐色	
239	66	東地区 中央部土坑	須恵器 坏	― ＊7.85	△2.0	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	砂粒多量 やや軟	外面:淡灰色、黒灰色 内面:淡灰色	
240	66	東地区 中央部土坑	須恵器 高台付坏	― ＊8.7	△5.1	外面:体部・高台回転ナデ　底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面:回転ナデ	砂粒多量 良	灰色	
241	66	東地区 中央部土坑	土製品 土錘	幅1.3 厚1.2	最大 △3.6	外面:ナデ調整 穿孔径0.4cm	細砂粒多量 良	暗灰褐色	
242	66	東地区 柱穴	黒色土器 坏	＊12.5 ―	△3.2	外面:磨耗のため調整不明 内面:ナデ　黒色処理　ミガキ　磨耗著しい	細砂粒多量 良	外面:にぶい黄橙色 内面:黒灰色	
243	66	東地区 B 小柱穴	土師器 甕	―	△3.6	外面:磨耗のため調整不明 内面:頸部磨耗のため不明　胴部ケズリ	細砂粒多量 良	灰黄褐色	
244	66	東地区 B 柱穴	須恵器 壺	＊11.6 ―	△2.5	外面:回転ナデ　自然釉付着 内面:回転ナデ	砂粒少量 良	外面:灰色、黄灰色 内面:灰色	
245	66	東地区 小柱穴上	須恵器 坏	― ＊7.6	△1.5	外面:体部回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ後不整方向ナデ	細砂粒多量 やや軟	にぶい黄橙色	
246	66	東地区 柱穴6	須恵器 坏	― ＊8.4	△2.1	外面:体部・高台回転ナデ　底部回転糸切り 内面:回転ナデ	砂粒多量 良	灰色	

遺物番号	挿図番号	地区 遺構等	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
225	65	西地区	平瓦	12.0	9.5	2.3	表面:布目 裏面:縄目タタキ

底部切り離しは回転糸切りである。239～241は中央部土坑出土資料で、239・240は須恵器である。239は無高台の坏で、焼成がやや不良である。240は高台付坏で薄手の体部は直線的に外傾する。241は土錘である。紡錘形を呈するもので、両端部を欠損している。242～246は掘立柱建物Ⅰ・Ⅱ柱穴以外のピットから出土したものである。242は黒色土器で、高台付坏と思われる。内面を黒色処理し、磨耗が著しいが僅かにミガキが残る。243は土師器の甕である。244～246は須恵器で、244は蓋と思われる。245は無高台の坏で、焼成不良で黄橙色を呈する。246は高台付坏で、234や240と同様なタイプである。

西地区と東地区の遺構出土土器を中心に概観してきた。各地区の土器様相をまとめると、西地区では８世紀後半から９世紀、東地区では９世紀～10世紀前後のものが中心となることが指摘できよう。

鉄関連遺物（第67・68図　図版52）

第67図Ｆ21～Ｆ29は東地区「職場遺構」から出土した鍛冶関連遺物９点である。Ｆ21～Ｆ23、Ｆ26、Ｆ28は椀形鍛冶滓である。Ｆ21・Ｆ22には下面に鍛冶炉の炉床土が固着している。Ｆ28は磁着度が高く、鍛冶鉄塊系遺物に近い。Ｆ24、29は粘土質溶解物であり、表面には木炭痕が残る。Ｆ27は鍛冶鉄塊系遺物で、逆Ｌ字状の平面形をもつ。９点とも鍛冶炉を用いた鍛練鍛冶で生じたものと考えられる。

第68図Ｆ30～Ｆ32は東地区の遺構から出土した鉄製品である。Ｆ31は釘、Ｆ31は刀装具の吊手金具と考えられる。Ｆ33～35は弥生時代中期の竪穴住居から出土したとされるが、二次的な混入遺物の可能性があるため掲載している。Ｆ34は角棒状の鉄製品で、中間部分で90°断面の方向が変えられている。Ｆ35は椀形鍛冶滓である。

２．大殿所在遺跡・大殿墓ノ谷遺跡

所 在 地：伯耆町大戸殿字墓ノ谷　坂長下屋敷遺跡から北東へ約150と300m

調査面積：大殿所在遺跡　20㎡　　大殿墓ノ谷遺跡　267㎡

調査主体：伯耆町教育委員会

調査期間：大殿所在遺跡　平成16年１月～３月　大殿墓ノ谷遺跡　平成16年８月～平成17年２月

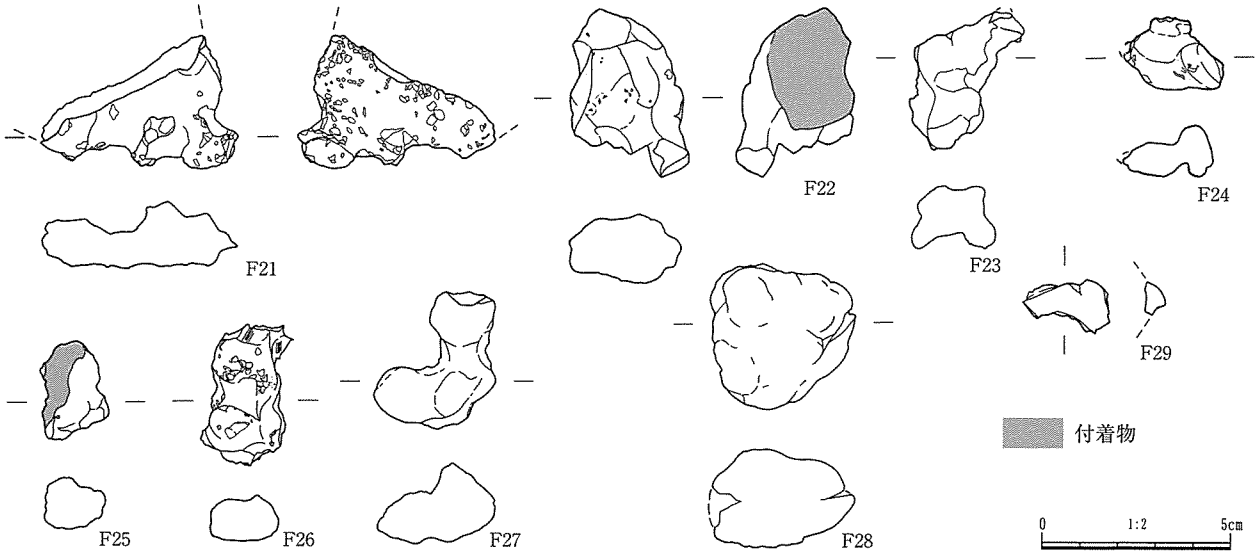
報 告 書：大殿墓ノ谷遺跡　伯耆町教育委員会2007年報告書刊行予定

遺構の概要

大殿墓ノ谷遺跡では溝３基、ピット３基を検出している。その他に焼土を３箇所で確認し、凹レンズ状の堆積が窺われる。大殿所在遺跡では遺構は確認されていない。両遺跡とも黒色土包含層が１m以上と厚く堆積しており、大殿所在遺跡では1.4mにも及ぶ。大殿墓ノ谷遺跡の包含層中からは弥生時代中期～平安時代の遺物が出土しており、奈良・平安期の須恵器、土師器片が大半を占めている。土師器では赤彩のものが目立ち、ミニチュア土器など祭祀具も出土している。その一方で土師器の甕、土製支脚なども一定量出土している。黒色包含層の下層まで奈良・平安期の遺物が出土していることから当時、調査地は谷状地形をなしていたことが推定される(註2)。

鉄関連遺物（第69・70図　図版51－３・４、53）

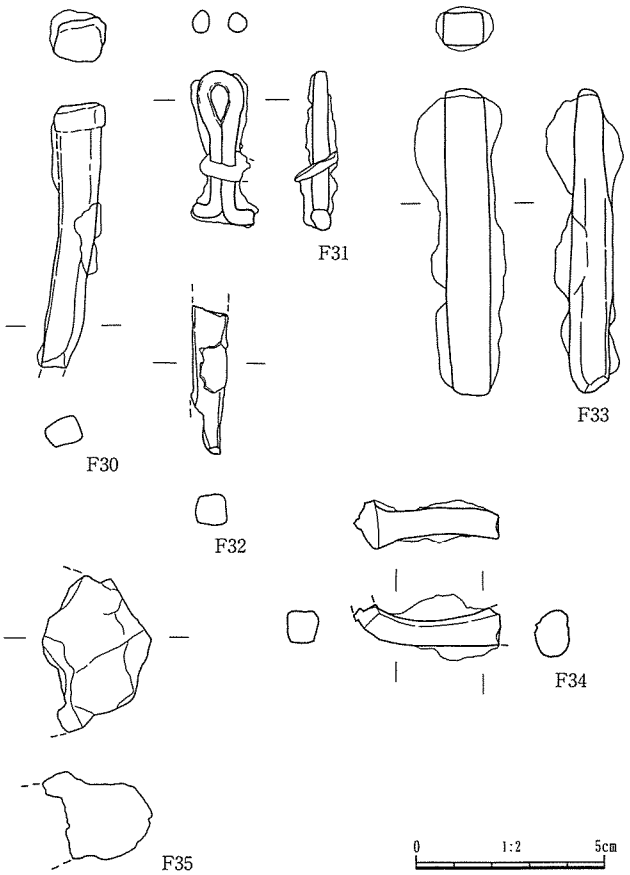
第69図は大殿所在遺跡で出土した鉄関連遺物である。Ｆ36は椀形鍛冶滓である。下面の中央部が棒状に突起しており、磁着力が強く、鍛冶具の先端または鍛冶処理中の鉄製品を巻き込んだ可能性



第67図　荒神上遺跡　職場遺構出土鍛冶関連遺物

がある。Ｆ37は棒状の鉄製品で、釘の可能性がある。

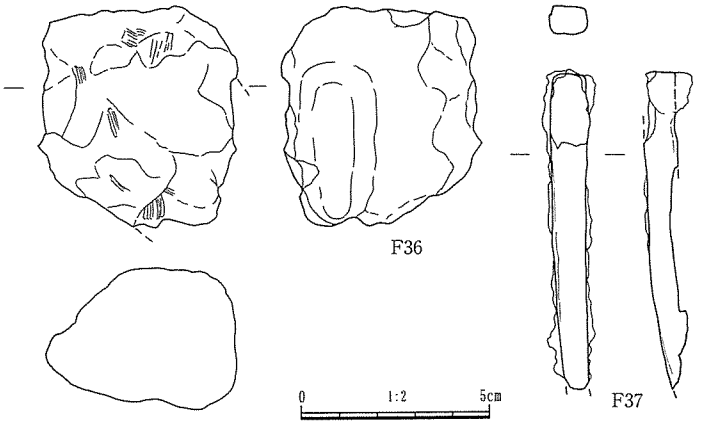
第70図は大殿墓ノ谷遺跡で出土した鉄関連遺物である。Ｆ38～41は鍛冶滓である。Ｆ38は中型の椀形鍛冶滓の半欠品である。上面には粘土質の滓が付着しており、木炭痕が点在する。F39は極小の椀形鍛冶滓で上面に羽口先由来と考えられる粘土質の滓が残されている。Ｆ42はそら豆状の外観をもつ鍛冶鉄塊系遺物である。Ｆ43は両関をもつ刀子である。茎部はやや湾曲し、基部が欠損している。Ｆ45は鉋の一種、または鑿状の鉄製品と考えられる。先端部は反り上がっている。Ｆ47は鎌の体部から先端部と推定され、両方の端部が急激に折り曲げられている。Ｆ48、49は棒状の鉄製品である。



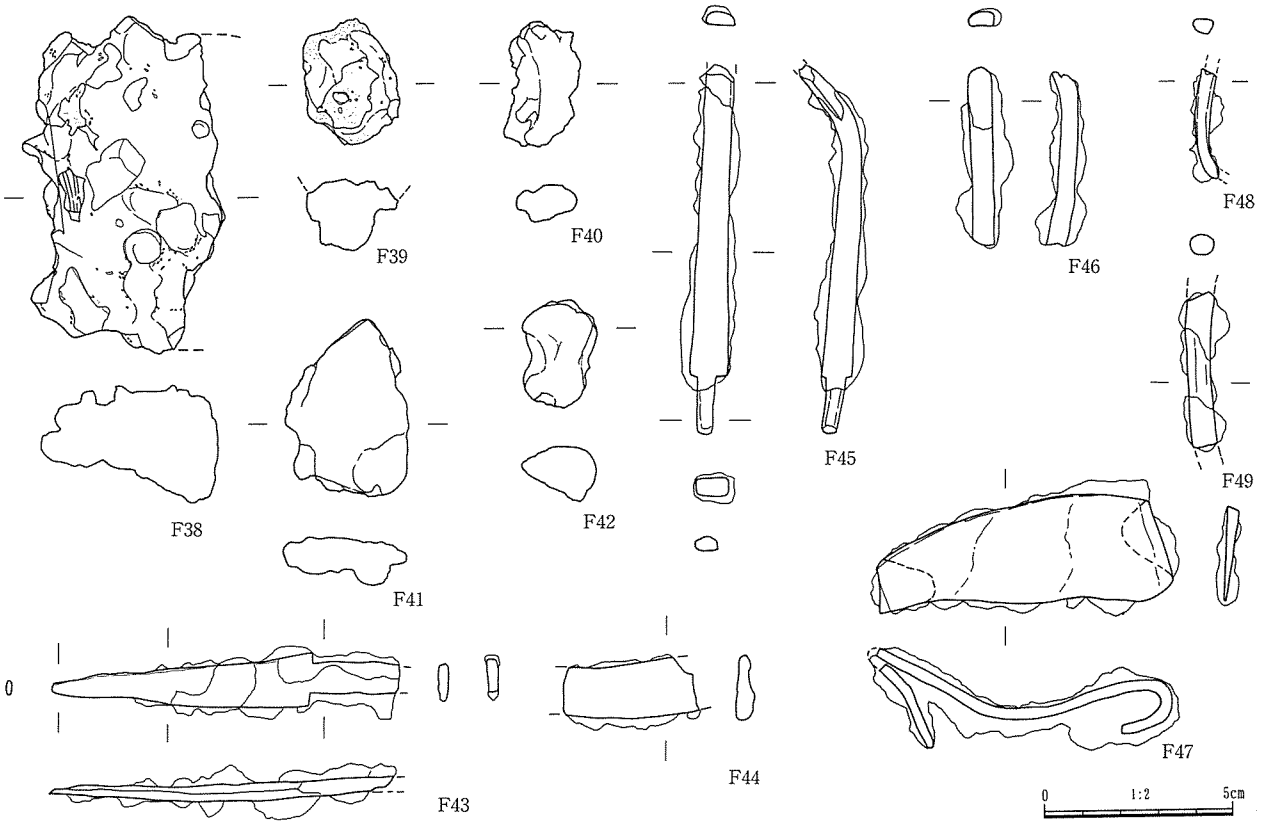
第68図　その他出土鉄関連遺物

（註１）諏訪西土取場遺跡では奈良期の土坑や包含層中から鍛冶関連遺物が100点近く出土している。
米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室2005「諏訪西土取場遺跡　現地説明会資料」

（註２）遺構や遺物の認識については現段階のものであり、今後の整理を待って改めて評価する必要がある。



第69図　大殿所在遺跡出土鉄関連遺物



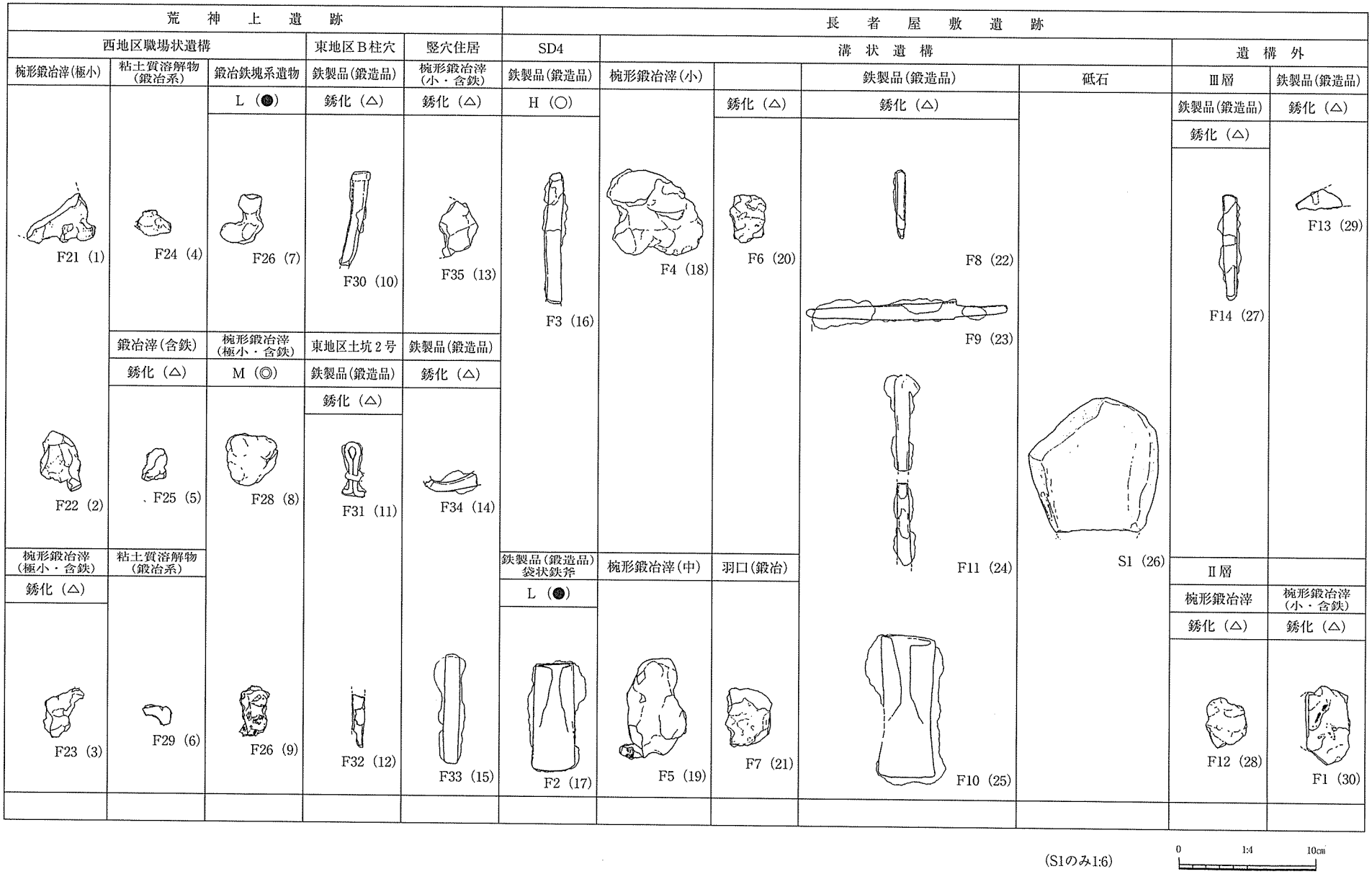
第70図　大殿墓ノ谷遺跡出土鉄関連遺物

第９表　鉄関連遺物観察表（１）

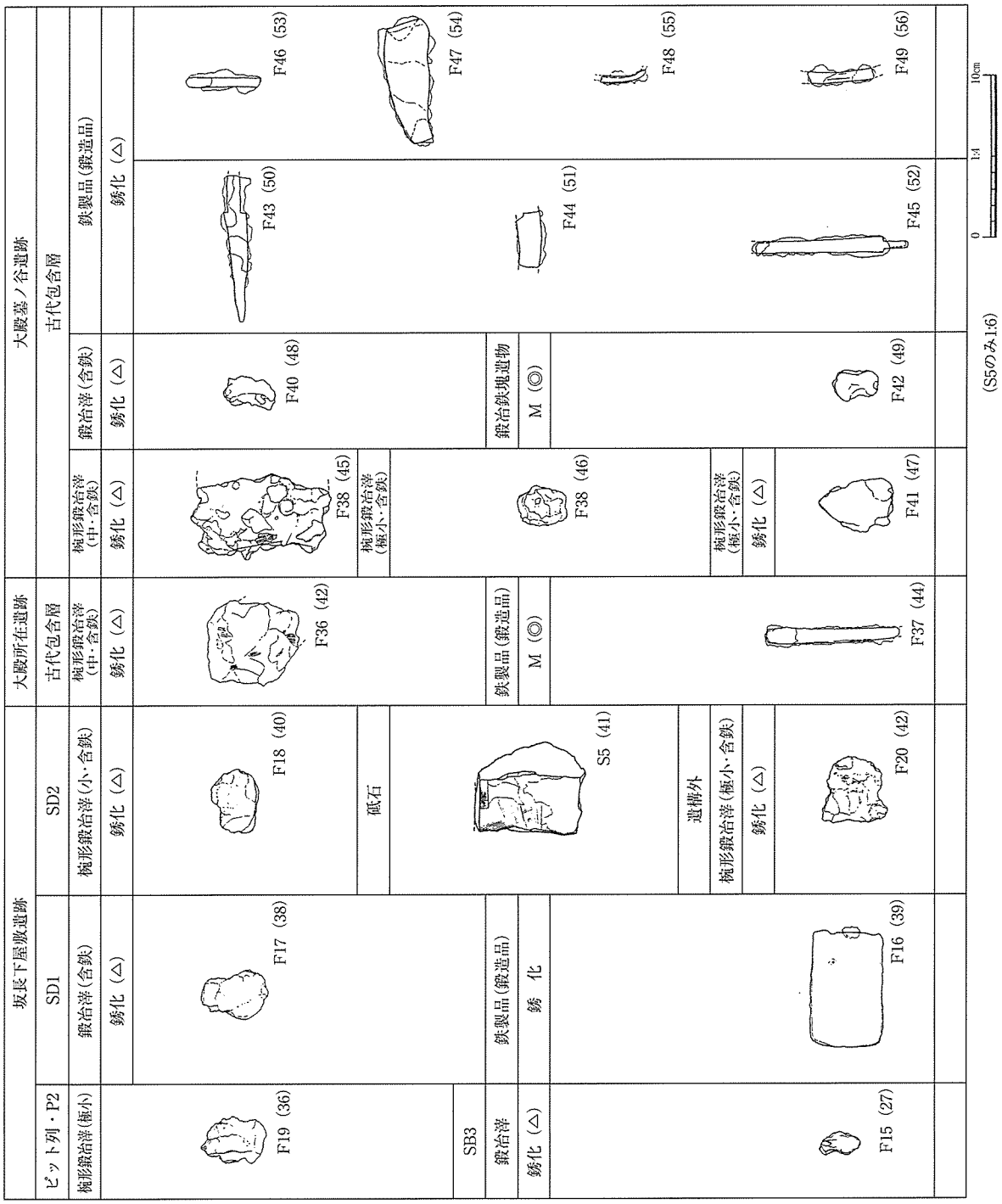
遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層位	遺物名	計測表(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考
長者屋敷遺跡	F1	34	9	9T4	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	5.8	3.2	2.2	62	2	錆化(△)	昭和54～56年度発掘調査で出土。中型型の椀形鍛冶滓の半欠品。左側部が直線状の破面。上面はゆるやかな波状で、木炭痕が点在する。下面はやや凹凸が激しく、発達は不良。破面は緻密で、気孔は少なめ。
	F2	17	16	A区 C4 SD4	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧	8.0	3.2	1.7	93	6	L(●)	小形の袋状鉄斧の完形品。外観的には酸化土砂に覆われ、形状も乱れているようにみえるが、透過X線像では、シャープな稜線が撮し出されている。基部幅は2.8cmで、刃部幅は3.2cmとわずかに広がる。袋部は長方形で、合わせ目は外観より広く、最も狭い所で5cm程となる。銹化は袋部外面と刃部側が進んでいる。鍛造痕は直線的で丁寧である。
	F3	16	16	A区 C4 SD4	鉄製品(鍛造品)	9.7	1.3	0.6	31	4	H(○)	先端部が上方に折れ曲がったヤリガンナ状の外観をもつ鉄製品。基部側が破面となっており、本来はさらに長めのものか。横断面形は各部とも面をもち、刃部らしき作りはなされていない。透過X線像では鍛造線が直線的でなく、不規則にうねっている。何らかの鉄製品の未製品または、荒い作りで良い鉄製品をうかがわせる。全体にヘラ状で、ヤリガンナの未製品ないしは、起こしベラ的な鉄製品か。
	F4	18	22	A区 A2 溝状遺構	椀形鍛冶滓(小)	6.2	7.3	2.5	167	2	なし	平面、不整楕円形をした小型の椀形鍛冶滓状の滓片。上面は生きており、側面から下面の半分程が破面となる。左側部上手側の酸化土砂の内側にも滓部がのびている。上面は不規則な波状で、やや垂れ気味の部分を持つ。また、破面の結晶が発達してキラキラと輝いている。これは除冷されたための結晶の肥大で、風化が進み、より目立っている。一応、大型の椀形鍛冶滓としているが、垂れや結晶の肥大を重視すれば、製錬系の炉内滓の可能性も残る。構成№4(19)も似た条件の資料である。
	F5	19	22	A区 A3 溝状遺構	椀形鍛冶滓？(中)	7.0	4.4	4.1	145	3	なし	酸化土砂に全面が覆われた中型の椀形鍛冶滓様の滓資料。椀形鍛冶滓とすれば、4cm前後の厚みを持った椀形滓の側部片となる。左側部が主破面で、破面下手寄りには1.5cm大を超える木炭痕が露出している。上下面の各所に結晶の肥大した滓部が顔を出しており、製錬系の炉内滓の外観とも似た部分を持つ。構成№3(18)、4(19)のいずれもが含鉄部を持たず、結晶の発達が激しい点は、長者屋敷・坂長下屋敷遺跡周辺の各遺跡出土鉄関連遺物の中では特異な資料である。鉄生産の工程的には、製錬または精錬鍛冶段階の資料であろう。
	F6	20	22	A区 A2 溝状遺構	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	3.5	2.7	2.0	25	4	錆化(△)	極小の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。下面中央部が一段突出し、やや二段鍛冶滓気味。上面全体と側面の7割程が生きており、右側の側部や肩部に破面がある。下面にも破面があり、石英質の石粒が貼り付いている。滓は流動性が低く、表面に小突起が連続する。
	F7	21	22	A区 A2 溝状遺構	羽口(鍛冶)	4.1	3.3	2.0	29	2	なし	羽口の先端部、体部外面破片。外面下半は黒色ガラス質に滓化して、わずかに垂れる。胎土はスサや石英質の石粒を含む粘土質。羽口の部位としては、正面から見て左側の下半部外面。
	F8	22	22	A区－A1 溝状遺構	鉄製品(鍛造品)未製品(釘)	5.1	0.7	0.7	7	3	錆化(△)	方形断面を持つ小型の釘または未成品。頭部は平らで、とくに頭としての加工はなされていない。横断面形がややひしゃげた方形で、透過X線像では体部中央がやや弧状となる。頭部の処理と断面形から、釘の未成品かと判断しておく。
	F9	23	22	A区 溝状遺構	鉄製品(鍛造品)刀子	14.8	1.3	0.5	40	3	錆化(△)	両関の刀子。現状では二片に割れているが、完全に接合する。表面の酸化土砂が瘤状で外観的には乱れているが、透過X線像では比較的健全である。背側が全体にわずかに反り、刃部先端は丸みを持つ。刃部中程は銹化がやや激しく、形状が乱れている。関部分は背側、刃部側共、同位置に残る。茎部は素直なつくり。
	F10	25	22	A区 A2 溝状遺構	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧	10.6	4.0	2.6	446	3	錆化(△)	分厚い酸化土砂に覆われ、土塊のような外観をもつ鉄製品。ほぼ透過X線像のみが頼りで、製品の銹化もかなり進んでいる。長い体部を持つ袋状鉄斧と推定されるが、袋部の折り返しが不明瞭である。長さは最大10.03cm、体部中央部でわずかに細くなっており、幅3.05cmを測る。袋部側の最大幅は3.8cm、刃部側は3.5cm以上と推定される。体部中央にひび割れが生じ、刃部側にも小さな放射割れが発達している。袋部の長さは6cm前後か。全体形状と鍛造痕から、鋳造鉄斧ではないと判断される。
	F11	24	22	A区 A2 溝状遺構	鉄製品(鍛造品)勾付き棒状品	13.3	1.0	1.0	41	3	錆化(△)	頭部が丸味をもって折れ曲がった棒状不明品。体部の途中で二片に割れており、側部側先端も破面の可能性がある。透過X線像では頭部が鈎状になっているが、本来は環状であった可能性も残される。鍛造痕はややS字状にうねっており、そう丁寧なつくりの鉄製品ではない。また、頭部や体部のつくりからみて、大型の釣針類とも考えにくい。
	F12	28	37	A区 B3 Ⅱ層	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	3.5	3.0	2.0	23	4	錆化(△)	酸化土砂が側部に目立つ極小の椀形鍛冶滓。上下面が生きており、左寄りの側面に小破面をもつ。含鉄部は上半寄りの中核部。破面の突出部も含鉄である。長者屋敷遺跡周辺では、含鉄で極小の椀形鍛冶滓が目立ち、米子市の調査城の諏訪西土取場遺跡などとも共通する要素をもつ。
	F13	29	37	A区 C4 Ⅱ層	鉄製品(鍛造品)三角形鉄片	3.2	1.5	0.48	4	2	錆化(△)	半月形の平面形をもつ薄板状の鉄製品。右上手側が直線状にとぎれており、三角形鉄片または、刀子の破片か。薄板状で全体ねじられたような形状を示す。厚みは背側が厚く、下手側は刃部様。透過X線像では、刀子の先端部破片の様にもみえる。
	F14	27	37	A区 C3 Ⅲ層	鉄製品(鍛造品)未製品？(刀子)	7.8	1.0	0.9	19	3	錆化(△)	長方形断面をした棒状の鉄製品。断面形や頭部が確認されないことから、釘ではないと推定される。鍛造痕は比較的直線状で、作りはほぼ良い。頭部側は破面部の様にも自然面の様にも見える。側部側は丸味をもって収束する。刀子等の未成品ないしは棒状の鉄製品の端部破片か。
坂長下屋敷遺跡	F15	37	47	B区 Q43 SB3P13 詰土	鍛冶滓(含鉄)	2.45	1.35	1.6	6	2	錆化(△)	小塊状の含鉄の鍛冶滓。含鉄部はごく僅かで、外周部の酸化土砂により実際より大きくなっている。含鉄部は右側部寄りの中核部。
	F16	39	52	B区 Q43 SD2	鉄製品(鍛造品)薄板状飾金具(釘穴付き)	7.65	4.6	1.1	23	4	錆化(△)	幅4.4cm程のごく薄い板状の鉄製品。隅丸長方形ぎみの平面形で、一カ所明瞭な釘穴が確認される。右側部の8割方が破面となっており、一部釘穴状にみえる部分もある。ただし、保存処理のためはっきりしたものではない。むしろ透過X線像では、明瞭な釘穴から左方向に2.3cmの位置に、かすかな釘穴状の痕跡が確認される。形態や厚みからみて、武具というよりも、釘穴付きの飾り金具的な鉄製品であろう。厚みが薄いためか、全般に銹化が進んでいる。
	F17	38	51	B区 Q43 SD2	鍛冶滓(含鉄)	4.95	3.15	1.9	27	3	錆化(△)	酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。ほぼ完形品で、破面の可能性は左側部のみ。中核部に含鉄部が広いためか、表面全体が黒錆化している。左側部上手の突出部は錆膨れ。鍛冶鉄塊系遺物の銹化が進んだものかもしれない。
	F18	40	51	B区 Q43 SD1	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	3.95	3.05	2.6	43	3	錆化(△)	小型の椀形鍛冶滓の側部破片。左側部と下手側が破面となる。滓は緻密で、含鉄部は分散ぎみ。小破片ではあるが厚みがあり、小型の椀形鍛冶滓が母体と判断した。
	F19	36	53	A区 S44 ピット列	椀形鍛冶滓(極小)	3.9	2.85	1.85	23	1	なし	極小の椀形鍛冶滓。一見、炉壁様で、下面には灰から褐色の鍛冶炉の炉床土が点々と付着している。破面は側部に僅か。滓質はやや粘土質で、炉壁土由来の石英質の石粒も確認される。
	F20	42	61	B区 Q43 層位不明	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	4.1	4.1	1.05	17	3	錆化(△)	密度の低い極小の椀形鍛冶滓または、小型の椀形鍛冶滓の表皮破片。小さな凹凸や気孔が密集し、部分的に木炭も噛み込んでいる。裏面の一部に粘土質由来の滓部が確認され、鍛冶炉の炉壁表面破片の可能性も残されている。
荒神上遺跡	F21	1	67	西地区 職場状遺構	椀形鍛冶滓(極小)	3.5	5.2	1.65	21	1	なし	1cm前後の厚みをもつ極小の椀形鍛冶滓の側部破片。上手側の側面が直線状の破面となる。下手側の肩部に突出部有り。下面には灰色の鍛冶炉の床土やスコリアが固着する。
	F22	2	67	西地区 職場状遺構	椀形鍛冶滓(極小)	3.6	2.95	1.8	24	2	なし	平面、不整楕円形をした極小の椀形鍛冶滓。下面には灰色から褐色の粘土質の強い炉床土が固着する。破面は左寄りが主体。小型の椀形鍛冶滓の肩部片の可能性がある。
	F23	3	67	西地区 職場状遺構	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	3.0	2.45	1.55	14	2	錆化(△)	薄手で左右方向に向かう楕状の断面形をした極小の椀形鍛冶滓。上面は工具痕状に窪み、下面は逆に突出する。右側部は不自然に途切れ、やや破面気味。含鉄部は各所に小塊状に分散する。

第10表　鉄関連遺物観察表（２）

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層位	遺物名	計測表(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考
荒神上遺跡	F24	4	67	西地区職場状遺構	粘土質溶解物(鍛冶系)	2.4	1.95	1.85	4	1	なし	右下手側の端部がやや錆色の強い粘土質溶解物破片。8割方が黒色ガラス質に滓化して、表面には木炭痕が残る。鍛冶羽口の先端部の溶解物か。
	F25	5	67	西地区職場状遺構	鍛冶滓(含鉄)	2.5	1.75	1.4	4	2	錆化(△)	左側面に灰色の炉壁土が残る鍛冶滓片。部分的にガラス化しており、含鉄部はごく小範囲。鍛冶炉の炉壁表面破片に近い。
	F26	9	67	西地区職場状遺構	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	3.7	2.05	1.15	2	2	錆化(△)	鉄主体の椀形鍛冶滓と推定される個体の表面破片。外周部は酸化土砂で、内部は全体が鉄錆化部となる。構成№8とは別個体ながら類似品か？
	F27	7	67	西地区職場状遺構	鍛冶鉄塊系遺物	3.55	3.1	2.05	29	5	L(●)	逆L字状の平面形を持つ鍛冶鉄塊系遺物。上手側の端部に小破面がある以外は完形か。表面には滓部が残るが、中核部は全体に鉄部となる。表面には黒錆の滲みと小さな放射割れが始まっている。
	F28	8	67	西地区職場状遺構	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	3.9	3.7	2.65	52	5	M(◎)	厚い酸化土砂に囲まれた極小の椀形鍛冶滓。中核部は鉄部で、鍛冶鉄塊系遺物に近い。外周部の錆化が進み、酸化土砂部分が分解しつつある。西地区職場状遺構の鉄関連遺物は、9点のいずれもが鍛冶炉を用いた鍛錬鍛冶の明瞭なセットを為す。
	F29	6	67	西地区職場状遺構	粘土質溶解物(鍛冶系)	1.3	2.2	0.5	6	1	なし	下面全体と側面の一部が破面となった粘土質溶解物破片。上面は全体に波状で、窪んだ部分には木炭痕が残されている。ガラス質滓主体で、裏面には花崗岩質の石片を巻き込んでいる。金床石の破片の可能性がある。鍛冶炉の羽口周りの炉壁表面破片か。
	F30	10	68	東地区B柱穴	鉄製品(鍛造品)釘	7.1	1.0	1.3	20	4	錆化(△)	足部の先端が欠落した中型の釘。頭部は方頭の頭折れ釘状で、足部に向かい弧状に折れ曲がっている。釘全体の作りや黒錆の状況から古代以降のやや新しいものかと推定できる。
	F31	11	68	東地区土坑2号トレンチ	鉄製品(鍛造品)刀装飾(つり手金具)	4.0	1.3	0.4	6	3	錆化(△)	中間部分に薄板状の錆化した金属部分を斜めに残すつり手金具。頭部に向かい広がりをもち、その中央部に紐穴が残されている。足部は左右方向に1.7cm程の長さで延びる小さな丸棒状。錆化が進んでおり表面の酸化土砂もやや多い。古代の官人も所持する直刀の装具とみられる。
	F32	12	68	東地区土坑2号トレンチ	鉄製品(鍛造品)	3.9	1.0	0.9	6	4	錆化(△)	何らかの工具の茎片か。体部は方柱状で、径は8cm強。足先端部側に向かい細くなっている。外面の2面にまたがって、薄紙が少なくとも3重に巻かれている。表面には細い線で漢字らしき文字が2字確認される(○広？)。黒錆が目立ち、古代というよりは、近・現代の可能性が高いが、特殊な資料の為、取り上げている。
	F33	15	68	西地区竪穴住居外溝	鉄製品(鍛造品)ヤリガンナ？	8.1	1.5	1.0	42	4	錆化(△)	長方形の断面形をもつヘラ状の鉄製品。酸化土砂がこぶ状に発達して、不明点も多い。透過X線像では長さ8cm、最大幅1.15cmの鉄部がきれいに示されている。鍛造は丁寧で先端部側(上手側)は仕上がりが良い。一応、ヤリガンナ？としているが、基部側は平坦に成形されており、ヘラ状鉄製品とすべきかもしれない。
	F34	14	68	西地区竪穴住居外溝	鉄製品(鍛造品)角棒状不明品(馬具)	3.9	1.0	0.7	8	3	錆化(△)	左右の端部が破面となった、角棒状の不明鉄製品破片。酸化土砂が厚く、不明点もやや多い。中間部分で90°断面方向が変えられており、破面からみると、右半分が何らかの工具の刃部で左半分が体部または、茎部と推定される。外観的には長頭鏃様ながら、透過X線像ではそうはみえない。
	F35	13	68	西地区竪穴住居外溝	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	4.0	2.8	2.0	39	4	錆化(△)	2cm強の厚みをもつ小型の椀形鍛冶滓の側部破片。上下面と右側部が生き、左側部が大破面となる。滓の密度は高く、やや比重が高い。下面には、短軸方向に向かう筋状の窪みを残す。含鉄部はやや下手よりの中核部。
大殿所在遺跡	F36	43	69	古代包含層	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	5.7	5.0	3.3	143	5	錆化(△)	中型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。主破面は右側部と下手側。下面の中央部が短軸方向に向かい棒状に突出しており、磁着も強いため鍛冶具の先端または、鍛冶処理途上の鉄製品を巻き込んだものか。気孔も数多い。含鉄部は滓上面寄りに確認される。
	F37	44	69	古代包含層	鉄製品(鍛造品)釘？	8.3	0.9	0.7	15	6	M(◎)	長形の断面形をもつ釘または、棒状の鉄製品破片。頭部は生きている可能性があり、側部側は破面となっている。鍛造痕が甘く、不規則にひび割れが生じており、やや新しい時期の製品の可能性もある。刃部等は現状では確認できない。
大殿墓ノ谷遺跡	F38	45	70	古代包含層	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	8.7	5.15	2.85	154	3	錆化(△)	中型の椀形鍛冶滓の半欠品。右側部のみが破面で、上面左上手には炉壁土由来の粘土質の滓が付着している。肩部全体が突出し、右半分の下面がきれいな椀形をなす。上面には1cm大の木炭痕があり、下面は粉炭痕に覆われている。含鉄部は小範囲。
	F39	46	70	古代包含層	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	3.3	2.45	1.85	17	2	なし	上面に羽口先由来の粘土質の滓が残されている極小の椀形鍛冶滓。上面全体が破面で、肩部以下が生きている。さらに大きな椀形鍛冶滓の下面に突出した滓部の可能性有り。下面は付着物が無く、きれいな滓の自然面が露出している。滓質はやや密度が低く、中核部に小範囲の含鉄部があるものと推定される。
	F40	48	70	古代包含層	鍛冶滓(含鉄)	3.3	1.8	0.9	10	3	錆化(△)	小塊状の含鉄の鍛冶滓。ほぼ完形で、しっかりとした破面は認められない。表面には部分的に錆膨れがあり、黒錆の滲みや放射割れが生じている。上面の磁着が強く、鍛冶素材の遊離片か。構成№5(47)よりは滓部が広い。
	F41	47	70	古代包含層	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	4.6	3.25	1.1	27	3	錆化(△)	扁平な極小の椀形鍛冶滓。短軸側の端部が破面で、それ以外は生きている。上面はゆるやかな丸味を持った平坦面で、短軸方向にのびる浅い樋状となる。含鉄部は中核部に広く分散する。気孔がやや多く、破面はやや鉄錆化物様。
	F42	49	70	古代包含層	鍛冶鉄塊遺物	2.75	1.95	1.4	12	4	M(◎)	そら豆状の外観を持つ鍛冶鉄塊系遺物。完形品で外周部には酸化土砂が取り巻く。磁着は強いが、錆化も進んでいる可能性が高い。やや丸味を持っており、すでに1回以上の鍛冶処理がなされた小鉄塊か。
	F43	50	70	古代包含層	鉄製品(鍛造品)刀子	9.2	1.4	0.5	13	3	錆化(△)	両関の刀子破片。刃部の中央部で2つに割れており、茎の先端部も欠落する。刃部は使い込まれて先端部が細くなる。茎部は強い力が加わったものか、弧状に曲がる。錆化は刃部側が激しい。
	F44	51	70	古代包含層	鉄製品(鍛造品)刀子？	3.5	1.5	0.4	9	3	錆化(△)	左右の側部が欠落した刀子様の鉄製品破片。刀子とすれば、刃部がまだ広めの部位で、切先側とは考えにくい。なお、構成№6(48)とは別個体。表面には酸化土砂が厚く、一部、錆膨れも生じている。
	F45	52	70	古代包含層	鉄製品(鍛造品)ヤリガンナ？(四方関)	9.8	1.0	0.7	18	3	錆化(△)	3片に割れている細身の鉄製品。先端部も欠落する。細身の工具または鏃と推定されるが、刃部側のつくりからみれば前者の可能性が高い。ヤリガンナの一種、あるいは鑿状のものか。先端部の反り上がりはやや急激で、二次的な可能性が高い。工具とすれば茎部が1.2cm程しかなく、かなり短い印象を受ける。
	F46	53	70	古代包含層	鉄製品(鍛造品)ヤリガンナ？	4.7	0.6	0.4	6	3	錆化(△)	端部が上に反り上がる鉄製品破片。構成№8(50)の先端部とよく似ているが、接合はせず。別個体と考えられるがよく似ている。下手側は方形の破面が露出しているが、実際よりか錆膨れのため膨らんでおり、本来はもう少し扁平な可能性がある。但し、本遺跡からはよく似た鉄製品が2点出土していることになる。
	F47	54	70	古代包含層	鉄製品(鍛造品)鎌(古鉄)	7.9	3.2	0.28	37	4	錆化(△)	平面、長手の三角形をした鎌状の鉄製品。両方の端部が急激に折り曲げられている。製品自体は鎌の体部から先端部にかけてと推定される。右側の折り曲げ方が斜め直線状で、一見、古墳時代前後の鎌を思わせるが、透過X線像ではこの部分が2.5cm程内側にのびており、刃部先端の形状から見ても、異なる形態の鎌と判断される。両端が内側に折り曲げられているのは、故鉄のためか。
	F48	55	70	古代包含層	鉄製品(鍛造品)棒状不明	2.9	0.4	0.4	2	3	錆化(△)	一見、頭部様の膨らみをもつ細身の棒状不明品。膨らみの部分は錆膨れで、透過X線像は先端部に向かい弧状となっている。端部の両側とも破面。小釘の可能性もあるが、現状では不明。横断面形は方形。
	F49	56	70	古代包含層	鉄製品(鍛造品)棒状不明	4.2	0.7	0.5	7	3	錆化(△)	酸化土砂に囲まれ、全体が大きくなってしまっている棒状不明品。透過X線像では両端部が欠落した棒状に見える。横断面形は方形となる。特定の鉄製品名は判断できない。



第71図　鉄関連遺物構成図（1）



第72図　鉄関連遺物構成図（２）